埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第16集

関越自動車道関係

埋蔵文化財発掘調査報告

—XIV—

沼下・平原・新堀・中山・お金塚
中井丘・鶴巻・水久保・狢久保遺跡

1982

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県は首都圏の一端を担い、各種開発事業が進行し、大きく変貌を遂げております。

関越自動車道は県南西部から北部の約71キロメートルを縦貫する高速道路で、すでに県内全域が完成し、昭和55年に供用が開始されております。

周知のように、寄居町には多くの文化財包蔵地があり、日本道路公団との慎重な協議を重ねましたが、9か所の遺跡についてはやむなく発掘調査を実施し、記録保存することになりました。

調査は日本道路公団の委託を受けて、埼玉県教育委員会が直営で行ない、整理作業は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が、引き続き公団の委託を受け実施したものであります。

本書は、寄居町所在の沼下・平原・新堀・中山・お金塚・中井丘・鶴巻・水久保・狢久保遺跡の発掘調査報告書であります。本書の刊行に当たり多くの方々からの御協力、御指導をいただきました。

ここに、日本道路公団東京第二建設局、同東松山工事事務所、寄居町教育委員会及び地元関係者の方々に改めて深く感謝いたします。

昭和57年3月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長　長　井　五　郎

例　　言

1　本書は関越自動車道（東松山―上里）にかかる発掘調査のうち、大里郡寄居町にある遺跡（沼下・平原・新堀・中山・お金塚・中井丘・鶴巻・水久保・狢久保遺跡）の発掘調査報告書である。

2　調査事業は日本道路公団の委託により、埼玉県教育委員会が昭和51・52年度に実施したものである。なお、発掘調査の組織は４頁に示した。

3　発掘調査は埼玉県教育局文化財保護課第三係があたり、増田逸朗、駒宮史朗、笹森健一、今井宏が担当した。

4　出土品の整理及び図の作成は増田逸朗、大和修、今井宏、鈴木仁子が主にあたった。遺物写真は谷井彪、坂野和信があたった。調査における写真は小島滋の協力があった。

5　本書の執筆は横川好富、駒宮史朗、大和修、今井宏、鈴木仁子があたった。分担は次のとおりである。

横川　Ⅰ、駒宮Ⅵ、Ⅹ―４
大和　Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅹ―１
今井　Ⅲ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ、Ⅹ
鈴木　Ⅴ、Ⅹ―２、３

6　沼下遺跡井戸跡採取資料分析報告はパリノ・サーヴェイに委託した。
　中山遺跡１号住居跡出土鉄滓の調査は大澤正己氏にお願いした。
　石質鑑定は埼玉県立自然史博物館学芸員本間岳史氏、獣骨鑑定は同、坂本治氏にお願いした。

7　本書の編集は埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査研究第四課があたり、横川好富が監修した。

目　　次

序

例言

Ⅰ　調査に至るまでの経過…… 1

Ⅱ　沼下・平原・新堀・中山・お金塚・中井丘・鶴巻・
水久保・狢久保遺跡の調査経過…… 6

Ⅲ　遺跡の立地と環境…… 7

Ⅳ　沼下遺跡の発掘調査

1　遺跡の概観……10

2　遺構と出土遺物……12

Ⅴ　平原遺跡の発掘調査

1　遺跡の概観…… 101

2　遺構と出土遺物…… 103

Ⅵ　中山遺跡の発掘調査

1　遺跡の概観…… 113

2　遺構と出土遺物…… 115

Ⅶ　おかね塚遺跡の発掘調査…… 122

Ⅷ　中井丘遺跡の発掘調査…… 128

Ⅸ　鶴巻遺跡の発掘調査…… 134

Ⅹ　結語

1　沼下・平原遺跡出土土器について…… 161

2　掘立柱建物について…… 165

3　陶硯と墨書土器について…… 169

4　中山遺跡の遺構と遺物について…… 184
5　鶴巻遺跡の風倒木痕について…… 186
6　沼下遺跡井戸跡採取資料分析報告…… 188
7　中山遺跡１号住居跡出土鉄滓の調査…… 193

挿　図　目　次

第１図　遺跡分布図（縄文時代）（折り込み）
第２図　遺跡分布図（奈良・平安時代）（折り込み）
第３図　沼下・狢久保・平原遺跡地形図　10
第４図　沼下遺跡全測図　11
第５図　沼下１号住居跡実測図　13
第６図　１号住居跡出土遺物実測図（１）　15
第７図　１号住居跡出土遺物実測図（２）　17
第８図　沼下２号住居跡実測図　20
第９図　２号住居跡出土遺物実測図　21
第10図　沼下３号住居跡実測図　24
第11図　３号住居跡出土遺物実測図（１）　25
第12図　３号住居跡出土遺物実測図（２）　26
第13図　沼下４号住居跡実測図　29
第14図　４号住居跡出土遺物実測図　30
第15図　沼下５号住居跡実測図　33
第16図　５号住居跡出土遺物実測図　35
第17図　沼下６号住居跡実測図　37
第18図　６号住居跡出土遺物実測図　37
第19図　沼下７号住居跡実測図　39
第20図　７号住居跡竈実測図　40
第21図　７号住居跡出土遺物実測図（１）　41
第22図　７号住居跡出土遺物実測図（２）　43
第23図　沼下８号住居跡実測図　47
第24図　８号住居跡出土遺物実測図　49
第25図　沼下９号住居跡実測図　51
第26図　９号住居跡出土遺物実測図　51
第27図　沼下10号住居跡実測図　52
第28図　10号住居跡出土遺物実測図　53
第29図　沼下11号住居跡実測図　55
第30図　11号住居跡出土遺物実測図　56
第31図　沼下12号住居跡実測図　57
第32図　12号住居跡出土遺物実測図　59
第33図　沼下13号住居跡実測図　60
第34図　13号住居跡出土遺物実測図　61
第35図　沼下14・15号住居跡実測図　62
第36図　14号住居跡出土遺物実測図　63
第37図　15号住居跡出土遺物実測図　64
第38図　沼下16号住居跡実測図　65
第39図　16号住居跡出土遺物実測図　67
第40図　沼下17号住居跡実測図　68
第41図　17号住居跡出土遺物実測図　70
第42図　沼下18号住居跡実測図　71
第43図　18号住居跡出土遺物実測図　72
第44図　沼下19号住居跡実測図　73
第45図　19号住居跡出土遺物実測図　75
第46図　沼下20号住居跡・５号土壙実測図　76
第47図　20号住居跡出土遺物実測図　77
第48図　沼下21号住居跡実測図　78
第49図　21号住居跡出土遺物実測図　79
第50図　沼下22号住居跡実測図　80
第51図　22号住居跡出土遺物実測図　81
第52図　沼下23号住居跡実測図　82
第53図　沼下24号住居跡実測図　83
第54図　24号住居跡出土遺物実測図　84
第55図　沼下１・２・３・４号土壙実測図　85
第56図　沼下５・６・７・８号土壙実測図　86
第57図　沼下井戸跡実測図　88
第58図　沼下１～４号溝出土遺物実測図　89
第59図　沼下グリッド出土遺物実測図（１）　91
第60図　グリッド出土遺物実測図（２）―１　93
第61図　グリッド出土遺物実測図（２）―２　95
第62図　グリッド出土遺物実測図（２）―３　97
第63図　グリッド出土縄文式土器　99
第64図　沼下遺跡出土鉄器実測図　101
第65図　平原遺跡全測図　102
第66図　平原１号住居跡実測図　104
第67図　１号住居跡出土遺物実測図　104
第68図　平原２号住居跡出土遺物実測図　105
第69図　２号住居跡実測図　106
第70図　平原３号住居跡実測図　109
第71図　３号住居跡出土遺物実測図　110
第72図　平原掘立柱建物跡・グリッド出土遺物実測図　112
第73図　掘立柱建物跡実測図　（折り込み）
第74図　中井丘・中山遺跡地形図　113
第75図　中山遺跡全測図　114
第76図　中山１号住居跡実測図　116

第77図　1号住居跡出土遺物実測図(1)　117
第78図　1号住居跡出土遺物実測図(2)　119
第79図　1号炭焼窯実測図　120
第80図　中山2・3号炭焼窯実測図(折り込み)
第81図　中山グリッド出土石器実測図　121
第82図　お金塚遺跡地形図　122
第83図　お金塚全測図　124
第84図　お金塚土層断面図　125
第85図　お金塚全測図　126
第86図　お金塚出土遺物実測図　127
第87図　中井丘遺跡全測図　128
第88図　中井丘グリッド出土縄文式土器実測図　129
第89図　グリッド出土石器(1)実測図　130
第90図　グリッド出土石器(2)実測図　131
第91図　グリッド出土石器(3)実測図　132
第92図　鶴巻遺跡地形図　134
第93図　鶴巻遺跡全測図（S＝1/400）　135
第94図　鶴巻遺跡基本層序図　136
第95図　鶴巻遺跡剝片集中区出土石核　137
第96図　鶴巻遺跡剝片集中区遺物分布図　138
第97図　鶴巻遺跡土壙1～5実測図　139
第98図　土壙6～8実測図　140
第99図　土壙5出土石器実測図　140
第100図　鶴巻遺跡溝全測図　141
第101図　鶴巻遺跡1・2号塚全測図　142
第102図　3号塚全測図　144
第103図　1・2・3号塚土層断面図　145
第104図　鶴巻遺跡風倒木痕1類　147
第105図　風倒木痕1・2類　148
第106図　風倒木痕2類　149
第107図　風倒木痕3類　150
第108図　風倒木痕3類　151
第109図　鶴巻グリッド出土縄文式土器実測図　152
第110図　グリッド出土石器実測図(1)　153
第111図　グリッド出土石器実測図(2)　154
第112図　グリッド出土石器実測図(3)　156
第113図　グリッド出土石器実測図(4)　157
第114図　グリッド出土石器実測図(5)　158
第115図　グリッド出土石器実測図(6)　159
第116図　沼下・平原遺跡出土硯・墨書実測図　174
第117図　埼玉県奈良・平安時代遺跡地図　180
第118図　鶴巻遺跡風倒木痕方位　186
第119図　鶴巻遺跡風倒木痕規模　187

写真図版目次

図版１　(上)沼下遺跡遠景
　　(下)発掘区全景
図版２　(上)沼下１号住居跡
　　(下)沼下２号住居跡
図版３　(上)沼下３号住居跡
　　(下)３号住居竈跡
図版４　(上)沼下４号住居跡
　　(下)沼下５号住居跡
図版５　(上)沼下６号住居跡
　　(下)沼下７号住居跡
図版６　(上)７号住居竈跡
　　(下)沼下８号住居跡
図版７　(上)８号住居竈跡
　　(下)沼下９号住居跡
図版８　(上)沼下10号住居跡
　　(下)10号住居竈跡
図版９　(上)10号住居跡・１号溝
　　(下)沼下11号住居跡
図版10　(上)沼下12号住居跡
　　(下)沼下13号住居跡
図版11　(上)沼下14・15号住居跡
　　(下)沼下15・16号住居跡
図版12　(上)沼下17号住居跡
　　(下)沼下18号住居跡
図版13　(上)沼下19号住居跡
　　(下)19号住居竈跡
図版14　(上)沼下21号住居跡
　　(下)沼下22号住居跡
図版15　(上)沼下24号住居跡
　　(下)24号住居竈跡
図版16　(上)沼下井戸跡
　　(下)沼下１号土壙
図版17　(上)沼下２号土壙
　　(下)沼下３号土壙
図版18　(上)沼下６・７・８号土壙
　　(下)沼下１・５号溝・23号住居跡
図版19　(上)沼下２・３号溝
　　(下)沼下４号溝
図版20　沼下１・２号住居跡出土土器
図版21　沼下３号住居跡出土土器
図版22　沼下３・４・５号住居跡出土土器
図版23　沼下５・７・８号住居跡出土土器
図版24　沼下８・９・10・11号住居跡出土土器
図版25　沼下12～17号住居跡出土土器
図版26　沼下17・20・22号住居跡出土土器
図版27　沼下24号住居跡・グリッド出土土器
図版28　沼下グリッド出土土器・その他の遺物
図版29　(上)沼下灰釉陶器
　　(下)沼下鉄製品
図版30　(上)沼下砥石
　　(下)沼下磨石・石皿等
図版31　沼下円面硯・墨書
図版32　沼下グリッド出土縄文式土器
図版33　(上)平原１号住居跡
　　(下)平原１号住居跡・竈
図版34　(上)平原２号住居跡
　　(下)平原掘立柱建物跡
図版35　平原１・２号住居跡出土土器
図版36　平原２・３号住居跡出土土器
図版37　平原遺跡出土転用硯・墨書
図版38　(上)中山１号住居跡
　　(下)中山１号住居跡・竈
図版39　(上)中山１号炭焼窯
　　(下)中山２号炭焼窯全景
図版40　(上)中山２号炭焼窯
　　(下)中山３号炭焼窯全景
図版41　中山３号炭焼窯
図版42　中山１号住居跡出土土器
図版43　(上)中山１号住居出土鞴羽口
　　(下)中山遺跡出土石器
図版44　(上)お金塚全景
　　(下)お金塚全景
図版45　(上)お金塚土層
　　(下)お金塚かわらけ出土状態
図版46　(上)お金塚出土鎌
　　(下)お金塚頂部庚申塔
図版47　(上)中井丘縄文式土器
　　(下)中井丘石器（１）

図版48 (上)中井丘石器(2)
(下)中井丘石器(3)
図版49 (上)鶴巻遺跡全景
(下)鶴巻剝片集中区遺物出土状態
図版50 (上)鶴巻土壙1
(下)鶴巻土壙2
図版51 (上)鶴巻土壙5
(下)鶴巻土壙7
図版52 (上)鶴巻1・2号塚全景
(下)鶴巻1・2号塚グリッド
図版53 (上)鶴巻3号塚
(下)鶴巻3号塚トレンチ
図版54 (上)鶴巻風倒木痕5
(下)鶴巻風倒木痕12
図版55 (上)鶴巻風倒木痕7
(下)鶴巻風倒木痕7土層
図版56 (上)鶴巻風倒木痕11
(下)鶴巻風倒木痕11
図版57 (上)鶴巻風倒木痕17完掘後全景
(下)鶴巻風倒木痕調査風景
図版58 (上)鶴巻剝片集中区出土石核
(下)鶴巻土壙5出土石器
図版59 (上)鶴巻2号塚出土馬歯
(下)鶴巻3号塚出土馬歯
図版60 (上)鶴巻縄文式土器
(下)鶴巻石器(1)
図版61 (上)鶴巻石器(2)
(下)鶴巻石器(3)
図版62 (上)鶴巻石器(4)
(下)鶴巻石器(5)
図版63 鶴巻石器(6)
図版64 沼下井戸内覆土検出花粉胞子化石
図版65 (上)沼下№1井戸内覆土(ローム塊)
(下)沼下№2井戸内覆土
図版66 (上)沼下遺跡出土炭化材顕微鏡組織
(下)中山遺跡出土炭化材顕微鏡組織
図版67 沼下遺跡井戸出土種子
図版68 (上)中山1号住居跡出土鉄滓顕微鏡組織(100倍)
(下)中山1号住居跡出土羽口№19実測図(1/2)

I　調査に至るまでの経過

関越自動車道新潟線は、東京都練馬区を起点として、本県の川越市・東松山市・上里町を経て群馬県・新潟県新潟市に至る310㎞の高速道路である。すでに、東京川越市間は、昭和46年12月に、また、川越市東松山市間は昭和50年8月に供用が開始されている。埼玉県内のこの供用区間の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査は、東京川越市間2遺跡を埼玉県遺跡調査会が、また、川越市・東松山市の12遺跡を埼玉県教育委員会が直営で実施し、すでに調査報告書が刊行されているところである。

さて、東松山市から県境の児玉郡上里町に至るいわゆる東松山以北については、昭和44年4月埼玉県行政推進対策委員会高速自動車道部会幹事会において、5万分の1の地形図に基本計画ルートが示された。この案を、昭和36年度に実施した、埼玉県埋蔵文化財包蔵地分布図と照合すると、20箇所の遺跡と、埼玉県指定史跡杉山城跡（嵐山町）と十条条里遺跡（美里村）が含まれていた。

そこで、この基本ルートに対する文化財保護側の意見を次のようにとりまとめ、高速自動車道部会長（企画部長）あて提出した。

1　県指定史跡杉山城跡、県指定史跡十条条里遺跡のルートの変更を検討されたい。

2　その他のルート内に所在する埋蔵文化財については、事前調査、発掘調査等により対処可能と思われる。

3　出土品が多量にあると予想されるので、資料館陳列館等の建設による保存について考慮してもらいたい（サービスエリア内でも可）。

4　当面事前調査が必要となる関係箇所が多いので、計画的に調査できるよう検討する必要がある。

関越自動車道東松山以北のルートは、丘陵上・丘陵裾部・平野地帯を約36キロメートルにわたって建設されるもので、かなり多くの埋蔵文化財包蔵地が所在するものと予想されたので、昭和45年度、文化庁から国庫補助金の交付を受けて、改めて分布調査を実施した。この調査は、県内の考古学研究者を調査員に委嘱して実施したもので、基本計画ルートの東西約2キロメートルの範囲を対象にした。その結果、244箇所の遺跡が確認され、ルートをどのように変更しても、かなりの遺跡が建設用地内に入ることが確実となった。

昭和45年5月、埼玉県行政推進対策委員会高速道路部会幹事会において、建設省関東地方建設局から、5千分の1の図面によるルート説明、さらに、本年6月上旬には、日本道路公団に事業を委託することになっている、との説明があった。一方、この5千分の1ルート図は、県道路建設課にある地図によって各課が検討することにし、重大な支障のある場合は、5月中に、県企画課を通して建設省へ通知することになった。

それから約1年が経過。昭和46年4月、行政推進委員会高速道路部会幹事会において、関越自動車道建設計画にかかる東松山市～上里町間の関連公共事業調査について日本道路公団との打ち合わせ会が行われ、同年8月以降、関係各課による調査が開始された。この年、県教育局内の組織改正が行われ、社会教育課から文化財係が分離し、文化財保護室が新設され、まだ日本道路公団高速道路建設局

と協議の最中であった関越自動車道川越市～東松山市間と平行して、文化財第二係がこの事務に当たった。さて、関連公共事業調査で、文化財保護室が担当した調査は、５万分の１の地形図上にルート案のセンター両側２キロメートル、さらに２千分の１の平面図でセンターの両側100メートルに所在する埋蔵文化財を調べることであった。この調査の結果、５万分の１の地形図を利用したセンター両側２キロメートルでは112箇所の埋蔵文化財が、またセンターの両側100メートルの範囲では、23箇所の埋蔵文化財が含まれていることを確認し、一応この結果を日本道路公団に通知し、埋蔵文化財については、損傷を最少限度にとどめてルートを決定するよう要望した。

この間、日本道路公団は、県指定史跡杉山城跡及び十条条里遺跡をルートから大きくはずす努力がなされた。

昭和47年４月、日本道路公団高速道路建設局から千分の１平面図（設計図）が届けられ、本線内の遺跡分布確認調査が文化財保護室第二係の職員によって東松山側と上里町側からの二班に分かれてセンター杭をたどって幅約100メートルの範囲内で行われ、時期的に地上観察の困難な寄居町の一部を後日に残して、一応次の17箇所を日本道路公団に提示した。

遺跡番号	遺跡名称	所在地	種別	時代
滑川１号	屋田遺跡	比企郡滑川村大字月輪字西新井	古墳群	古墳
滑川２号	寺ノ台遺跡	比企郡滑川村大字水房字寺の台	塚	
嵐山１号	越畑城跡	比企郡嵐山町大字越畑字城山	館城跡	戦国
寄居１号	お金塚	大里郡寄居町大字鷹巣	塚	
花園１号	台耕地遺跡	大里郡花園村大字黒田	集落跡・古墳群	縄文・古墳
寄居２号	新堀遺跡	大里郡寄居町大字用土字新堀	塚	
寄居３号	沼下遺跡	大里郡寄居町大字用土字沼下	集落跡	奈良・平安
岡部１号	清水谷遺跡	大里郡岡部町大字本郷字北坂	集落跡	縄文・古墳・奈良
岡部２号	安光寺古墳群	大里郡岡部町大字本郷字清水谷 児玉郡美里村大字古郡字石神	古墳群	古墳
美里１号	塚本山古墳群	児玉郡美里村大字下児玉字西山	古墳群	古墳
児玉１号	雷電下遺跡	児玉郡児玉町大字浅見字雷電下	集落跡	古墳・奈良・平安
児玉２号	飯玉東遺跡	児玉郡児玉町大字下浅見字飯玉東	集落跡	古墳・奈良・平安
児玉３号	女堀条里遺跡	児玉郡児玉町大字下浅見字四方田前 本庄市四方田字堰場	条里跡	奈良・平安
上里１号	本郷東遺跡	児玉郡上里町大字七本木字本郷下	集落跡	奈良
上里２号	愛宕遺跡	児玉郡上里町大字七本木字愛宕耕地	集落跡	古墳
上里３号	中堀遺跡	児玉郡上里町大字堤字中堀北	集落跡	奈良・平安
上里４号	若宮台遺跡	児玉郡上里町大字帯刀字堀の内	集落跡	奈良・平安

日本道路公団の用地買収および工事計画案の整ってきた昭和48年２月、高速道路建設局及び東松山工事事務所と、工事発注予定と埋蔵文化財についての打合せせわ会が行われた。東松山以北の工事区は、東松山側から滑川・嵐山・寄居・花園・美里・上里の六工区に分かれており、工事発注は、48年11月上里工区から始まるという。ここで問題となったのは、48年度に発掘調査を実施しなければなら

ないとなると、関越自動車道川越市～東松山市間で発掘調査した遺跡の整理報告書刊行事業とかち合って調査員が大幅に不足することになる。そこで、今後の工事発注計画と発掘調査を要する遺跡との関係を詳細に検討し、調査員の人員増に関する資料を整え、教育局内人事担当課と協議を開始した。

その後、公団側と48年度に調査事業を開始する方針で、細部の協議がもたれ、発掘調査から整理報告書刊行に至る調査事業年次もほぼ了解点に達した。

昭和48年4月7日付け東建総総第222号で、日本道路公団高速道路建設局長から、埼玉県教育委員会を経由して、文化庁長官あて、昭和42年9月30日付で締結した「日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」の第1項に基づく協議が行われ、埼玉県教育委員会は「当該地内に所在する埋蔵文化財については、公団と十分協議し、記録保存のための発掘調査を実施する」との副申を付け、文化庁に進達した。

これについて、文化庁は、昭和48年6月2日付け委保第59号で「当該施行地内の遺跡については工事前に発掘調査を実施すること。重要な遺構を発見した場合には、設計変更等によりその保存に配慮すること。」と回答した。

問題となっていた調査員の人員増も解決し、調査体制も整い、上里町地内の4遺跡の調査経費が48年9月、県議会に上程可決され、昭和48年9月25日付けで日本道路公団東京建設局長あて、発掘調査の実施について、昭和48年度計画書を添えて通知し、10月25日、上里1号（本郷東遺跡）をトップに関越自動車道東松山～上里町間約36キロメートルに所在する埋蔵文化財包蔵地の調査が開始された。

発掘調査を進める一方、山林や宅地等、時期的に地上観察の困難な場所についても、随時確認調査を進めた。その結果、新たに次の11箇所が確認され、その都度、日本道路公団に提示し、発掘調査を実施した。

遺跡番号	遺跡名称	所在地	種別	時代
嵐山2号	下郷遺跡	比企郡嵐山町大字広野字中野	集落跡	縄文
寄居5号	中井丘遺跡	大里郡寄居町大字用土字中井丘		縄文
寄居6号	中山遺跡	大里郡寄居町大字用土字中山	炭焼窯	平安
寄居7号	狢久保遺跡	大里郡寄居町大字用土字狢久保		縄文
寄居8号	平原遺跡	大里郡寄居町大字用土字平原	集落跡	奈良・平安
寄居9号	鶴巻遺跡	大里郡寄居町大字赤浜字鶴巻	集落跡	縄文・平安
岡部3号	北坂遺跡	大里郡岡部町大字本郷字北坂	古墳群・集落跡	縄文・古墳
美里2号	甘粕山遺跡	児玉郡美里村大字甘粕字東山	集落跡	縄文・古墳・平安
児玉4号	後張遺跡	児玉郡児玉町大字下浅見字下モ田 本庄市大字四方田字塚場	集落跡	古墳
上里5号	耕安地遺跡	児玉郡上里町大字堤字中堀北	寺院跡	平安・鎌倉
上里6号	久城前遺跡	児玉郡上里町大字嘉美字一本松西 本庄市大字今井字久城前		奈良・平安

発掘調査の組織

1 発　掘（昭和51年度）

主体者	埼玉県教育委員会	教育長	石田正利
事務局	埼玉県教育局文化財保護課	課長	柳田敏司
		課長補佐	野村鍋一
企画調整	埼玉県教育局文化財保護課	文化財第二係長	早川智明
			塩野博
			柿沼幹夫
			本間岳史
庶務経理	埼玉県教育局文化財保護課	庶務係長	長谷川清
			太田和夫
			千村修平
発掘	埼玉県教育局文化財保護課	文化財第三係長	横川好富
			水村孝行
			駒宮史朗
		（嘱託）	笹森健一

2 発　掘（昭和52年度）

主体者	埼玉県教育委員会	教育長	石田正利
事務局	埼玉県教育局文化財保護課	課長	杉山泰之
		課長補佐	奥泉信
			木戸一恵
			秋葉一男（前）
企画調整	埼玉県教育局文化財保護課	文化財第二係長	栗原文蔵
			柿沼幹夫
			駒宮史朗
			井上尚明
庶務経理	埼玉県教育局文化財保護課	庶務係長	長谷川清
			太田和夫
			畔上敦志
			千村修平
発掘	埼玉県教育局文化財保護課	文化財第三係長	横川好富
			増田逸朗
			水村孝行
			今井宏

3 整　理

主体者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理事長	長井五郎
		副理事長	沼尻和也
		常務理事	渡辺澄夫
庶務経理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	管理部長	伊藤悦光
			関野栄一
			福田浩
			本庄朗人
整理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調査研究部長	横川好富
		調査研究第四課長	増田逸朗
			大和修
			今井宏
			鈴木仁子

4 協力者

大里郡寄居町教育委員会、地元区長及び地元住民

関越高速道関係遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査年	時代・遺構	報告・遺跡No.
A	内畑	新座市片山字池田	44	縄文前　住居跡9他　埼玉県遺跡調査会報告	第7集(1970)
B	城	所沢市城	44	縄文前　住居跡3、土壙　〃	第6集(1970)
1	南大塚	川越市豊田本字中原	46・47	古墳3基　埼玉県発掘調査報告書	第3集(1974)
2	中組	川越市的場字六畑	46	古墳・平安　土壙、溝	〃
3	上組	川越市笠幡字後大町	47	縄文早・弥生・古墳　住居跡14	〃
4	鶴ケ丘	川越市笠幡字下丹草	47	縄文・鎌倉　土壙、溝	〃
		鶴ケ島町鶴ケ丘字富士見			
5	花影	坂戸市花影	47	縄文中・奈良・平安　住居跡16、方形周溝墓8	〃
6	駒堀	東松山市田木字立野	46・48	弥生・古墳　住居跡35、方形周溝墓1、古墳2	第4集(1974)
7	田木山	東松山市田木字相生	47	古墳2基	第5集(1974)
8	弁天山	東松山市田木字弁天山	47	塚5基	〃
9	舞台	東松山市田木字舞台	46・48	古墳2基、縄文中・古墳住居跡11	〃
10	宿ケ谷戸	東松山市西本宿字宿ケ谷戸	47	中世　井戸2、溝	〃
11	附川	東松山市石橋字附川	47	古墳4基、古墳住居跡6、弥生後一括土器	〃
12	青鳥城	東松山市石橋字城山他	47	中世城郭　堀、溝、ピット群、地下式壙	第6集(1974)
13	屋田	滑川村月輪字西新井	53・54	弥生・古墳　古墳9基、住居跡21	滑川1号
14	寺之台	滑川村水房字寺の台	53・54	古墳・奈良　古墳1基、住居跡2、塚2基	滑川2号
15	中郷	嵐山町広野字中郷	53	縄文中　住居跡7、土壙、溝	嵐山2号
16	越畑城	嵐山町越畑字城山	52	中世城郭	嵐山1号
17	お金塚	寄居町鷹巣字西浦	52	塚1基	寄居1号
18	鶴巻	寄居町赤浜字鶴巻	52	縄文後　土壙26	寄居9号
19	台耕地	花園村黒田字竹後	52・53	古墳3、縄文中・住25、平安・住80、製鉄炉3	花園1号
20	新堀	寄居町用土字新堀	52	塚2基	寄居2号
21	中井丘	寄居町用土字中井丘	51	縄文中～後・平安　包含層	寄居5号
22	中山	寄居町用土字中山	51	中世～近世　炭焼窯2基	寄居6号
23	路久保	寄居町用土字路久保	51	縄文前　包含層	寄居7号
24	沼下	寄居町用土字沼下	51	平安　住居跡24、井戸	寄居3号
25	平原	寄居町用土字平原	52	平安　住居跡3、掘立柱2	寄居8号
26	甘粕山	美里村甘粕字東山	48・49	縄文早～前・晩～弥・平安　住居跡14、炭焼窯4	第30集(1980)
27	北坂	岡部町本郷字北坂	51・52	縄文草・平安　住居跡15、掘立柱9	埼埋文報告第1集(1981)
	清水谷		51	平安・中世　住居跡23、溝	
	安光寺	岡部町本郷字清水谷他	51	古墳2基	
28	塚本山	美里村下児玉字西山	49・50	弥生～平安　方形周溝墓9、古墳28、住居跡2	第10集(1977)
29	雷電下	児玉町浅見字雷電下	49	古墳～平安　住居跡63、井戸	第22集(1979)
30	飯玉東	児玉町浅見字飯玉東	49	縄文中・弥生・平安　住居跡2、方形周溝墓5	〃
31	後張	児玉町下浅見字下モ田	50・51	古墳・平安　住居跡170	児玉4号
		本庄市四方田堰場			
32	久城前	上里町嘉美字一本松西	50	古墳末　溝、井戸	第15集(1978)
		本庄市今井字久城前			
33	本郷東	上里町七本木字本郷東	48	奈良　住居跡6	第7集(1976)
34	愛宕	上里町七本木字愛宕耕地	48・49	古墳　住居跡8、溝、土壙	〃
35	中堀	上里町堤字中堀北	49	平安　住居跡8	第15集(1978)
	耕安寺	上里町堤字耕安寺	59	平安　包含層	〃
36	若宮台	上里町帯刀字堀の内	49・50	奈良・平安住居跡75	上里4号

Ⅱ　沼下・平原・新堀・中山・お金塚・中井丘・鶴巻・水久保・狢久保遺跡の調査経過

昭和51年度

沼下遺跡（寄居３号）　７月13日から、現場事務所を設置し、調査を開始した。調査は20×20mの真北を基準としたグリッドを設定して行なった。遺構は平安時代の集落跡が主体で、発掘区の南東部に集中し、又、これらの住居跡は切り合っており、更に近世の溝とも切り合っており、調査は難行した。確認された遺構は、平安時代の住居跡24軒、近世の溝４条、土壙８基、井戸跡１基で、他に縄文時代の土器片数点等がある。調査はこれら遺構の精査実測写真撮影を行ない、10月５日に終了した。

狢久保遺跡（寄居７号）　沼下遺跡調査終了の翌10月６日から調査を開始した。表土剝ぎを行ない、精査を行なった結果、遺構は確認されず、少量の縄文土器片が出土したのみであった。恐らく遺跡の中心ははずれたものと考えられる。10月29日、調査を終了した。

中山遺跡（寄居６号）　11月１月より、10×10mのグリッドを真北方向に一部設定し、表土剝ぎにより、精査を行なっていった。その結果、斜面上方から、平安時代の鍛治工房址と考えられる竪穴１軒、やや離れた所から炭焼窯一基、斜面部下方から、窯壁を石組で構築した近世のものと思われる炭焼窯２基を検出した。窯跡の精査、図取りを行ない、翌、１月21日に調査を終了した。

中井丘遺跡（寄居５号）　１月24日から、グリッド設置、表土剝ぎを行ない、調査を開始した。表面観察では、国分期の土器片が散布していたが、該期の遺構は認められず、縄文時代に属する礫器、打製石斧、石鏃、削器、大形打製石斧等が広い範囲から出土した。それらのポイントを落とし、実測等を終了し、調査は３月４日に終了した。

昭和52年度

平原遺跡（寄居８号）　５月９日から10×10mのグリッドを設定し、調査を開始した。遺構は、丘陵の頂上部に集中していた。検出された遺構は平安時代の住居跡３軒、掘立柱建物跡２棟で、住居跡内からの出土土器が多かった。調査は、斜面部にも及んだが、何らの遺構、遺物も発見されず、８月31日に終了した。

鶴巻遺跡（寄居９号）　平原遺跡と同時に、５月９日から調査を開始した。遺跡は300 mの長さにわたる台地上にあり、先土器時代の遺物集中区、土壙26基、塚３基、風倒木痕20箇所、縄文後期遺物包含層と多岐に渡った。調査は炎天下を過ぎ、８月31日に終了した。

お金塚遺跡（寄居１号）　前記２遺跡の調査中の８月１日から調査を開始した。調査は塚中央部から東西南北方向にトレンチを設定して行なったものである。塚からは頂上部の庚申塔の他、かわらけ、鉄鎌、寛永通宝が出土した。調査は８月10日に慌しく、図面、写真撮影を行ない、終了した。

新堀遺跡（寄居２号）　塚として考えられていたものであるが、表土以下２層より下には何らの土層変化も認められず、近世以降の墓の掘り込みが検出されたのみであった。（試掘のみ）

水久保（寄居４号）狢久保（寄居７号）の各遺跡についても、試掘調査で、遺物がほとんど確認できず、僅かに狢久保遺跡で、縄文時代前期、諸磯ａ式期の土器片が検出されたのみで、遺跡の中心をはずれたものと考えられる。

Ⅲ　遺跡の立地と環境

新堀・沼下・中井丘・中山・狢久保・平原の本書で扱う六遺跡は、大里郡寄居町大字用土地区に所在している。国鉄八高線用土駅の北方1.5～2㎞の地点である。

遺跡の所在する用土地区は、大里郡岡部町、児玉郡美里村と境を接し、養蚕と水田耕作を主な農業経営としていたが、近年、宅地化が進み、徐々に生活環境が変化しつつある。

最近数多くの報告書(註１)や論文(註２)で、埼玉県北部の遺跡立地、分布状況について詳細な考察が成されている。詳しくはそれらに譲り、以下本報告書では、六遺跡の所在する用土地区を中心とした地形の概観と、遺跡に関連のある時代に焦点を当てることにしたい。

最も標高の高い沼下遺跡に立って周囲を眺望すれば、東前方には荒川扇状地が開析されて成形された広大な櫛引台地が広がり、背後には鐘撞堂山（標高380ｍ）から県境二子山（標高1166ｍ）まで上武山地が連なっている。北方には生野山、大久保山、諏訪山の第三紀独立丘陵に囲まれた本庄台地が眼下に展開し、遠く赤城、榛名、妙義の上毛三山が望遠される。

遺跡は、この本庄台地と櫛引台地を分かつように、上武山地から半島状に北方へ突出した一連の丘陵が開析され形成された小独立丘陵上に立地している。

縄文時代の遺跡は、当六遺跡の立地する独立丘陵上や上武山地裾部の丘陵上に数多く分布し、櫛引台地、本庄台地の扇央部にはほとんど分布が無く、非常に対照的である。従来、県内の縄文時代研究は、県南部の資料を中心に行なわれてきたが、近年、当地域でも幾つかの遺跡が相次いで調査報告されている。丘陵上の遺跡としては、早期撚糸文糸終末期の無文土器と石器群が報告された甘粕山遺跡(註３)、北坂遺跡(註４)が存在し、前期の遺跡としては、諸磯ａ・ｂ式期の白石城(註５)、ｂ式期の神明ケ谷戸遺跡(註６)が調査されている。中期の遺跡は、分布調査で数多く確認されているが、わずかに 瓶鹿神社 前遺跡（註７）が報告されているに過ぎない。扇状地上の遺跡としては、前期諸磯ａ式期の住居跡が検出された北貝戸遺跡(註８)、中期後半加曽利Ｅ式期終末の土器が出土した雷電下遺跡(註９)、後期の古川端遺跡(註10)が報告され、資料の提示と新たな問題点を提起している。

鶴巻遺跡は、前述した六遺跡の南方約７㎞離れ、地形的に異なる荒川右岸の寄居町大字赤浜地区に所在し、寄居駅東方2.5㎞、古代の男衾郡の一画である。男衾地区の地形をみると、現荒川河道から一段の段丘面、荒川が形成した古い扇状地の南部と考えられる江南台地、比企丘陵と続いている。

男衾および隣接する鉢形地区は、南側に迫る比企丘陵より流失する数多くの小沢の開析により、永川台、八幡台、上ノ原台、露梨子台と呼称される程に、開析谷と台地が複雑に入り組み、台地面は荒川に向い緩く傾斜している。これらの台地上に縄文時代の遺跡が、分布調査ではひとつの遺跡の範囲が限定できない程に、数多く分布している。左岸の段丘面上の遺跡分布とは対照的である。

現在までに調査報告された遺跡は、東遺跡(註11)、甘粕原遺跡(註12)、ゴシン遺跡(註13)、露梨子遺跡(註14)、上郷西遺跡(註15)、増善寺遺跡(註16)、南大塚遺跡(註17)等がある。前期の遺跡としては、甘粕原・ゴシン遺跡で黒浜式期、諸磯ａ・ｂ式期の住居跡、土壙が調査され、上郷西遺跡では諸磯ａ～ｃ式期の４軒の住居跡と土壙群が検出されている。中期では、甘粕原遺跡より勝坂式期～加曽利ＥⅠ式期の住居跡５軒、ゴシン遺跡では加曽利ＥⅡ～Ⅲ式期の住居跡、露梨子遺跡において加曽利ＥⅣ式期の柄鏡形住居跡が１軒調査報告されている。後期では東遺跡で称名寺式期の敷石住居跡、上郷西遺跡では堀之内Ⅱ式期の柄鏡形住居跡が報告されている。また、対岸の河岸段丘上では、上南原遺跡(註18)から前期諸磯ｂ・ｃ式期住居跡12軒と土壙群、北塚屋遺跡(註19)から諸磯ｂ式期の住居跡が調査され、中期勝坂期～加曽利ＥⅢ式期の大集落跡である台耕地遺跡(註20)が報告されている。

いずれの遺跡も集落の部分的調査であり、その全容は把握し得ないが、今後資料の増加に伴ない集

落、遺跡群全容の解明が期待される。（今井　宏）

弥生時代の遺跡は少なく、松久丘陵中の丘陵上に散見される程度である。古くから知られる寄居町用土遺跡(註21)は中期後半～後期にかけての集落跡である。諏訪山の諏訪山神社境内遺跡(註22)、そして近年緊急調査された美里村神明ケ谷戸遺跡(註23)がある。神明ケ谷戸遺跡は水田面を見おろす比高差15m程の丘陵上にあり、中期末前後とされる、環濠をもつ住居跡13軒からなる集落であった。他に、美里村甘粕山遺跡群中の如来堂C遺跡(註24)からも住居跡１軒が調査されている。更に松久丘陵中に２ケ所の遺跡がある(註25)。

古墳時代にはいると遺跡は増加する。甘粕山遺跡群中の如来堂B遺跡の方形周溝墓、諏訪山丘陵の南へ延びる支丘上の安光寺古墳群中の安光寺１号墓、神明ケ谷戸遺跡、山崎山丘陵の千光寺古墳（註26）群、山崎山古墳群、西山古墳群、川輪聖天塚古墳(註27)、方格規矩鏡を出土した長坂聖天塚古墳(註28)と、諏訪山古墳群がある。松久丘陵上の古墳群は、羽黒山古墳群、白石古墳群(註29)、大仏古墳群、駒衣古墳群、切通古墳群、猪俣古墳群があり、身馴川の自然堤防上の微高地に広木大町古墳群(註30)があり、集落として瓶蹇神社 前遺跡(註31)がある。近辺の集落遺跡として、宇佐久保遺跡(註32)、宮下遺跡(註33)、北貝戸遺跡(註34)、下道堀遺跡(註35)、畑中遺跡(註36)、地台遺跡(註37)等が調査されている。松久丘陵中の如来堂C遺跡もある。

松久丘陵南側の櫛引台地との境にある、飯塚古墳群、谷津古墳群がある。荒川の両岸には、谷津田等により、又、周辺部の小河川による水田開発を基盤とした古墳群が段丘上に多く存在する。荒川左岸、寄居町の中小前田古墳群、花園村小前田古墳群、前方後円墳１基を含む15基が調査された黒田古墳群(註38)、そして荒川右岸の上流から寄居町立ケ瀬古墳群、上郷古墳群、川本村塚原古墳群、鹿島古墳群(註39)等、枚挙に暇がない程である。集落遺跡としては、寄居町ゴシン遺跡、甘粕原遺跡(註40)が調査され、町田耕地遺跡、他がある。祭祀遺跡としては、こぶケ谷戸(註41)、亀甲山、狢山遺跡(註42)がある。こぶケ谷戸遺跡は農事祭祀、狢山遺跡は峠の祭祀との関連が考えられている。

歴史時代にはいると集落遺跡が増加し、松久丘陵周辺と台地、そして荒川右岸の段丘上に、顕著な様である。それは、那珂郡において、承和10年（843年）に戸口が増して４郷となり、小郡から下郡となったという続日本後紀の記述からも伺えよう。

松久丘陵北側の那珂郡衙推定地にあたる古郡周辺では、北貝戸遺跡、下道堀遺跡、地台遺跡、宮下遺跡、畑中遺跡、瓶蹇神社 前遺跡等があり、甘粕山遺跡群中の東山、如来堂A、B遺跡は少数の竪穴住居と掘立柱建物跡が各々検出され、東山遺跡からは瓦塔が出土している。又、D地点からは概期の炭焼窯４基が調査されている。他に諏訪山丘陵裾の北坂・清水谷遺跡(註43)がある。那珂郡の延喜式内社として 瓶蹇神社 、寺院跡としては、大仏廃寺がある。大仏廃寺は武蔵国分寺と同型の軒丸瓦が出土しており、創建は８世紀後半とされる(註44)。又、この瓦が美里村木部所在の木部窯跡で焼かれたと推定されているが、窯跡の実態は明らかではない。

県内三大窯の１、末野窯跡群は古くからその存在を知られていたが（註45）、近年の調査（註46）により、その実態が把握されつつある。窯跡群は上武山地の東端鐘撞堂山南裾の谷津地形を利用しており、16支群、91基が確認され、１基は昭和51年に調査された。

窯の年代は７世紀末に始まり、８世紀後半～９世紀にかけて隆盛し、10世紀に衰退する。集落跡としては、窯跡群下方の段丘上の末野遺跡、城見上遺跡、末野元宿遺跡がある。又、鐘撞堂山山頂南側に、馬騎の内廃寺があり、須恵器生産を背景にした氏族の氏寺と推定され、奈良時代前半～平安時代中頃まで続いた。又、この時期に荒川右岸の段丘上に多くの集落が出現している。荒川左岸の台耕地遺跡(註47)は鉄製錬炉３基と平安時代住居跡60軒が調査されており、生産遺跡と集落遺跡との関係も検討されつつある。（大和　修）

第１図　遺跡分布図（縄文時代）

第2図　遺跡分布図（奈良・平安時代）

註1　増田逸朗・宮崎朝雄ほか「甘粕山」　埼玉県遺跡発掘調査報告書第30集　昭和55年
註2　柳沼幹夫「埼玉県北部における縄文遺跡の立地について」　埼玉考古第18号　昭和54年
註3　註2に同じ
註4　中島宏他「清水谷・安光寺・北坂」　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第1集　昭和56年
註5　中村倉司「白石城」　埼玉県遺跡調査会報告書第36集　昭和54年
註6　坂本和俊「神明ケ谷戸遺跡の発掘調査」　第13回遺跡発掘調査報告書発表要旨　昭和55年
註7　中村倉司「 瓊瓊神社 前遺跡」　埼玉県遺跡調査会報告第39集　昭和55年
註8　菅谷浩之・坂本和俊「北貝戸遺跡」　埼玉県児玉郡美里村教育委員会　昭和53年
註9　中島宏他「雷電下・飯玉東」　埼玉県遺跡発掘調査報告書第22集　昭和55年
註10　鈴木敏昭他「古川端」　埼玉県遺跡発掘調査報告書第12集　昭和54年
註11　梅沢太久夫「大里郡寄居町東遺跡発掘調査報告」　埼玉考古第11号　昭和48年
註12　中島利治・梅沢太久夫「甘粕原遺跡の調査」　第3回遺跡発掘調査報告会発表要旨　昭和45年
並木隆「甘粕原・ゴシン・露梨子遺跡」　埼玉県遺跡調査報告書第35集　昭和53年
註13　註12に同じ
註14　註12に同じ
註15　埼玉県県史編さん室「新編埼玉県史　資料編1　原始旧石器・縄文」　昭和56年
註16　宮崎朝雄「増善寺遺跡」　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第5集　昭和57年
註17　註15に同じ
註18　註15に同じ
註19　市川修「北塚屋遺跡の調査」　第13回遺跡発掘調査報告会発表要旨　昭和55年
註20　鈴木敏昭・中島宏「台耕地遺跡の調査」　第12回遺跡発掘調査報告会発表要旨　昭和55年
註21　曽野寿彦・吉田章一郎「埼玉県寄居町用土弥生式遺跡調査概報」　東京大学教養学部紀要28　昭和38年
註22　高橋一夫・鈴木敏昭「諏訪山神社境内遺跡」『埼玉県土器集成4』　埼玉考古学会　昭和51年
註23　註6に同じ
註24　註1に同じ
註25　「埼玉県遺跡図」　埼玉県教育委員会　昭和50年
註26　増田逸朗「千光寺」　埼玉県遺跡調査会報告第28集　昭和50年
註27　塩野博「埼玉県美里村河輪聖天塚古墳」　日本考古学年報24　昭和46年
註28　菅谷浩之・坂本和俊「美里村長坂聖天塚古墳の調査」　第8回遺跡発掘調査報告会発表要旨　昭和50年
註29　並木隆「白石古墳群」『第9回遺跡発掘調査報告会発表要旨』　埼玉県遺跡調査会　昭和51年
註30　笹森健一・市川修「広木大町古墳群」　埼玉県遺跡調査会報告第40集　埼玉県遺跡調査会　昭和55年
註31　註7に同じ
註32　中村倉司「宇佐久保遺跡」　埼玉県遺跡調査会　昭和54年
註33　菅谷浩之ほか「宮下・樋之口遺跡調査概報」　美里村教育委員会　昭和51年
註34　註8に同じ
註35　菅谷浩之「北谷戸・下道掘・上耕地遺跡」　美里村教育委員会　昭和54年
註36　谷井彪・宮崎由利江「畑中遺跡」　美里村畑中遺跡調査会　昭和54年
註37　増田逸朗「国道254号線の二遺跡」　第2回遺跡発掘調査会発表要旨　昭和44年
註38　塩野博・小久保徹「黒田古墳群」　花園村黒田古墳群発掘調査会　昭和50年
註39　塩野博ほか「鹿島古墳群」　埼玉県埋蔵文化財調査報告書第1集　埼玉県教育委員会　昭和47年
註40　註12に同じ
註41　小沢国平「こぶケ谷戸祭祀遺跡発掘調査報告書」　昭和35年
註42　小沢国平「今泉祭祀と祭器」　文化財保護委員会埋蔵文化財要覧(二)　昭和30年
註43　註4に同じ
註44　藤原高志・宮昌之ほか「埼玉県古代寺院跡調査報告書」　埼玉県史編さん室　昭和57年
註45　吉田章一郎「埼玉県大里郡寄居町末野の窯址調査」　考古学雑誌40—1　昭和29年
註46　野部徳秋・高木義和「末野窯址（花園支群）発掘調査」　寄居町教育委員会　昭和52年
石岡憲雄ほか「埼玉における古代窯業の発達(1)」『埼玉県立歴史資料館研究紀要第1号』　埼玉県立歴史資料館　昭和54年
註47　註20に同じ

Ⅳ　沼下遺跡の発掘調査

1　遺跡の概観

沼下遺跡は松久丘陵中の、諏訪山と狭小な低地をはさんで向かいあう通称甘粕山と呼ばれる丘陵（109m）の北へ派生する支丘の東斜面に立地する。北東に平原遺跡、南西に甘粕山遺跡群があり、東には用土遺跡がある。埼玉県遺跡地図№142遺跡にあたる。

遺跡の標高は、79.0～87.0mである。現況は桑畑であった。調査の結果、検出した遺構・遺物は次のとおりである。

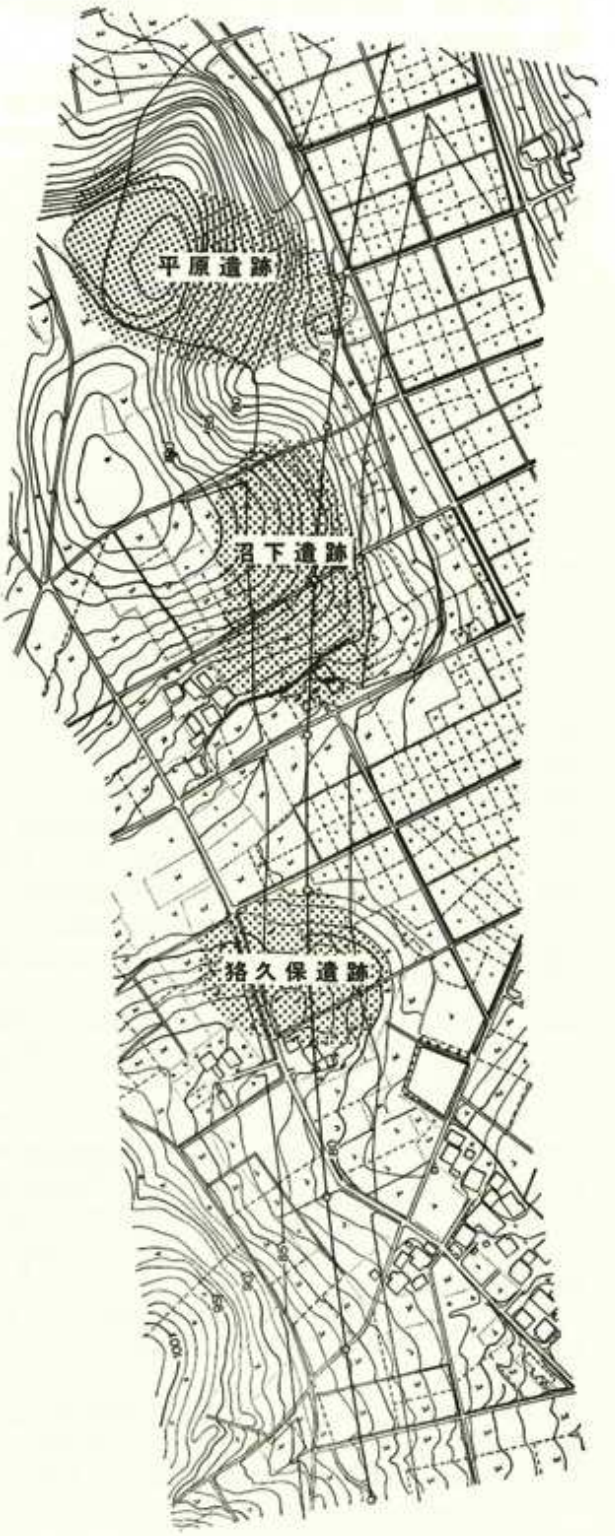
縄文式土器

平安時代の住居跡25軒

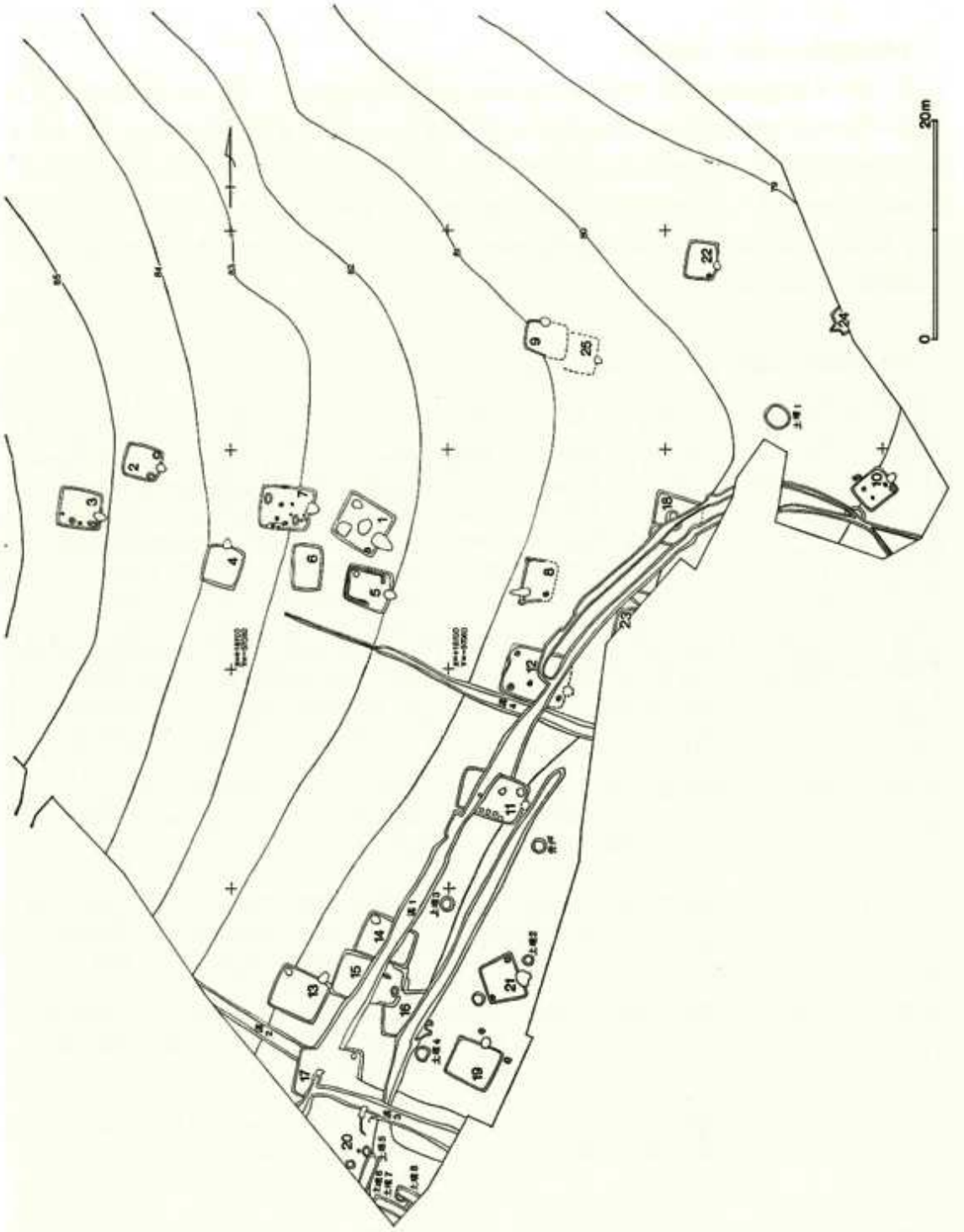
土壙7基（以下中世以降）

溝4条、井戸跡1

遺跡は斜面部に立地している為、調査を行なった住居跡は何れも山寄りに深く、谷寄りの掘り込みが極めて浅い為、その保存状態は良好とは言えなかった。集落は数群に分けられるが、斜面部の中でも傾斜の緩やかな丘陵縁辺部に集中する。現在の集落とほぼ占地を同じくしていたものと思われる。調査は集落の南の限界を確認していない為、推定に頼らざるを得ないが、発掘区南端の密集状況から見て、この部分を中心として更に東、南、西側へ延びていたものと考えられる。又、溝、井戸跡、土壙はいずれも住居跡よりも新らしく、井戸中の土壌試料中から種々の植物遺体と共に浅間a層の火山灰が検出されている為、全体に近世以降のものと考えた。



第3図　遺跡地形図



第4図　沼下遺跡全測図

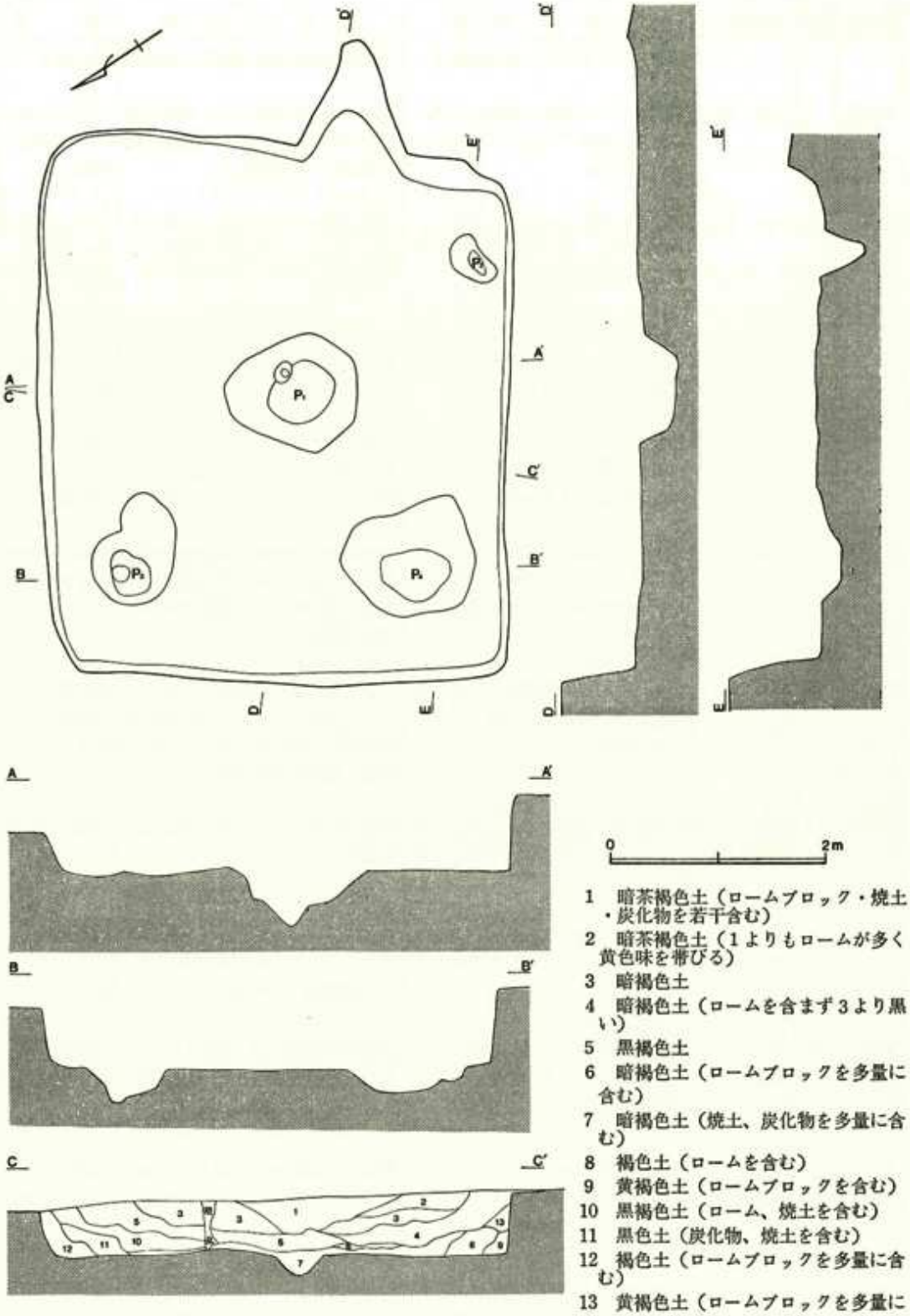
2　遺構と出土遺物

1号住居跡（第5図・図版20）

5、6、7号住居跡に隣接している。大きさは5.05×4.45mの方形プランを呈する。主軸の方向はN—126°—E。壁高は深い部分で60cm程である。東壁やや南寄りに竈が掘り込まれている。ピットは4ケ所確認された。竈右脇のピットは柱穴と考えられる。又、本跡のほぼ中央部に1.2×1.05m、中央部で1段深くなり、床面から50cmを測る不整円形のピットがあり、東側に縁に沿ってやや高い部分が見られた。出土遺物は竈中より須恵器坏破片1点、床面より須恵器椀破片1点、他に覆土中より土師器甕、坏等がある。

1号住居跡出土遺物（第6、7図・図版20）

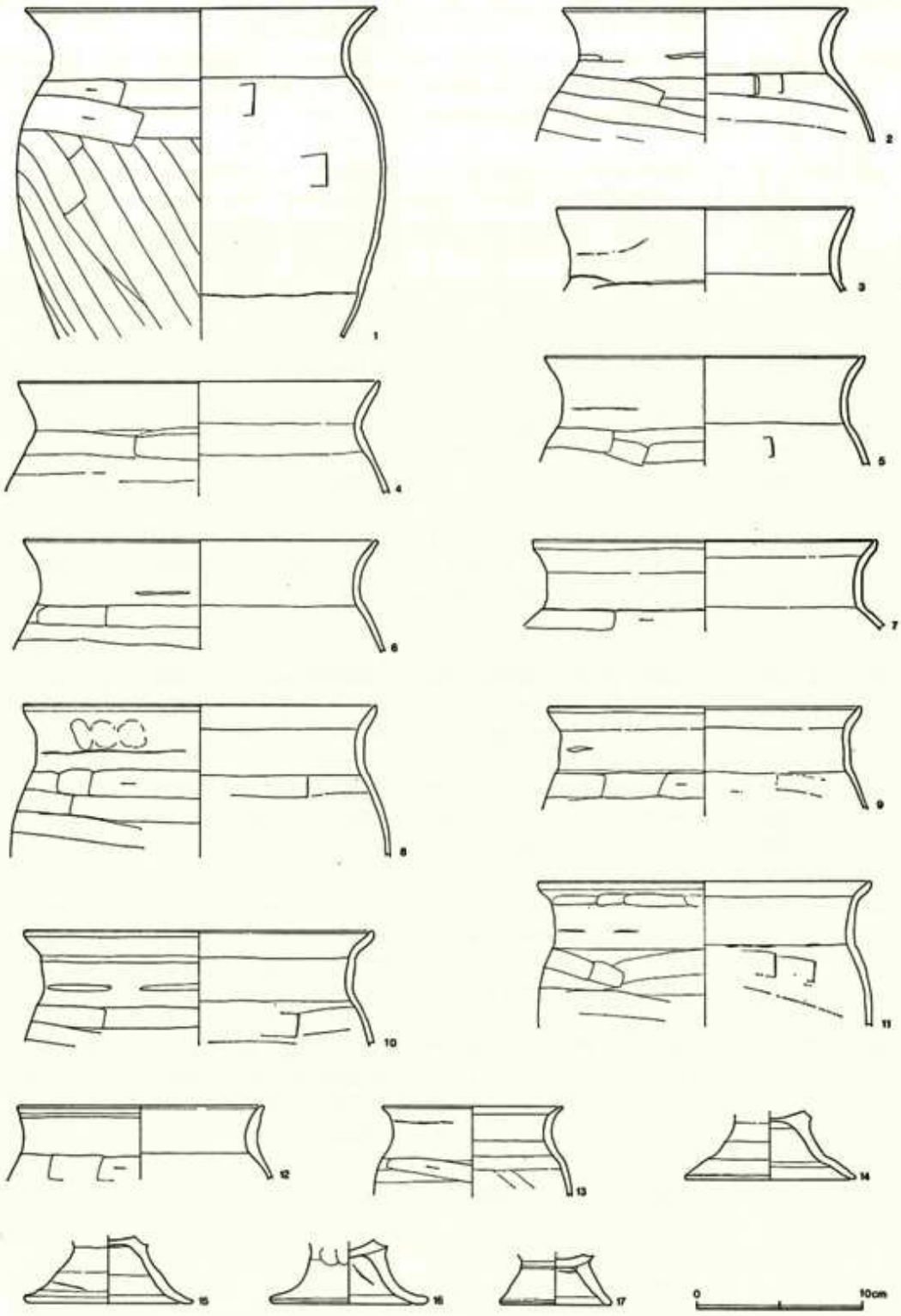
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師甕	1	口径 21.1 最大径22.2	最大径は胴上半部にあり、底部は小さくなると思われる。胴下半部は外傾し、上半部で張り、肩部で内傾し、やや屈曲して立ち気味になり、口縁部で外反し、端部をややつまみ出している。	口縁部内外面横ナデの後、肩部を横箆削り、以下胴部を斜方向箆削り整形を施す。胴下半部及び、頸部に巻き上げ痕を残す。内面肩部以下木口状工具による横方向ナデ整形。微細砂粒多く含む。	口縁・胴部15%残存。 淡茶褐色 焼成良好 №32
甕	2	口径 17.0 胴上半部径 20.4	胴部の張る器形。肩部からかすかに段を持ち、内傾し、口縁は緩やかに外反する。端部をややつまみ出す。	口縁部内外面横ナデの後、肩部横箆削り整形。胴部内面箆ナデ調整。微細砂粒多く含む。	口縁部30%残 淡赤褐色 焼成良好 中央ピット
甕	3	口径 17.8	頸部は内傾気味に立上がり、口縁でやや外反し、端部はつまみ上げている。肩部との境に段を持つ。	口縁部内外面横ナデ整形の後、肩部横箆削りで削り込む。微・細砂粒多く含む。焼成良。	口縁部15%残 淡茶褐色、竈
甕	4	口径 21.8	肩部内傾し、やや段を持ってくの字に近く外反し、口縁端部をつまみ上げる。	口縁部内外面横ナデ整形の後、肩部横箆削り整形。肩部内面箆ナデ調整。微・細砂粒、焼成良。	口縁部30%残 淡赤褐色 №24
甕	5	口径 19.1	肩部から括れて内傾し、口縁部外反し、端部をつまみ上げる。	口縁部内外面横ナデ整形の後、肩部横箆削り整形。内面箆ナデ調整微・細砂粒、焼成良。	口縁部15%残 淡褐色覆土
甕	6	口径 21.3	肩部からやや括れて外反し、口縁部は外傾し、端部でつまむ。	口縁部内外面横ナデ整形の後肩部を横箆削り。内面箆ナデ調整、微・細砂粒、焼成良。	口縁・肩部 15%　覆土
甕	7	口径 20.5	肩部から大きく括れて頸部は直立し、更に括れて口縁部外反し、端	口縁部横ナデ整形の後、肩部を横箆削り調整。内面木口状工具によ	口縁・肩部 16%、淡赤褐



1　暗茶褐色土（ロームブロック・焼土・炭化物を若干含む）
2　暗茶褐色土（1よりもロームが多く黄色味を帯びる）
3　暗褐色土
4　暗褐色土（ロームを含まず3より黒い）
5　黒褐色土
6　暗褐色土（ロームブロックを多量に含む）
7　暗褐色土（焼土、炭化物を多量に含む）
8　褐色土（ロームを含む）
9　黄褐色土（ロームブロックを含む）
10　黒褐色土（ローム、焼土を含む）
11　黒色土（炭化物、焼土を含む）
12　褐色土（ロームブロックを多量に含む）
13　黄褐色土（ロームブロックを多量に含む）

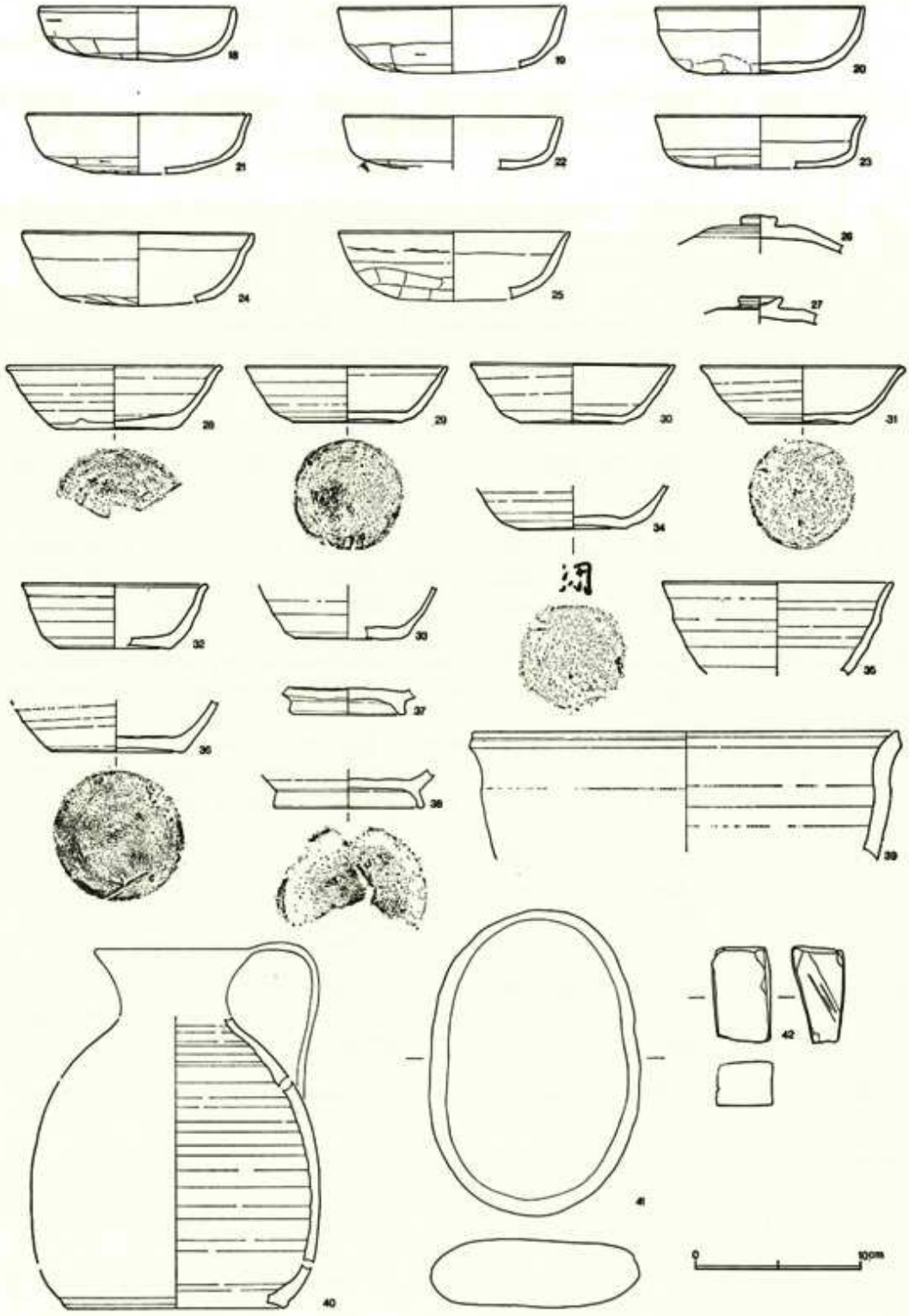
第5図　沼下1号住居跡実測図

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
			部をつまみ上げる。外面煤付着。	る横方向ナデ。微・細砂粒。焼成良	色、No.3
土師甕	8	口径 21.3	肩部からやや括れて頸部は直立し口縁部は括れて外反し、端部をつまみ上げる。	口縁部横ナデ整形の後、肩部を横箆削り調整、内面箆ナデ調整、微・細砂粒、焼成良好。	口縁・肩部18%、淡褐色、覆土
甕	9	口径 18.8	内傾する肩部から段を持ち括れて頸部直立し、更に括れて口縁部外反し、端部をつまみ上げる。	口縁部横ナデ整形の後、肩部を横箆削り整形、内面箆ナデ調整、微・細砂粒。	口縁・肩部20%、淡褐色、覆土
甕	10	口径 20.9	内傾する肩部から大きく括れて頸部は外傾し、大きく括れて外反し端部はつまみ上げる。	口縁部横ナデ整形の後、肩部を横箆削り調整、内面箆ナデ調整、微・細砂粒。	口縁・肩部22%、淡褐色、No.31
甕	11	口径 19.9	内傾する肩部からやや括れて頸部はやや外傾し、口縁部で括れて外反し端部をつまみ上げる。	口縁部横ナデ整形の後肩部を横箆削り調整、内面木口状工具による横方向ナデ、微・細砂粒。淡赤褐色	口縁・肩部35%、中央ピットNo.22
台付甕	12	口径 14.7	内傾する肩部からやや括れて、頸部は緩く外反し、端部をつまみ、丸くなり外面に二条の沈線をもつ。	口縁部横ナデの後、肩部外面横箆削り。内面木口状工具使用横方向ナデ。微細砂粒、外面暗赤褐色・内面茶褐色。	口縁・肩部15%、焼成良、Pit 1
台付甕	13	口径 10.8	内傾する肩部から括れて頸部は内傾し、更に外傾し、屈曲して外反し、端部をつまむ。	口縁部横ナデの後肩部外面横箆削り。内面横方向ナデ。頸部に輪積痕を残す、微・細砂粒多い。淡赤褐色、外面頸部煤付着。	口縁部45%焼成良覆土
台付甕	14	底径 4.5 脚部径10.1	底部は薄い。脚部は外反気味に立ち、屈曲して外傾し、端部をつまむ。	脚部内外面横ナデ、微・細砂粒、淡褐色。	脚部のみ70%残、焼成良
台付甕	15	底径 4.4 脚部径 9.9	脚部は外反気味に立ち、内湾して外反、端部はつまみ、玉縁状になる。	脚部内外面横ナデ、底部との接合痕を残し、又、輪積み痕を残す。微・細砂粒、暗褐色。	脚部のみ90%残、焼成良、No.13
台付甕	16	底径 4.5 脚部径 9.0	底部は丸味を帯びる。脚部は直立気味に外反し、その度合いを強め端部は肥厚する。	脚部内外面横ナデ。底部との接合部付近に指頭圧痕、接合痕を残す。粗雑な作り、細砂粒、暗褐色。	脚部のみ70%残、焼成良、No.2
台付甕	17	底径 4.0 脚部径 6.5	脚部は外傾気味に開き、端部でやや外反し端部は丸味を帯びる。	脚部内外面横ナデ。底部との接合痕を残す。粗雑な作り、細砂粒、暗褐色。	脚部のみ100%残、焼成良、No.1
坏	18	口径 11.6 底径 9.8 器高 3.1	扁平な底部から稜を持って体部は内湾気味に立上り、口縁やや外傾し、端部は直立する。	口縁部横ナデ。体部横箆削り、底部箆削り、口縁部に一部巻上げ痕を残す、器面磨滅、微・細砂粒、	完形、焼成不良、No.16



第6図　1号住居跡出土遺物実測図(1)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
				鉄分含有。淡褐色。	
土師坏	19	口径 13.5 底径 9.9 器高 3.7	扁平な底部からやや稜を持って体部は内湾気味に立上り、稜を持って口縁部は直立気味に外傾する。	口縁部横ナデ。体部横篦削り、底部篦削り、微・細砂粒、淡褐色。	口縁・体部13%残、覆土
坏	20	口径 12.5 底径 8.5 器高 4.0	扁平な底部からやや稜を持って立上がり体部は更に屈曲して内湾気味になり口縁部は稜を持って直立する。	口縁部横ナデ、内面ナデ整形、底部篦削りの後、指等によるナデ、体部上下二段に渡るナデ整形を施す。細砂粒、淡褐色。	95%残 焼成良 №17
坏	21	口径 13.3 底径 11.2 器高 3.6	やや丸味を帯びた底部から稜を持って体部は内湾して立上がり、口縁部はやや外傾する。	口縁部横ナデ、内面ナデ整形、体部篦ナデ、底部篦削り、微・細砂粒、淡茶褐色。	35%残 焼成良 №19
坏	22	口径 13.0 底径 10.6 器高 3.1	扁平な底部から体部は内湾気味に立上がり、口縁部は外傾気味に直立する。	口縁部内外面横ナデ、体部ナデ整形、底部篦削り、微・細砂粒、淡茶褐色。	30%残 焼成良 覆土
坏	23	口径 12.6 底径 9.0 器高 3.1	扁平な底部から稜を持って体部は緩やかに立上がり、更に屈曲し、口縁は外反気味に立ち、端部は直立する。	口縁部内外面横ナデ、体部横篦削り、底部篦削り、微・細砂粒、淡茶褐色。	40%残 焼成良 №23
坏	24	口径 13.7 底径 9.4 器高 4.2	扁平な底部から、稜を持って体部は緩やかに内湾気味に立上がり、屈曲して口縁は内湾気味に立つ。	口縁部内外面横ナデ、体部横篦削りの後、ナデ整形、底部篦削り、微・細砂粒、淡褐色。	30%残 焼成良 №18
坏	25	口径 13.8 底径 10.3 器高 4.2	やや丸味のある底部から、体部は外傾気味に立上がり、やや稜を持って口縁はやや外傾する。	口縁部内外面横ナデ、体部粗い横篦削り、底部篦削り、微・細砂粒淡褐色。	30%残 焼成良 覆土
須恵蓋	26	肩部径 6.2	坏蓋、宝珠つまみのくずれ、上面は平坦に近い。頂部中央はやや凹み、肩部は丸味をもち、やや段をもち、緩やかに裾部へ拡がる。	鈕をつけた後頂部中央ナデ、肩部回転篦削り、裾部まで、水挽き整形、内面ナデ整形、微・細砂粒多く含む、淡灰褐色。	頂部60%残 焼成良 覆土
蓋	27		鈕は中央の凹む環状で、頂部中央は平坦、肩部との境に稜をもつ。	鈕をつけた後、頂部中央ろくろナデ、肩部回転篦削り、内面ナデ、微・細砂粒、鉄分含有、暗褐色、半酸化炎焼成。	頂部60%残 焼成良好 覆土
坏	28	口径 12.7 底径 7.0 器高 3.8	底部はやや上げ底、体部は丸味をもって立上がり、直線状に外傾し、口縁でやや膨らみ、端部をつまみ出す。	底部回転篦切り後、篦ナデ。体部ろくろナデ、口縁部水挽き整形、微・細砂粒、鉄分含有、灰色。	35%残 焼成良好、堅緻、竈
坏	29	口径 12.1	底部はやや上げ底、体部は稜を持	水挽き整形、底部回転糸切りの後	口縁部40%



第7図　1号住居跡出土遺物実測図(2)

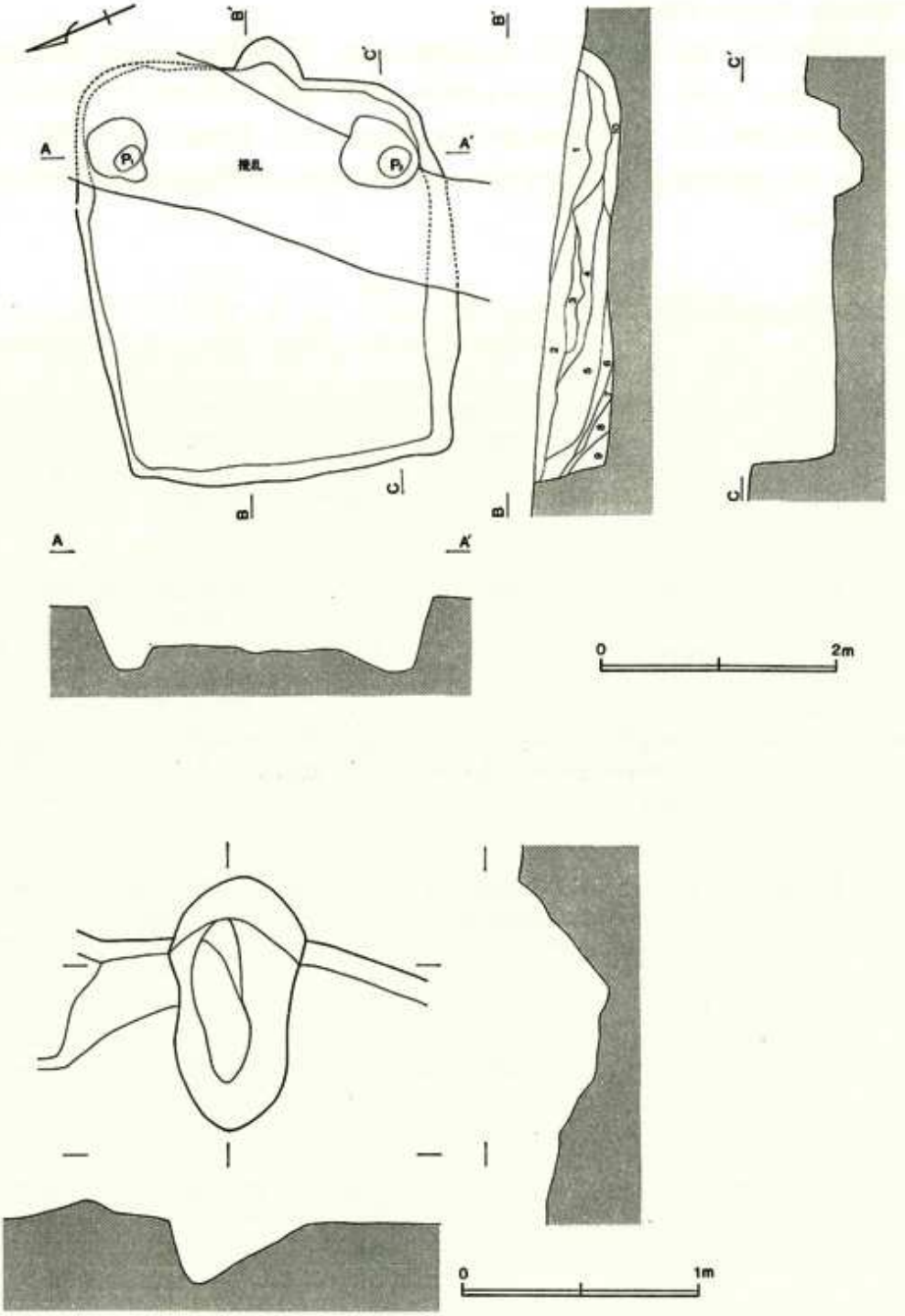
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
		底径 6.5 器高 3.4	って内湾気味に立上がり、直線状に外傾する。	周辺部箆削り、微・細砂粒多く含む。胎土灰色、表面灰黒色。	底部完存 焼成良好No. 9
坏	30	口径 12.2 底径 6.4 器高 3.5	底部はやや上げ底。体部は大きく内湾して立上がり、口縁部は外傾する。	水挽き整形、底部回転糸切り、口縁部にろくろ目を残す。微・細砂粒、石英片含有、灰色。	口縁部15%残 焼成良好 覆土
坏	31	口径 12.2 底径 6.3 器高 3.5	底部はやや上げ底。体部は屈曲して内湾し緩やかに立上がり、口縁部外反し、端部をややつまむ。	水挽き整形、底部回転糸切り、口縁部にややろくろ目を残す、微・細砂粒、石英片含有、濃灰色。	口縁部90%残 焼成良好 覆土
坏	32	口径 10.9 底径 6.7 器高 3.9	底部はやや上げ底。体部は屈曲し内湾気味に立上がり口縁部でやや外反し、端部をつまみ出す、器壁は厚い。	巻き上げ後水挽き整形、底部回転糸切り、外面ろくろ目やや残す。胎土・底部外面黒色、表面白褐色細砂粒、土師質。	18%残 焼成良 覆土
須恵坏	33	底径 6.4	底部は平底、体部は緩やかに立上り、大きく屈曲して外傾する。	水挽き整形、底部回転糸切り、微・細砂粒。焼成良西セクション	底部40%残
坏	34	底径 6.4	底部はやや上げ底、体部は緩やかに立上り、大きく内湾し、口縁部外傾する。底部に墨書。	水挽き整形、底部回転糸切り、微・細砂粒、半酸化炎焼成、胎土暗茶褐色、内面白褐色、外面薄黒色。	体部25%、底部90%残 焼成良、覆土
須恵埦	35	口径 13.8	体部は緩やかに立上がり、外傾し口縁でやや括れ、端部をつまむ。	水挽き整形。ろくろ目を特に内面に残す。微・細砂粒灰色。	口縁20%残 焼成良、No. 4
須恵埦	36	底径 7.8	底部やや上げ底、体部は外傾気味に立上がる。	水挽き整形、底部回転糸切り、細砂粒・鉄分含有、胎土・底部外面淡褐色・表面灰色、半還元炎焼成。	底・体部完存 焼成良好 No. 6
須恵埦	37	低径 6.9	底部やや上げ底、底部周囲は打ち欠かれて略円形を呈し、上面平滑転用硯か（?）	水挽き整形、底部高台接合後ナデている。外面に接合痕残る。微・細砂粒。石英片含有、胎土・内面淡褐色・外面灰色、半還元炎焼成。	底部のみ完存 焼成良好 No. 7
須恵埦	38	底径 8.6	底部平底、体部は外傾し立上がる。高台薄く、ハの字状に立ち、端面水平。半還元炎焼成。	水挽き整形、底部回転糸切り、細砂粒・片岩片含む。胎土暗茶褐色表面赤味を帯びた濃灰色。	底部のみ60%残、焼成良、覆土
須恵甕	39	口径 25.7	胴部外傾し、口縁でやや括れて、外反し、端部をつまみ、稜をもつ。	ろくろ整形、細砂粒多く含む。灰褐色。	口縁部破片
灰釉手付瓶	40	頸部径 6.4 胴部径17.4 底径 12.9	底部は上げ底、削り出し高台、体部は内湾気味に立上がり胴部で直立～内傾し、緩やかに括れる。	巻き上げ後ろくろ整形、頸部～肩部にかけて淡緑色の釉がかかる、胎土明灰色、黒色・白色砂粒含有	20%残、焼成良好1・7・8・9・11住覆土
磨石	41	長18.3 幅12.6 厚 4.0 扁平な河原石である。平坦面にやや凹凸があり、台石として使用したものであろう。			覆土
砥石	42	現長 5.7 幅 3.5 2面を非常に良く使用し、側面には鋭い条痕が走る。			No. 5

2号住居跡（第8図・図版2）

遺跡の西側にあり、本跡の南西約3mに3号住居跡がある。本跡の北東から南へ走る攪乱溝により、壁を一部切られている。大きさは3.50×3.10mの、西側の2隅がやや丸味をもつ方形を呈する。主軸の方向はN—109°—E。壁高は西側の深い部分で60cm程である。竈は東壁中央部に掘り込まれている。ピットは、竈の両脇に2ケ所確認された。出土遺物は竈中から土師器甕破片、床面直上から須恵器皿等がある。

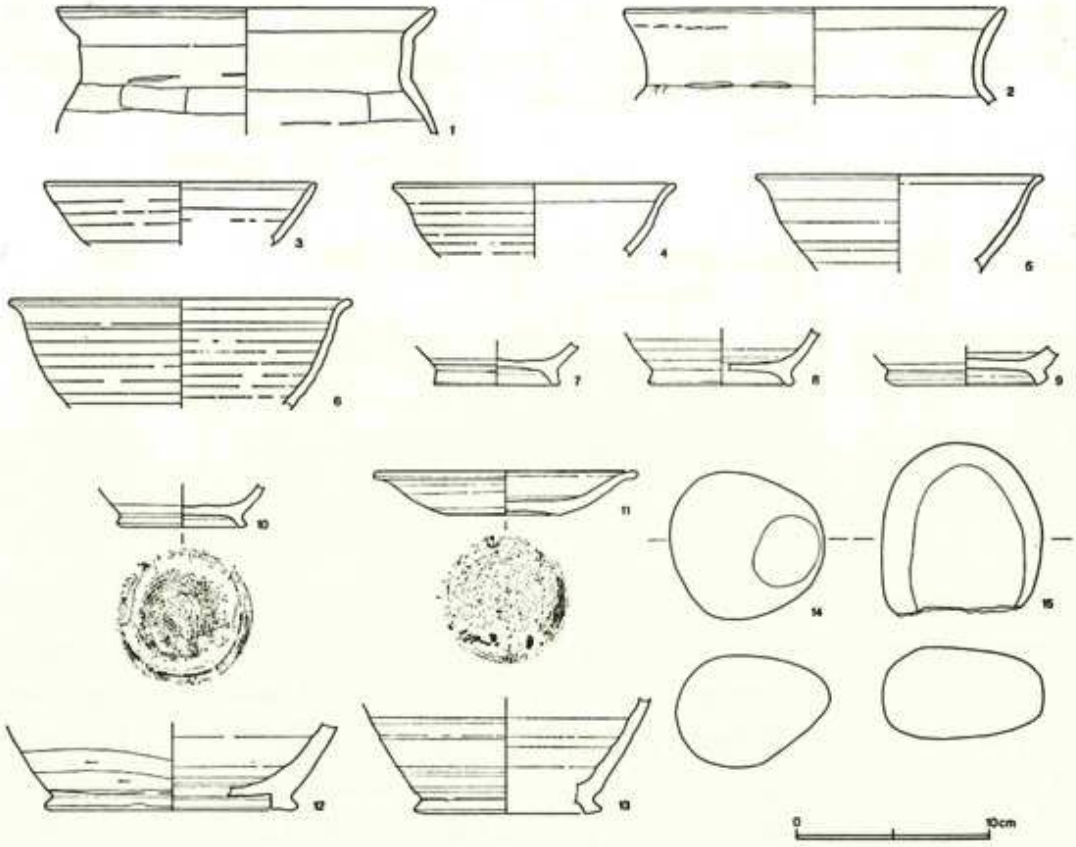
2号住居跡出土遺物（第9図・図版20）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師甕	1	口径 19.6	肩部から括れて頸部は外傾気味に直立し、更に括れて口縁部で内湾気味に外反する。	口縁部横ナデ整形後、肩部外面横方向箆削り調整。内面肩部粗い木口状工具による横方向ナデ整形。微細砂粒含む。赤茶褐色。	口縁・肩部のみ35%残存。竈・覆土。焼成良
甕	2	口径 19.7	肩部から段を持って括れ、頸部は緩く外反し、やや括れて口縁部は直線状に外反する。	口縁部横ナデ整形後、肩部外面横箆削り調整。微・細砂粒含む。淡茶褐色。	口縁・肩部一部10%残存。覆土。焼成良
坏	3	推定口径 14.0	体部は緩やかに立上がり、口縁部は直線状に外傾する。微・細砂粒含む。	水挽き整形。微細砂粒含む。淡茶褐色。土師質。	口縁部20%残存。覆土。焼成不良
坏	4	推定口径 14.4	体部は緩やかに内湾気味に立上がり、屈曲して、口縁部は外反し、端部をつまみ出している。	水挽き整形。微・細砂粒、鉄分を含む。酸化炎焼成。淡茶褐色。	口縁部15%残存。覆土。焼成良好
坏	5	推定口径 14.7	体部は外反して立上がり、内湾気味になり、口縁部で外反し、端部をつまみ出している。	水挽き整形。微・細砂粒、鉄分を含む。酸化炎焼成。淡茶褐色。外面黒色。	口縁部8%残存、焼成良好
埦	6	口径 17.5	体部は緩やかに内湾気味に立上がり、口縁部で外反し、端部をつまみ出している。	水挽き整形。微・細砂粒、鉄分を含む。酸化炎焼成。胎土淡茶褐色外面・内面口縁付近黒色。	口縁部15%残存。焼成良好 No.3
須恵坏	7	底部 6.3 高台径 6.6	体部は直線状に立上る。高台はまっすぐに近くつき、端部は断面四角形で稜は鋭い。端部に凹面あり。	底部回転糸切り。高台接合痕を外面に残す。鉄分を含む。濃灰色。	底部半欠、焼成良好。覆土



1　褐色土
2　暗褐色土
3　褐色土（ロームを含む）
4　褐色土
5　褐色土（微量の炭化物を含む）
6　5に僅かなロームブロックを含む
7　6に焼土を含む
8　粒子の細かい7層
9　黒褐色土（ロームブロック含む）
10　褐色土（炭化物、焼土を含む）

第8図　沼下2号住居跡実測図



第9図　2号住居跡出土遺物実測図

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	8	底径 7.3 高台径 7.7	体部は緩やかに立上る。高台はハの字状に開く。端部は丸味があり、凹面をもつ。	底部回転糸切り、高台接合痕を外面に残す。濃灰色。	底部30% 焼成良好。 覆土
坏	9	底径 8.2 高台径 8.4	体部は稜を持って外反気味に立上る。高台は内湾する。端部は断面三角形を呈する。	底部回転糸切り、高台接合部はろくろナデし、体部との境に稜をもつ。半酸化炎焼成、淡褐色。	底部40%残。 焼成良好。 覆土
坏	10	底径 6.4 高台径 6.8	体部はやや稜を持って立上る。高台はハの字状に開く。端部はやや丸味を帯びる。	底部回転糸切り。高台接合部はろくろナデしているが、内面に接合痕を残す。酸化炎焼成、淡赤褐色	底部100%残 焼成良好。 覆土。
皿	11	口径 13.4 底径 6.0 器高 2.2	底部は上げ底状。口縁は丸味を持って立上り、やや肥厚して、端部で外反し、玉縁となる。	底部回転糸切り、やや雑な作り、砂粒多く含む、鉄分、石英片含む。軟質、淡灰褐色。	完形 №1
壺	12	底径 12.5 高台径13.2	底部は凸面を呈し、薄い。端部はしっかりと張り出し、凹面となる。胴部は外傾気味に立上る。	底部は回転篦削り整形。胴下端部も篦削り。内面には水挽き痕を良く残す。一部灰釉がかかる。黒色微砂粒を含む、暗灰色。	底部のみ23%残存、焼成良好、覆土

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵壺	13	底径 9.0 高台径 9.8	胴部の外傾気味に立上る。高台は大きく外方へ張り出し、端面も外方を向く。	胴部は回転篦削り整形、高台部を付けた後、接合部をろくろナデを施す。内面水挽き痕を残す。微・細砂粒を多く含む、軟質須恵器、淡灰褐色。	胴部下端12%焼成良、覆土
磨石	14	長8.0幅7.6 厚5.8	自然石を利用し、磨ったものと思われ、一部平坦面となっている。	石質：花崗岩	No.8
磨石	15	長8.6幅8.3 厚4.7	自然石を利用し、表裏の平坦面は磨られて滑らかになっており、やや打痕も見られる。側面も粗く磨られて周辺部には稜線ができている。	石質：花崗岩	

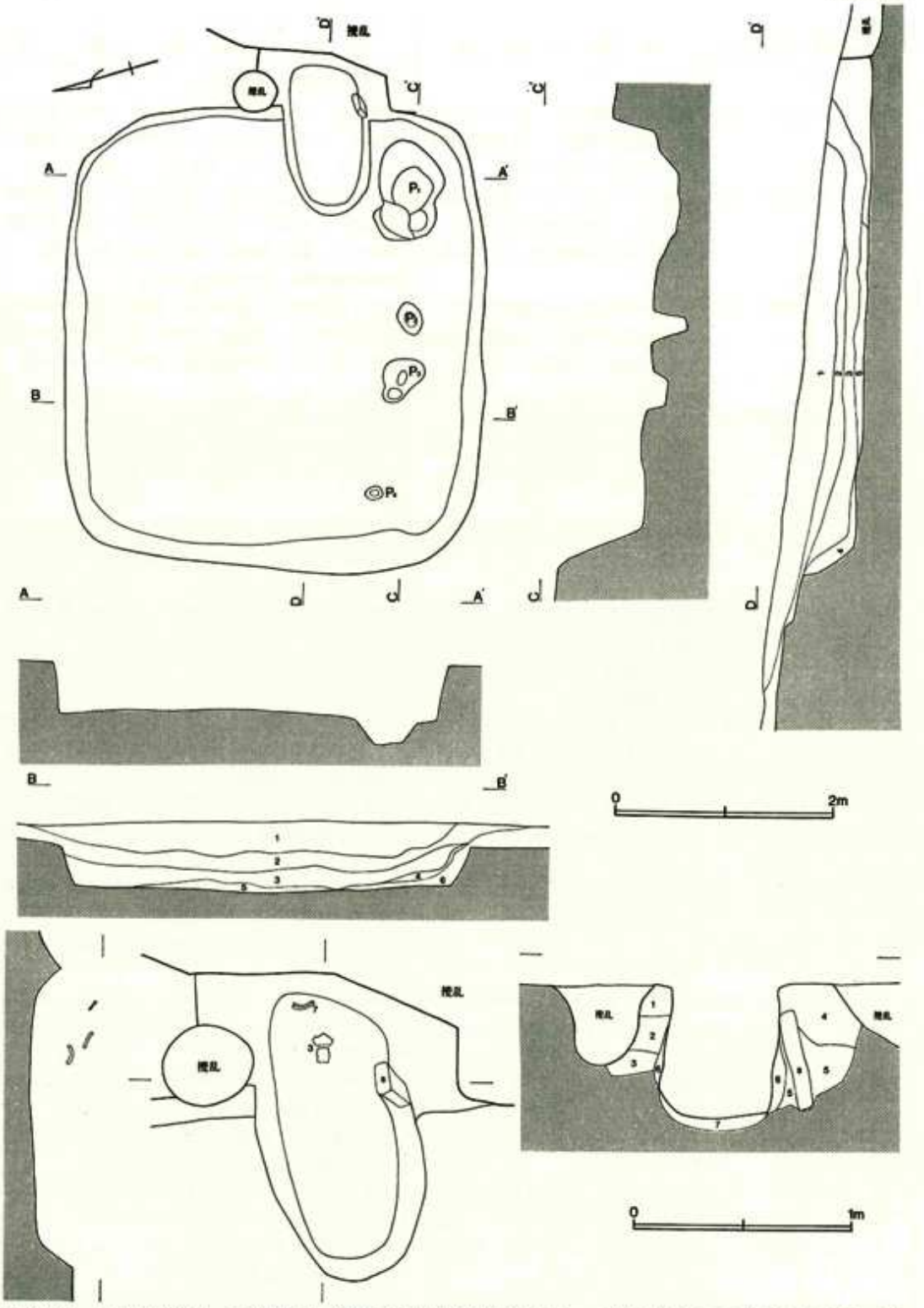
3号住居跡（第10図・図版3）

本跡は本住居跡群中の西端に位置し、北東に2号住居跡がある。大きさは4.17×3.86*m*の四隅のやや丸い方形を呈する。主軸の方向はN—107°—E。壁高は東側でやや深く60cm程である。竈は東壁に40cm程掘り込まれている。焚口部分は床面から深い部分で20cm程、掘り込まれており、底面は焼けて厚く赤変している。壁は粘土を主体にしてつくられており、右側袖には切石の凝灰岩が芯に使用されている。ピットは3ケ所確認されており、内1ケ所は不整円形で貯蔵穴と思われ、あとの2ケ所は柱穴であろう。出土遺物はカマド内から甕破片、覆土中から坏、灰釉皿等がある。

3号住居跡出土遺物（第11図・図版21・22）

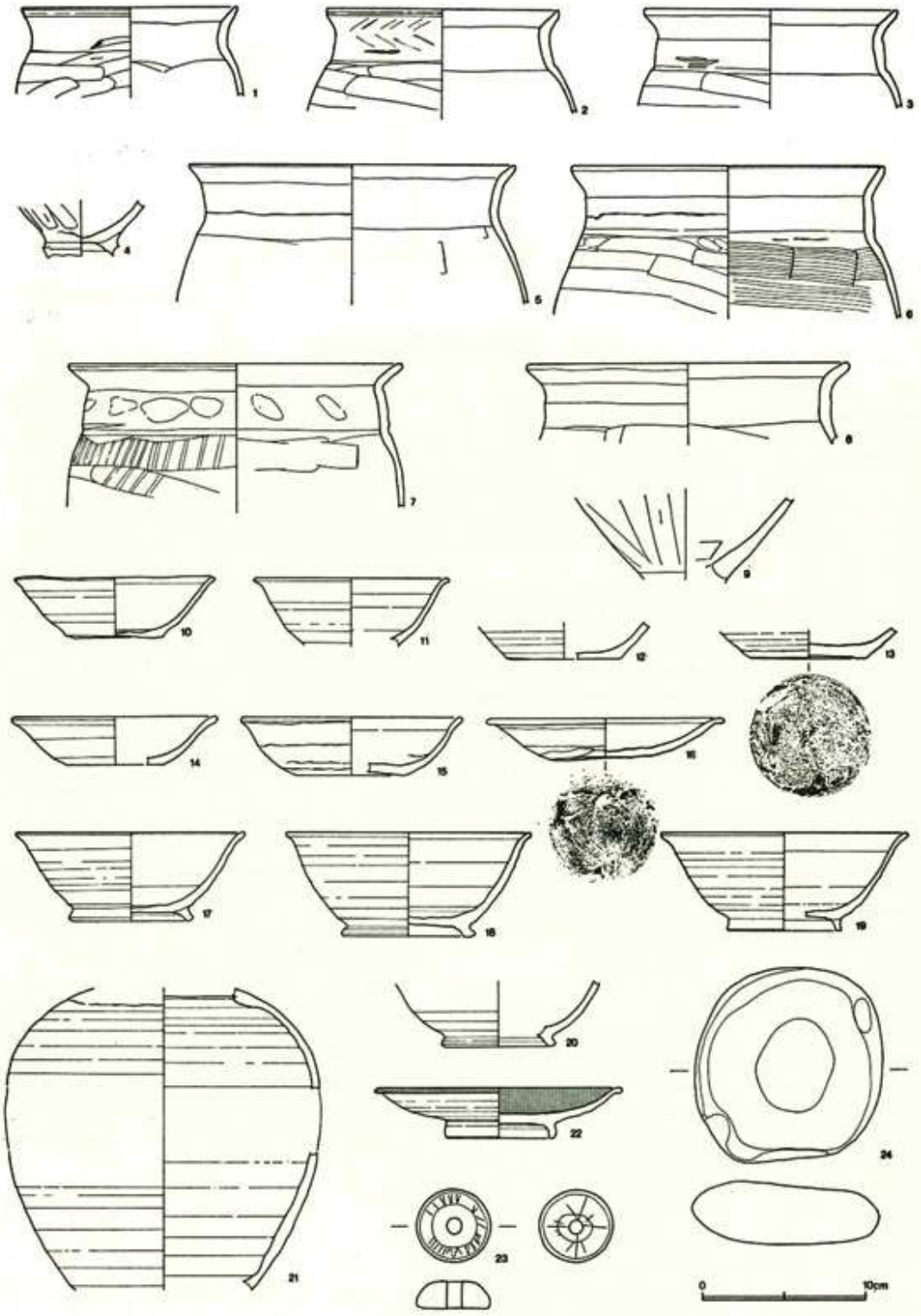
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師台付甕	1	口径 12.9	丸味を帯びて内傾する肩部から大きく括れて頸部は外傾し、口縁は内面で屈曲して外反し、端部は沈線をもってつまみ上げる。	口縁部横ナデ整形の後、肩部外面横篦削り、内面は篦ナデ整形。微・細砂粒、暗赤茶褐色。	口縁・肩部38%残。焼成良覆土
台付甕	2	口径 14.0	内傾する肩部からやや括れて頸部内傾気味に立上り、口縁は屈曲して外反し、端部沈線を持ち、つまみ上げる。	口縁部横ナデ整形の後、肩部外面横篦削り、内面木口状工具による横方向ナデ。頸部に指成形痕残る。微・細砂粒、暗赤茶褐色。	口縁・肩部60%残、焼成良覆土
台付甕	3	口径 15.3	丸味を持って内傾する肩部から括れて頸部立上り、更に括れて口縁外反し端部稜を持ちつまみ上げる。	口縁部横ナデ整形の後、肩部外面横篦削り。内面木口状工具の横方向ナデ。微・細砂粒、暗茶褐色。	口縁・肩部12%残、焼成良竈。
台付甕	4	底径 4.4	胴部は脚部との境に段を持ち、内湾気味に立上がる。底部は薄い。	胴部下半縦篦削り、内面剥離顕著。接合痕残し、脚部ろくろナ	底部50%残、焼成良、覆土

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
				デ。微・細砂粒、淡褐色。	
土師甕	5	口径 19.9	内傾する肩部から、緩やかに括れ、頸部は外傾し、口縁部で外反、端部をつまみ上げる。	口縁部横ナデ整形の後、肩部外面横箆削り。内面木口状工具使用横方向ナデ。微細砂粒、淡赤褐色。	口縁・肩部40%残、焼成良覆土、№5
甕	6	口径 8.9	内傾する肩部からやや括れ、頸部は直立し、更に括れて口縁外反し端部外面に沈線を持ってつまみ上げる。	口縁部横ナデ整形の後、肩部外面横箆削り、内面木口状工具使用横方向ナデ。微・細砂粒、赤茶褐色頸部に輪積痕、指ナデ痕を残す。	口縁・肩部90%残、焼成良覆土、竈。
甕	7	口径 9.5	内傾する肩部から沈線状に括れ、頸部はやや内湾し、沈線状に括れ口縁外反し、端部をつまみ上げる。	口縁・頸部横ナデ整形の後、肩部外面横箆削り。内面木口状工具使用横方向ナデ、微・細砂粒、暗茶褐色。	口縁・肩部60%残、焼成良好　№2竈
甕	8	口径 9.3	内傾する肩部から緩やかに括れ、頸部はまっすぐ立上がり、やや括れて外反し、端をつまみ上げる。	口縁部内外面横ナデ整形の後、肩部横褐削り。内面木口状工具使用横方向ナデ、微・細砂粒、淡赤褐色。	口縁・肩部23%残、焼成良好、覆土
台付甕	9	底径 5.1	胴部外傾。底部付近は厚い、やや大型。	胴部下半縦箆削り。内面剥離、横方向箆ナデ。微・細砂粒、淡赤茶褐色。	胴下半35%残、焼成良好竈№3・覆土
坏	10	口径 12.0 底径 5.9 器高 3.6	底部はやや上げ底で薄い。体部は稜を持ち、外反して直線状に外傾し、口縁端部をつまみ出している。器壁は薄い。	水挽き整形。底部内面中央にろくろ痕が残る。底部回転糸切り。小礫等を含む。濃青灰色。	50%残、焼成良好 №6　覆土
坏	11	口径 11.6	体部は丸味を持って立上がり、やや内湾して口縁部は外傾し、端部でつまみ出し、外面に稜を持つ。	水挽き整形。外面にろくろ目を残す。高台付であろう。微・細砂粒外面濃灰色・内面灰色。	口縁部12%残焼成良好、覆土
坏	12	底径 6.9	底部は平底。体部との境に稜があり、体部は緩く屈曲して立上る。	水挽き整形。外面にややろくろ目を残す。底部回転糸切り。微・細砂粒多し。鉄分含有。薄灰褐色。	底部20%残、焼成良、軟質
坏	13	底径 7.0	底部は平底、体部は外反気味に立上り、外傾する。	底部回転糸切り、水挽き整形、体部にろくろ目明瞭。微・細砂粒、石英片含有。青灰色、底部赤味帯びる。	底部のみ100%残、焼成良好堅緻、№9
坏	14	口径 20.3 底径 5.9 器高 2.9	底部は平底、体部は内湾気味に立上り、緩やかに口縁外反し、端部をつまみ出し、肥厚する。	底部回転糸切り、水挽き整形。ろくろナデの為か、ろくろ目不明瞭。微・細砂粒。暗灰色。	口縁・底部18%残、焼成良好、覆土
坏	15	口径 13.3 底径 6.6 器高 3.5	底部はやや上げ底。体部は内湾気味に立上り、口縁部外反し、端部をつまみ出す。	底部回転糸切り、水挽き整形。体部巻き上げ痕有。器面凹凸有。粗雑な作り、微・細砂粒、胎土灰褐色、須恵質、外面灰黒色(炭素吸着)	口縁底部18%焼成良覆土、竈
皿	16	口径 14.0 底径 6.6 器高 2.4	底部は平底、体部は鈍く稜を持ってやや内湾気味に外傾し、口縁端部は段を持って外反し、つまみ出して玉縁を呈する。	底部回転糸切り、ろくろ整形(?)体部回転箆ナデ、口縁部横ナデ、粗雑な作り、微・細砂粒、鉄分含有。土師質、淡茶褐色、底部黒色。	65%残。焼成良 №1
埦	17	口径 13.8 底径 7.0 器高 5.4	底部は平底、体部は外傾気味に立上り、やや内湾し、口縁部で緩やかに外反し、端部をつまむ。高台ハの字状、端面外向。	底部回転糸切り、水挽き整形、体部にろくろ目が残る。内面横ナデ微・細砂粒、鉄分含有。半還元炎焼成、胎土濃灰色・表面白褐色。	22%残、焼成良 覆土

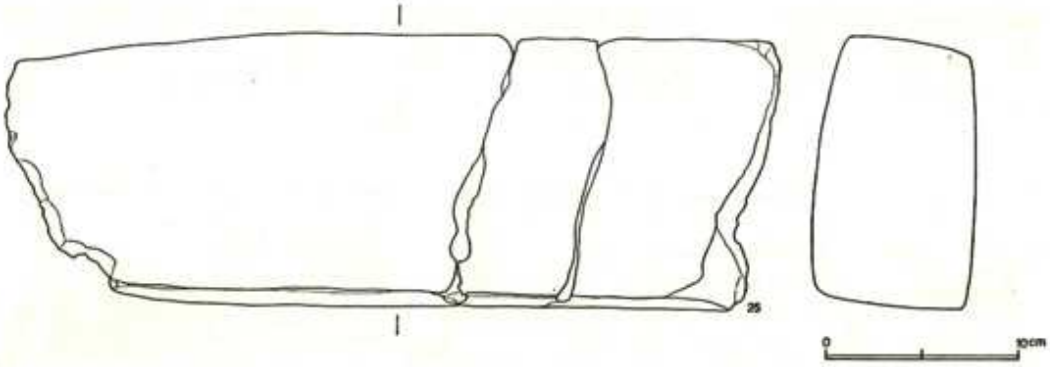


1黒褐色土　2暗茶褐色土　3茶褐色土（微量の炭化物と焼土を含む）　4茶褐色土（Ⅲより明るく炭化物を含む）　5暗茶褐色土（焼土炭化物を含む）　6茶褐色土（ロームブロックを含む）、1黒褐色土　2粘土　3黒褐色土（粘土混り）　4暗褐色土　5粘土混り　6焼土　7加熱ローム

第10図　沼下3号住居跡実測図



第11図　3号住居跡出土遺物実測図(1)



第12図　3号住居跡出土遺物実測図(2)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵埦	18	口径 14.8 底径 7.5 器高 6.3	底部やや上げ底、体部は厚く、外傾気味に立上がり、口縁部でやや外反し端部をつまみ出す。高台はハの字状、端面外向、丸味を帯びる。	底部回転糸切り、水挽き整形、ろくろ目やや残る。高台接合部横ナデ。半酸化炎焼成、底部・体部淡褐色、口縁部外面灰褐色。微・細砂粒、鉄分含有。	口縁部30% 底部完存 焼成良好 №11
坏	19	口径 14.9 底径 6.9 器高 5.9	底部やや上げ底。体部は内湾気味に立上がり、口縁部で外傾し、端部をややつまみ出す。高台薄く直立気味。端面水平、稜は鋭い。	底部回転糸切り。水挽き整形、外面にろくろ目残す。微・細砂粒、石英砕片含有、濃青灰色。	30%残 焼成良好 №6
坏	20	底径 6.6	体部内湾気味にやや角度を持って立上がり、直線状の口縁へ続く。高台はハの字状、端面外向、丸味をもつ。	体部横ナデ整形。微・細砂粒、鉄分含有、半還元炎焼成、淡紫褐色。	体部高台部20%残、焼成良好、覆土
灰釉長頸瓶	21	胴部径19.0 底径 10.8	胴部は外傾気味に立上がり、胴上半部で直立気味になり最大径をもつ。肩部で大きく内傾し、頸部との接合部に続く。	巻き上げ、水挽き整形、胴部下半は回転箆削り、肩部は釉を塗り、淡緑色を呈する、胎土灰色、白色・黒色の微砂粒含有、内面ろくろ痕を残し、肩部内外面に頸部との接合痕を残す。	肩部23%、胴下半部25%残 焼成良好、堅緻、覆土
灰釉皿	22	口径 14.7 底径 6.7 器高 3.1	底部は平底、体部は水平に近く外傾して、やや内湾気味になり、口縁端部を大きくつまみ出し、玉縁となる。高台は内湾し、端部丸い。	水挽き整形、底部回転箆削り。体部、口縁部布等によるろくろナデややろくろ目を残す。体部上面、口縁部に薄く淡緑色の釉を塗る。	口縁部20%他完存、胎土灰白色、黒斑有 焼成良好№7
石製紡錘車	23	直径 4.5 高 1.2 孔径 0.9 重量52.5g	底面は平らになっており、周辺部に凹凸がある。円形と孔を中心にした十文字の線刻がある。上面は平らで、孔周辺に接線方向の刻みをもつ。孔上面の稜は磨滅している。側面は縦方向の線刻(?)が無数についている。		

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
磨石	24	長 10.6 幅 10.4 厚 3.7	河原石を利用しており、上面中央部が凹んでおり、台石として使用されたものかと思われる。		
竈袖石	25	長 40.0 幅 14.0 厚 8.4	切石凝灰岩を使用。やや狭まった先端をローム中に立てており、この部分、表面は暗褐色を呈し、これから上は、熱を受けて、淡赤褐色を呈し、亀裂が入り、表面剥離している。		

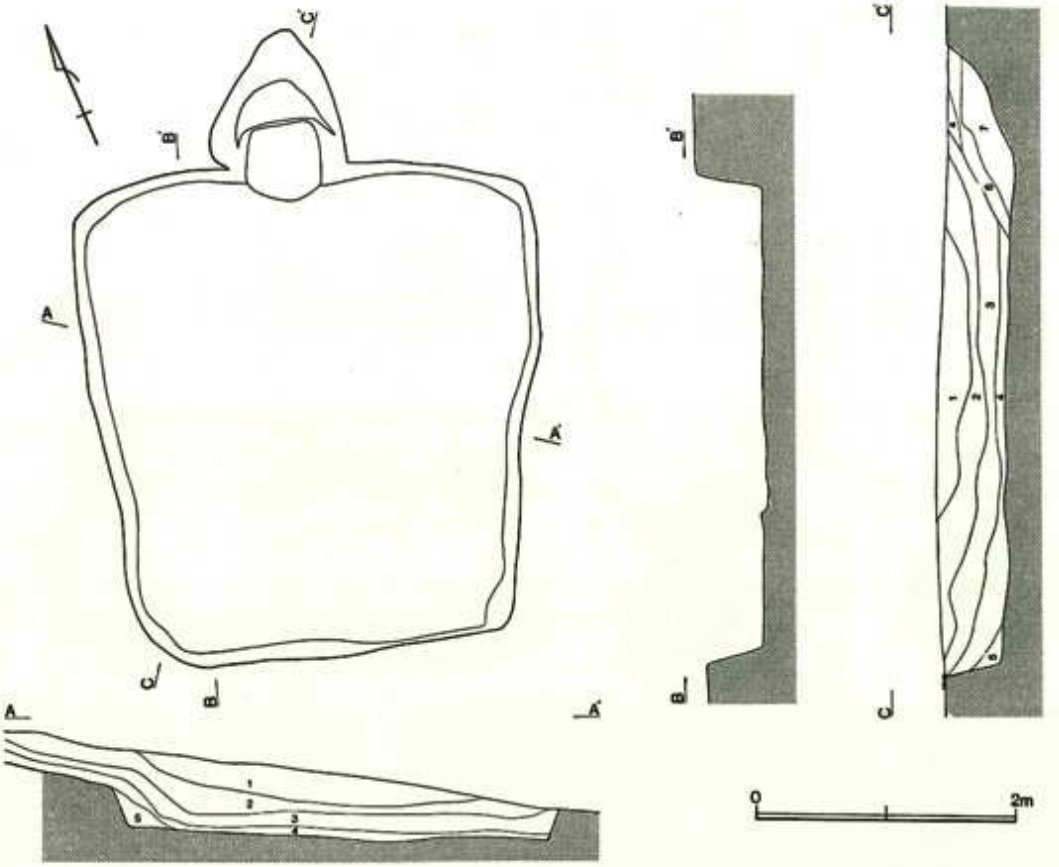
4号住居跡（第13図・図版4）

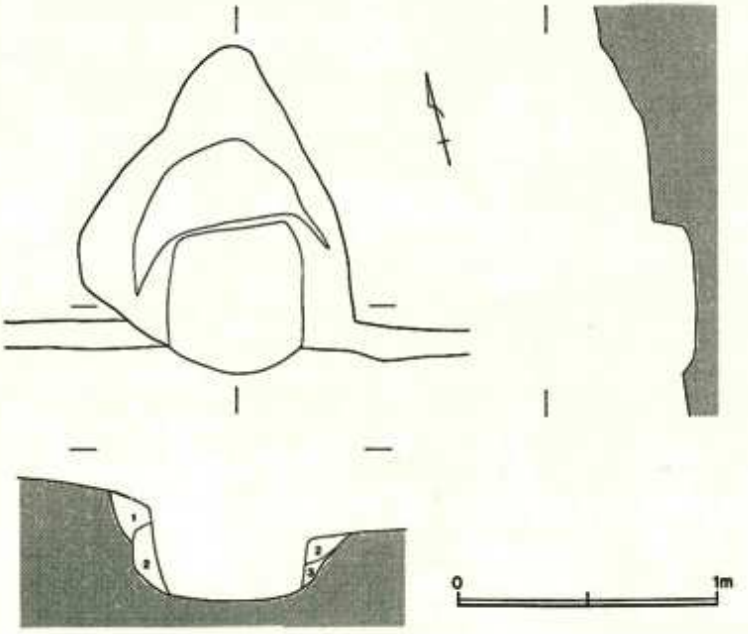
遺跡の西側の1群中にあり、西に3号住居跡、北に7号、東に6号の各住居跡がある。大きさは4.17×3.86mの北側の竈をもつ辺がやや長い方形を呈する。主軸の方向はN—19°—E。壁高は北側で深く約50cmである。竈は北の壁を掘り込んでおり、底面はほとんど壁より外にある。煙道は60cm程の長さで、ゆるやかに立ち上がっている。出土遺物は竈内から土師器甕破片、覆土中から坏・埦等の破片および須恵器硯破片がある。

4号住居跡出土遺物（第14図・図版22）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師台付甕	1	口径 13.0	内傾する肩部から稜を持って括れ、頸部は直立し更に括れて、口縁部は直立気味に外反し、端部はつまみ、丸い。	口縁部横ナデの後、肩部横箆削り。内面木口状工具等による横方向ナデ。微・細砂粒、淡褐色。	口縁部20%残焼成良好、竈
甕	2	口径 14.3	台付甕かと思われる。強く内傾する肩部から大きく括れて頸部は内傾気味に直立し更に括れて口縁部は外反し、端部をつまみ、沈線が周る。	口縁部横ナデの後、肩部外面横箆削り。内面木口状工具等による横方向ナデ。頸部に箆の先端痕残す。微・細砂粒、淡茶褐色。	口縁部15%残焼成良好、覆土
甕	3	口径 19.9	内傾する肩部から稜を持ってやや括れ、頸部やや外傾し、口縁部で外反し、端部をつまみ上げる。	口縁部横ナデの後、肩部外面横箆削り、内面箆ナデ、頸部に巻き上げ痕残す。微・細砂粒、淡褐色。	口縁部15%残焼成良、覆土
甕	4	口径 22.3 胴部径23.9	胴部から外傾し、肩部で最大径を持ち、内傾し、緩やかに括れ、頸部で直立し、緩やかに外反し、端部は丸味が強い。	口縁部粗い横ナデの後、肩部横箆削り、肩部以下縦箆削り。内面粗い木口状工具による横方向ナデ、微・細砂粒・鉄分含有、胎土淡赤褐色、器面暗赤褐色。	口縁・肩部23%、焼成良、竈・覆土

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師甕	5	口径 20.0	胴上半部は直立気味に内傾し、肩部で稜を持って更に内傾し、括れて頸部は直立し、緩やかに口縁部で外反し、端部をつまみ上げ、外面に鈍い稜を持つ。	口縁部横ナデの後、肩部外面横箆削り、そして胴上半部横箆削り、内面木口状工具によるていねいな横方向ナデ、微・細砂粒・鉄分含有、薄褐色、胎土薄灰褐色。	口縁・肩部35%、焼成良、竈・覆土
甕	6	口径 19.6 胴部径21.9	肩部は強く張り、内傾し、括れて頸部はやや内傾し、大きく括れて口縁部外反し、端部をつまみ上げる。	口縁部横ナデの後、肩部外面横箆削り、内面木口状工具による横方向ナデ、微・細砂粒・淡暗褐色。	口縁・肩部15%、焼成良、覆土
須恵坏	7	底径 6.8	底部平底、体部は稜を持って、内湾気味に立上がる、底部厚い。	水挽き整形、底部回転糸切り、内面にろくろ目を残す。微・細砂粒半酸化炎焼成、底部暗赤褐色・体部暗灰褐色。	底部のみ完存 焼成良好 覆土
坏	8	底径 6.8	底部平底、体部内湾気味に立上がる。高台薄く、ハ字状に立ち、端面は丸く、外向する。	水挽き整形、底部回転糸切り、細砂粒、鉄分多く含む、石英片含有酸化炎焼成、器面粗い。	底部のみ完存 焼成良好 覆土
坏	9	底径 6.9	底部平底、体部外傾して立上がる。高台外反気味に、端部大きく凹面となり水平。	水挽き整形、底部回転糸切り。半酸化炎焼成、胎土赤褐色・表面薄灰褐色。	底部75%残 焼成良 No.1
坏	10	底径 6.7	底部平底、体部稜を持って内湾気味に立上がる。高台薄く、ハの字外反、端面水平丸味を帯びる。	水挽き整形、底部回転糸切り、砂粒分多く器面荒れる。気泡多い、濃灰色。	底部60%残 焼成良 覆土
坏	11	口径 13.6 底径 6.3 器高 4.9	底部平底。体部やや厚く、緩やかに内湾気味に外傾し、口縁端部をややつまみ出す。高台低くつぶれる。端面丸く外向。	水挽き整形、体部回転箆ナデ口縁部横ナデ、底部回転糸切り高台部接合痕残し、底部焼成時亀裂あり底部周辺黒色、他灰色、軟質。	60%残 焼成良 覆土・No.2
坏	12	口径 16.8 底径 7.2 器高 6.2	底部平底、体部厚く、屈曲して外傾気味に立上がり、口縁部でやや立ちぎみになり、端部をつまみ出す。高台低くつぶれ、端面丸い。	水挽き整形。底部回転糸切り、高台接合後外面横ナデし、段をもつ。細砂粒多く含む、粗雑、器面荒れる、灰褐色、軟質須恵質。	20%残 覆土
皿	13	口径 13.1 底径 (6.0) 残高 (2.3)	底部平底・高台欠失、体部厚く、外傾し、端部でやや外反し、薄くなる。	水挽き整形、底部回転糸切り、砂粒分多い、胎土・底部灰褐色、口縁部黒色、軟質須恵質。	40%残 覆土
皿	14	底径 9.4	底部若干上げ底、体部外傾気味に立上がる。	水挽き整形、底部回転糸切り、灰褐色・須恵質、焼成良好。	底部30%残 覆土
須恵器 円面硯	15	硯面径12.8	脚部ハの字状に開くものと思われ口縁端部は外傾して立上がり、端部は四角く、外側に折返してい	水挽き整形、口縁部周辺布等による横ナデ。海部には指等の押さえ痕が残る。陸部は磨られて滑らか	硯部60%残 焼成良好堅緻 No.4

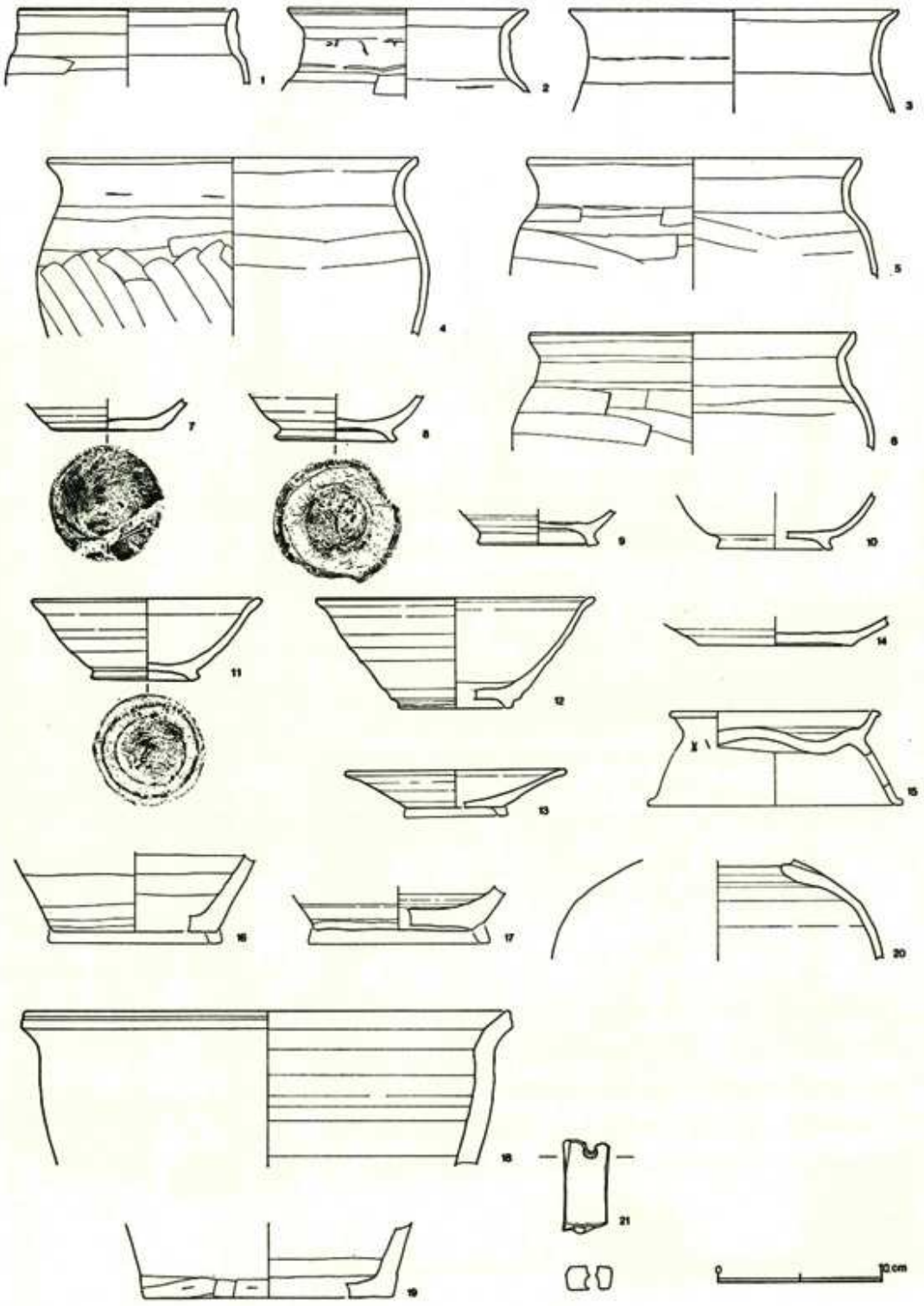




1　黒色土（炭化物を少量含む）
2　黒褐色土
3　褐色土
4　褐色土（ロームブロックを含む）
5　茶褐色土（ロームブロックを多量に含む）
6　褐色土（焼土・粘土を若干含む）
7　褐色土（焼土・粘土を多量に含む）

1　褐色土（粘土焼土を少量含む）
2　黒褐色土（焼土を含む）
3　暗褐色土

第13図　沼下４号住居跡実測図



第14図　4号住居跡出土遺物実測図

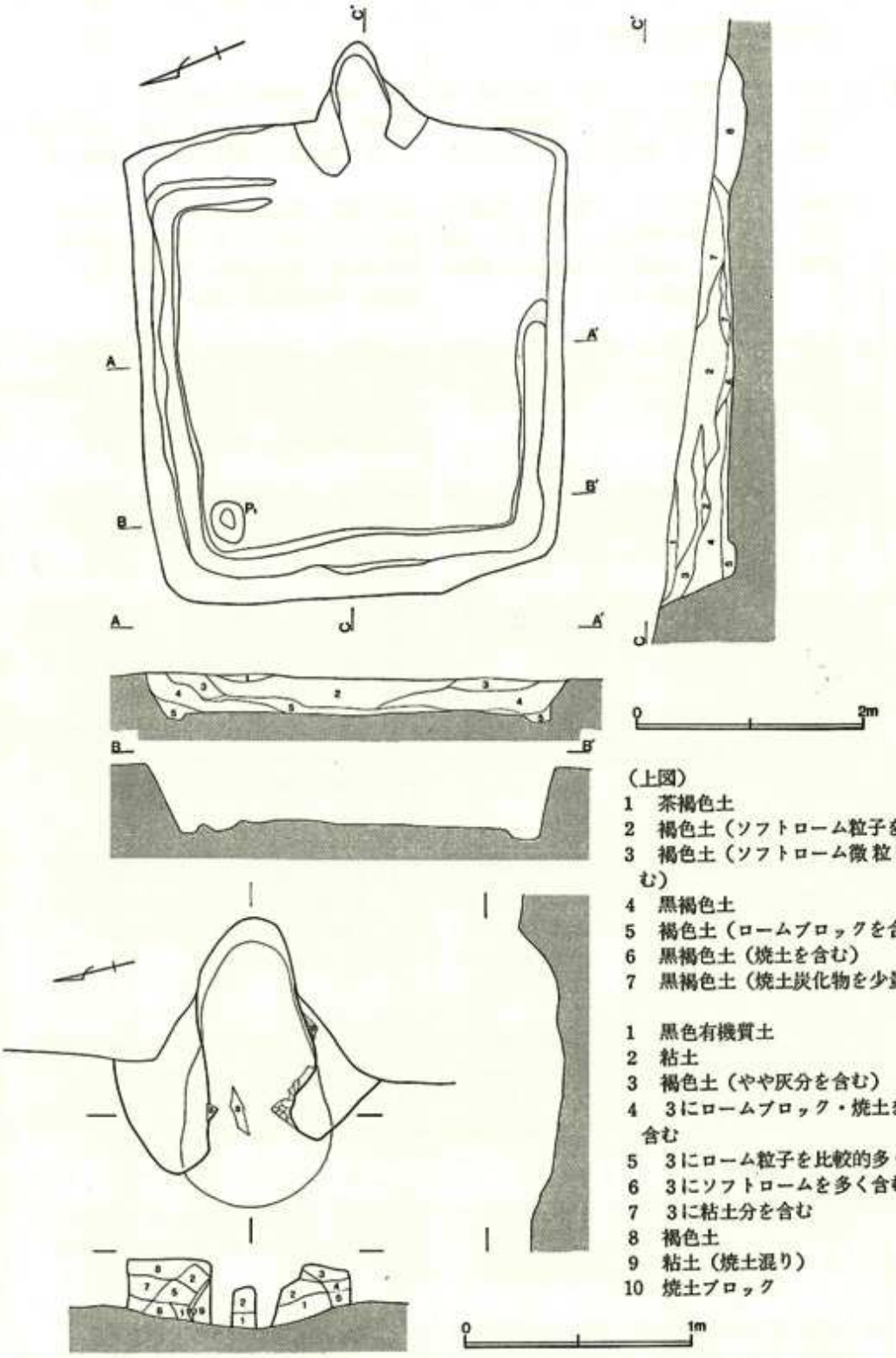
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
			る。硯面は海部を指等で窪めて成形し、陸部より低くなっている。脚部は箆描き沈線により、文様を刻み、長方形の窓のある部分もある。	になっている。細砂粒・淡灰色	
須恵壺	16	底径 10.3	底部は平底、胴部は外傾気味に立上がる。	巻き上げ後、水挽き整形。外面横ナデ、下端横箆ナデ整形、底部箆削り、高台接合後横ナデ。濃灰色	胴下半部30%残 焼成良好・堅緻、覆土
甕	17	底径 10.5	底部は平底。胴部はやや角度を持って外傾する。高台はやや薄く、外方へふんばるようである。	巻き上げ後・水挽き整形。底部回転箆ナデ、胴下端部外面回転箆ナデ、濃灰色、細かい石英砕片含む。	底部15%残 焼成良好 覆土
甕	18	口径 29.5	鉢に近い形。胴部は外傾気味に立上がり、口縁部でやや括れて外反し、端面は外向し、沈線を持つ。端部はやや丸い。	巻き上げ後・水挽き整形。口縁～胴上半部横ナデ。白色砂粒含有。灰色・軟質。	口縁部13% 焼成良
甕	19	底径 15.2	底部平底、胴部は直立し、段を持ってやや外傾する。	巻き上げ後・水挽き整形。底部箆削り、胴部下端外面一周横箆削り胴下半部横ナデ、内面荒い横ナデやや大きい砂粒含む、濃青灰色。	底部20% 焼成良好 覆土
灰柚壺	20	肩部径20.1	肩部は緩やかに内傾し、肥厚して頸部に続く。	巻き上げ後・水挽き整形。頸部との接合痕を残す、淡緑色の釉がかかる。暗灰色・黒色砂粒多い。	肩部12%残 焼成良好、堅緻、覆土
砥石	21	残存長 5.6 幅 2.7 厚 1.4	小形、四面使用、一端に両面からの穿孔が見られる。		凝灰岩製

5号住居跡（第15図・図版4）

遺跡の西側の一群中にあり、西に6号、北に1号の各住居跡が隣接している。大きさは4.06×2.81mの竈をもつ東壁が西壁よりやや長い長方形を呈する。壁高は深い部分で54cmであるが東側は浅い。壁溝は南壁のほぼ中央部から一周するが、東壁の20cm程内側で曲って消える。ピットは北西隅に一カ所検出したが深さ7cm程の浅いものである。出土遺物は竈内から甕破片、覆土中から坏等がある。

5号住居跡出土遺物（第16図・図版22・23）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師甕	1	口径 9.7	内傾する肩部から緩やかに括れて頸部は直立し、屈曲して口縁部は外反し端部をつまみ上げる。	口縁部横ナデの後、肩部横箆削り縦方向に段をもつ。微・細砂粒、口縁・外面赤褐色、内面淡褐色。	口縁部18%残 焼成良 覆土
甕	2	口径 20.7	内傾する肩部から括れて頸部は外傾気味に直立し、口縁部で外反する。	口縁部横ナデの後、肩部横箆削り、頸部に指ナデ・接合痕を残す。内面木口状工具による横方向ナデ。微・細砂粒、淡赤褐色。	口縁部13%残 焼成良 覆土
台付甕	3	口径 14.1	内傾する肩部から緩やかに括れて頸部はやや外傾し、口縁部で内面に稜を持って外反し、端部をつまみ出す。	口縁部横ナデの後、肩部外面横箆削り、内面箆ナデ、微・細砂粒、外面淡褐色　内面暗褐色。	口縁部40%残 焼成良 竈
甕	4	底径 5.0	平坦な底部から、外傾して立上がる。内面は緩やかに立上がる。	底部箆削り、胴下半部縦箆削り、内面箆ナデ時の先端痕が残る、微・細砂粒、淡赤褐色、外面暗褐色。	底部破片 焼成良 竈
甕	5	底径 4.3	平坦な底部から、外傾して立上がる、内面は緩やかに立上がる。	底部箆削り、胴下半部縦箆削り、内面木口状工具等によるナデ、微・細砂粒、赤褐色、外面黒褐色。	底部破片 焼成良 覆土
須恵坏	6	口径 11.8 底径 (7.3) 器高 (3.3)	体部は内湾気味に立上がり、口縁は外傾する。	水挽き整形、体部外面にややろくろ目を残す。微・細砂粒多く含む。胎土灰色、内外面黒灰色。	口縁部15%残 焼成良 覆土
坏	7	口径 10.6 底径 5.9 器高 3.7	やや上げ底の底部から外反気味に立上がり、体部で膨らみ内湾し、口縁部で外反し端部をつまむ。	水挽き整形、体部外面にろくろ目を残す。底部回転糸切りの後、手持ち箆削り。細砂粒・鉄分・石英片含有、気泡痕あり、濃青灰色。	80%残 焼成良好 覆土
坏	8	口径 12.6 底径 6.2 器高 3.7	やや上げ底の底部から、稜を持って外傾気味に立上がり、やや内湾し、口縁端部をややつまみ出す。	水挽き整形後、横ナデ、底部回転糸切り、細砂粒多、石英片含有、灰色・口縁部灰黒色・軟質。	口縁部40%残 他完存 No.2
坏	9	口径 12.2 底径 5.8 器高 3.3	やや上げ底の底部から稜を持って内湾気味に立上がり、口縁部でやや外反し、端部は丸い。	水挽き整形後横ナデ、底部回転再糸切り。細砂粒、石英片含有、灰色。	60%残 焼成良好 No.3
坏	10	口径 12.9 底径 6.7 器高 3.4	底部は上げ底。体部は稜を持って内湾気味に立上がり口縁部で外面に稜を持って外反し、端部をつまみ、端部は丸い。	水挽き整形、底部回転糸切り、微・細砂粒多・石英片・鉄分含有、灰褐色。	95%残 焼成良 No.12
坏	11	口径 12.1 底径(≒6.1)	体部は緩やかに内湾気味に立上がり、口縁部で外反し、端部をつま	水挽き整形、微・細砂粒、灰褐色。	口縁部25%残 焼成良

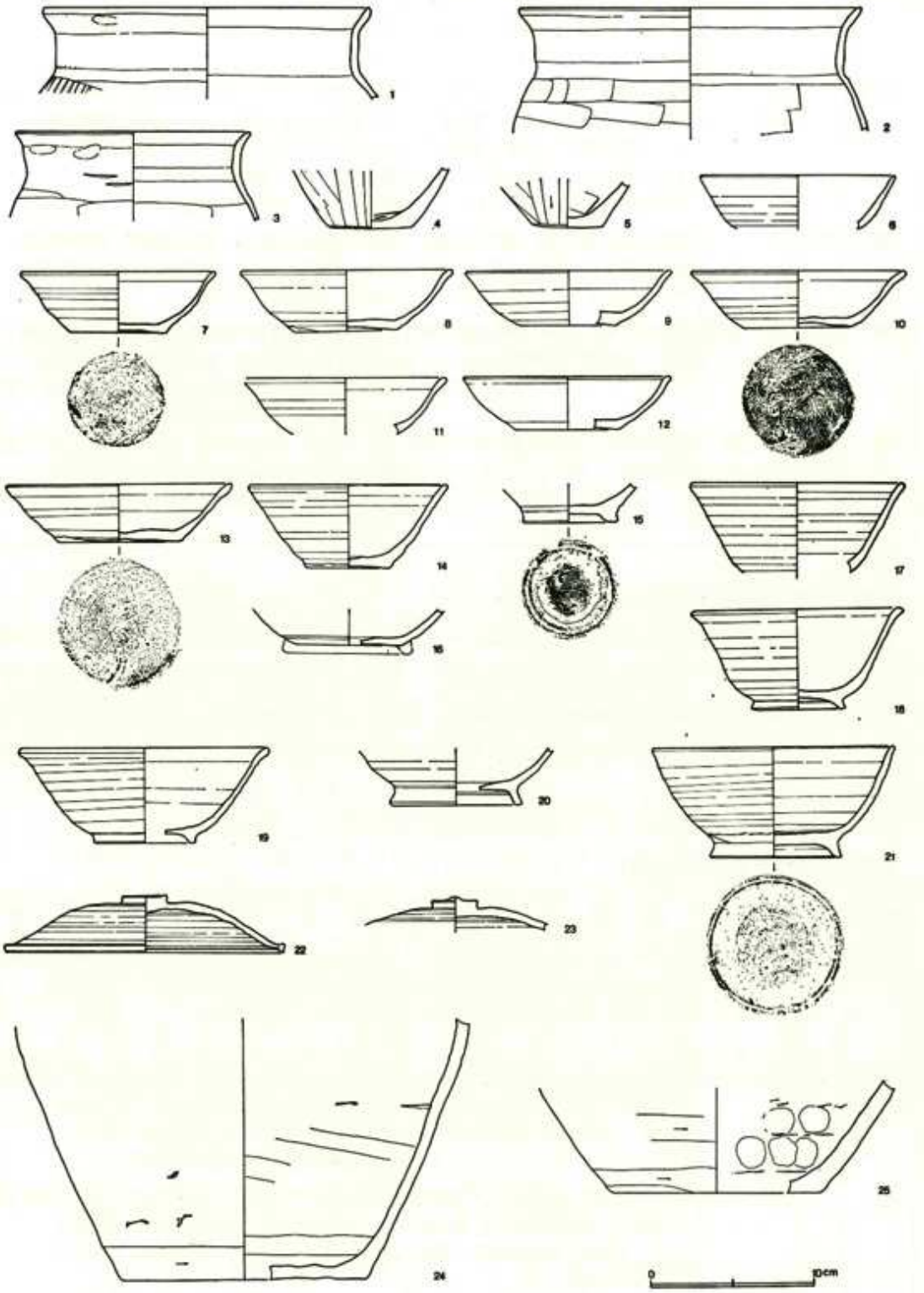


（上図）
1　茶褐色土
2　褐色土（ソフトローム粒子を含む）
3　褐色土（ソフトローム微粒子を含む）
4　黒褐色土
5　褐色土（ロームブロックを含む）
6　黒褐色土（焼土を含む）
7　黒褐色土（焼土炭化物を少量含む

1　黒色有機質土
2　粘土
3　褐色土（やや灰分を含む）
4　3にロームブロック・焼土を僅かに含む
5　3にローム粒子を比較的多く含む
6　3にソフトロームを多く含む
7　3に粘土分を含む
8　褐色土
9　粘土（焼土混り）
10　焼土ブロック

第15図　5号住居跡実測図

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
		器高(≒3.6)	み出し、端部は丸い。		覆土
須恵坏	12	口径 12.5 底径 6.4 器高 3.2	底部はやや上げ底、体部は緩く稜を持ち、屈曲して内湾気味に立上がり、口縁端部をややつまみ出す。	水挽き整形、底部回転糸切り、胎土暗褐色、表面白味がかった灰褐色、微・細砂粒、半酸化炎焼成。	12%残 焼成不良表面剝離、覆土
坏	13	口径 13.5 底径 7.4 器高 3.5	底部はやや上げ底、厚い底部から体部は稜を持って立上がり、外傾し、口縁部で一度薄くなり端部付近で肥厚する。	水挽き整形、底部回転糸切り、口縁部ろくろ目を残す、微・細砂粒石英片含有、胎土淡灰色、口縁部黒灰色、表面淡褐色・軟質。	70%残 焼成良 №11
坏	14	口径 11.8 底径 5.2 器高 5.0	底部はやや上げ底、口縁は鈍く稜を持って立上がり、外傾する。端部は丸い。	水挽き整形、底部回転糸切り、口縁部ろくろ目を残す、微・細砂粒白色砂粒を多く含む。茶褐色、口縁・胎土暗灰褐色、焼損じ須恵器	底部50% 口縁部20%残 焼成良 覆土
坏	15	底径 5.9	底部は平底、体部は稜を持って外傾して立上がる。高台は直立し、端面は水平、凹線をもつ、厚い。	水挽き整形、底部回転糸切り、高台周辺ろくろナデ、灰色、細砂粒多く含む。	底部のみ 焼成良 覆土
坏	16	底径 7.7	底部はやや上げ底、体部は屈曲して立上がり、内湾気味になる。高台部欠失。	底部回転糸切り、水挽き整形、微・細砂粒、鉄分含有、淡褐色・器面磨滅・灰褐色か(酸化炎焼成)	底部30%残 焼成良 覆土
坏	17	口径 12.8	体部は内湾して立上がり口縁部は外傾し、端部をややつまみ出す、高台付。	水挽き整形、口縁部にろくろ目を残す。微・細砂粒・白色砂粒多く含む、灰褐色・褐色部あり、胎土坏14に似る。	口縁部35%残 焼成良 覆土
坏	18	口径 12.5 底径 5.5 器高 6.1	底部やや上げ底、体部は内湾気味に立上がり口縁部で外傾し、端部を大きくつまみ出し、肥厚する。高台薄く低い、ハの字状に立ち、端部稜を持ち、やや外向する。	水挽き整形、口縁部にろくろ目を残す、微・細砂粒、白色砂粒多く含む、灰褐色、口縁部黒味がかる、一部褐色、埦17に似る。	25%残存 焼成良好 覆土
坏	19	口径 14.9 底径 6.5 器高 5.8	底部やや上げ底、体部は緩やかに内湾して立上がり、口縁部外傾し、端部を丸くつまみ出す。高台はハ字状に立ち、端部稜を持ち、端面水平。	水挽き整形・底部回転糸切り、口縁部にろくろ目を残す。微・細砂粒、白色砂粒含有、灰茶褐色、口縁部黒味がかる、埦18に似る。	20～45%残 焼成良 覆土・№10
埦	20	底径 7.6	底部薄く平底、体部は直線状に外傾して立上がる。高台薄く高く、ハ字状に立つ、端部丸味を持つ。	水挽き整形・底部回転糸切り、体部にろくろ目を残す、微・細砂粒灰色。	底部半欠 焼成良好 覆土
埦	21	口径 14.6 底径 7.6 器高 6.7	底部やや厚く平底、体部緩やかに立上がり、やや内湾気味に外傾し、端部をつまむ、高台ハ字状に	水挽き整形、底部回転糸切り、口縁部にろくろ目を残す。高台部接合痕を残す。微・細砂粒・片岩質	完成 焼成良好・堅緻



第16図　5号住居跡出土遺物実測図

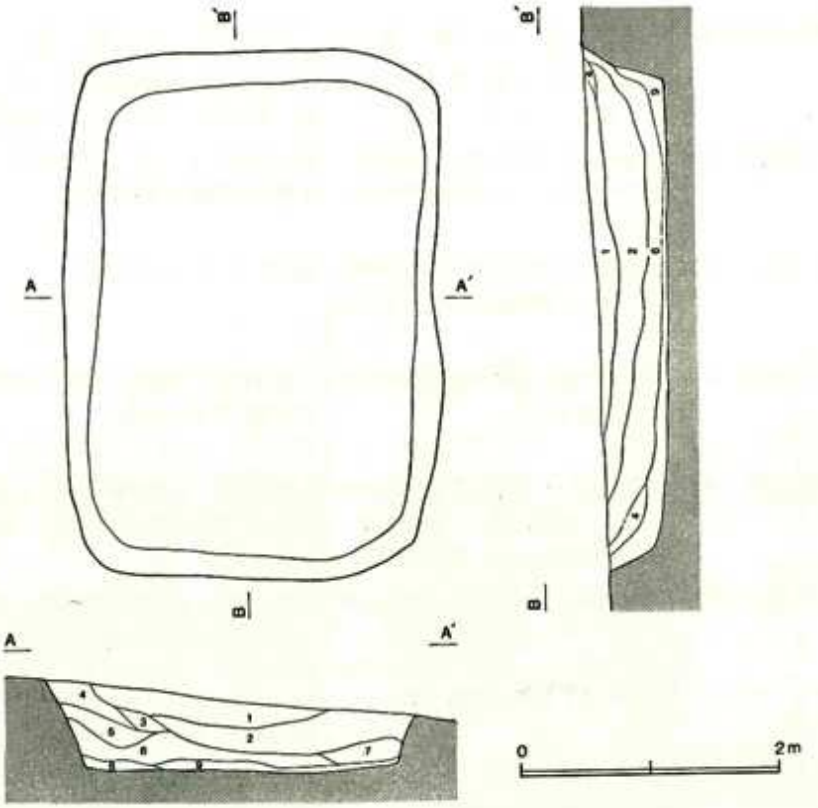
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
			しっかりと立ち、端面凹線を持ち水平。	・石英径5ミリ程の砕片含む、濃灰色。	No.1
須恵蓋	22	口径 17.0 器高 3.4	頂上中央部はやや窪み、肩部はやや丸味を帯び、緩やかに稜を持って、裾部へ続く。端部は外反して水平に張り出し、稜を持つ。鈕は宝珠形の崩れた形を呈する。	水挽き整形、頂上中央部は回転糸切り後肩部回転箆削り、口縁端部は内面に接合痕が残る。鈕は接合痕を残す。微・細砂粒、鉄分、片岩質片含有、灰色・内面濃灰色。	95%残 焼成良好 No.6
蓋	23		頂部中央やや凹み、肩部は丸味を帯び、緩やかに裾部へ続く、鈕はややしっかりし、先端は尖る。	頂部は回転糸切り後、肩部回転箆削り、裾部は水挽き。鈕は接合痕を残す。細砂粒、濃灰色。	頂部40%残 焼成良好 覆土
甕	24	底径 15.0	底部は平底、胴部は稜を持って外傾し、上半部で内湾する。	底部箆削り、胴下半部回転箆ナデ上半部内外面横ナデ、胴上半部に巻上げ痕を残す。細砂粒・片岩片を含む、灰褐色・胴上半濃灰色。	底部25%残 焼成良好 No.7・9・13
甕	25	底径 12.7	底部は平底、胴部は稜を持って外傾する。	巻き上げ後、水挽き整形、底部箆削り、胴部下端箆削り、胴部内外面横ナデ、内面に巻き上げ痕、指ナデ痕を残す。	底面を欠く25%残存 覆土

6号住居跡（第17図・図版5）

遺跡の西側の一群中にある。西に4号、北に1・7号、東に5号の各住居跡が本跡を囲むように位置する。大きさは4.06×2.81*m*の南北方向にやや長く、隅の丸い長方形である。長軸の方向はN—9°—E。床面はほぼ平坦で壁はやや斜めに立ち上がる。カマド、ピット等はなく、住居跡とは性格の異なるものと思われる。出土遺物は2点あるが、覆土中の上層からのもので、本遺構に伴なうとは思われない。

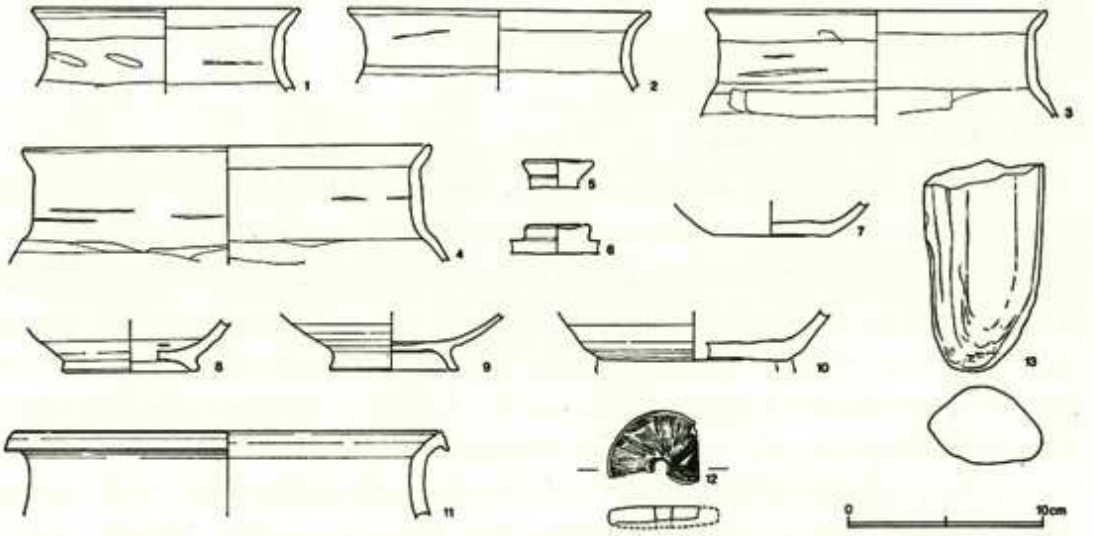
6号住居跡出土遺物（第18図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師台付甕	1	口径 13.6	内傾する肩部から緩やかに括れて頸部は直立し、更に括れて口縁部は稜を持って外反し、端部をつまむ。	口縁部内外面横ナデの後、肩部横箆削り。頸部に指成形痕が周る。微・細砂粒、淡茶褐色。	口縁部12%残 焼成良 覆土
台付甕	2	口径 15.4	内傾する肩部から括れて、頸部は直立気味になり、口縁部で外反し端部をつまみ上げ、外面に稜をもつ。	口縁部内外面横ナデの後、肩部横箆削り、頸部に巻き上げ痕を残す。微・細砂粒、口縁部～外面淡赤褐色・頸部内面暗褐色、外面煤付着。	口縁部13%残 焼成良 覆土
甕	3	口径 17.4	薄い、内傾する肩部から、稜を持って括れ、頸部は直立し、更に稜を持って括れ、口縁外反し、端部をつまみ上げる。	口縁部横ナデの後、肩部横箆削り、肩部内面木口状工具使用横方向ナデ。微・細砂粒、淡茶褐色。	口縁部15%残 焼成良 覆土
甕	4	口径 20.8	内傾する肩部から大きく括れて、	口縁部横ナデの後、肩部横箆削り	口縁部18%残



1　暗褐色土
2　褐色土
3　黒色土
4　黒褐色土
5　暗褐色土
6　褐色土（2より黒い）
7　褐色土（6より黒い）
8　黄褐色土（ロームブロックを含む）
9　褐色土

第17図　沼下6号住居跡実測図

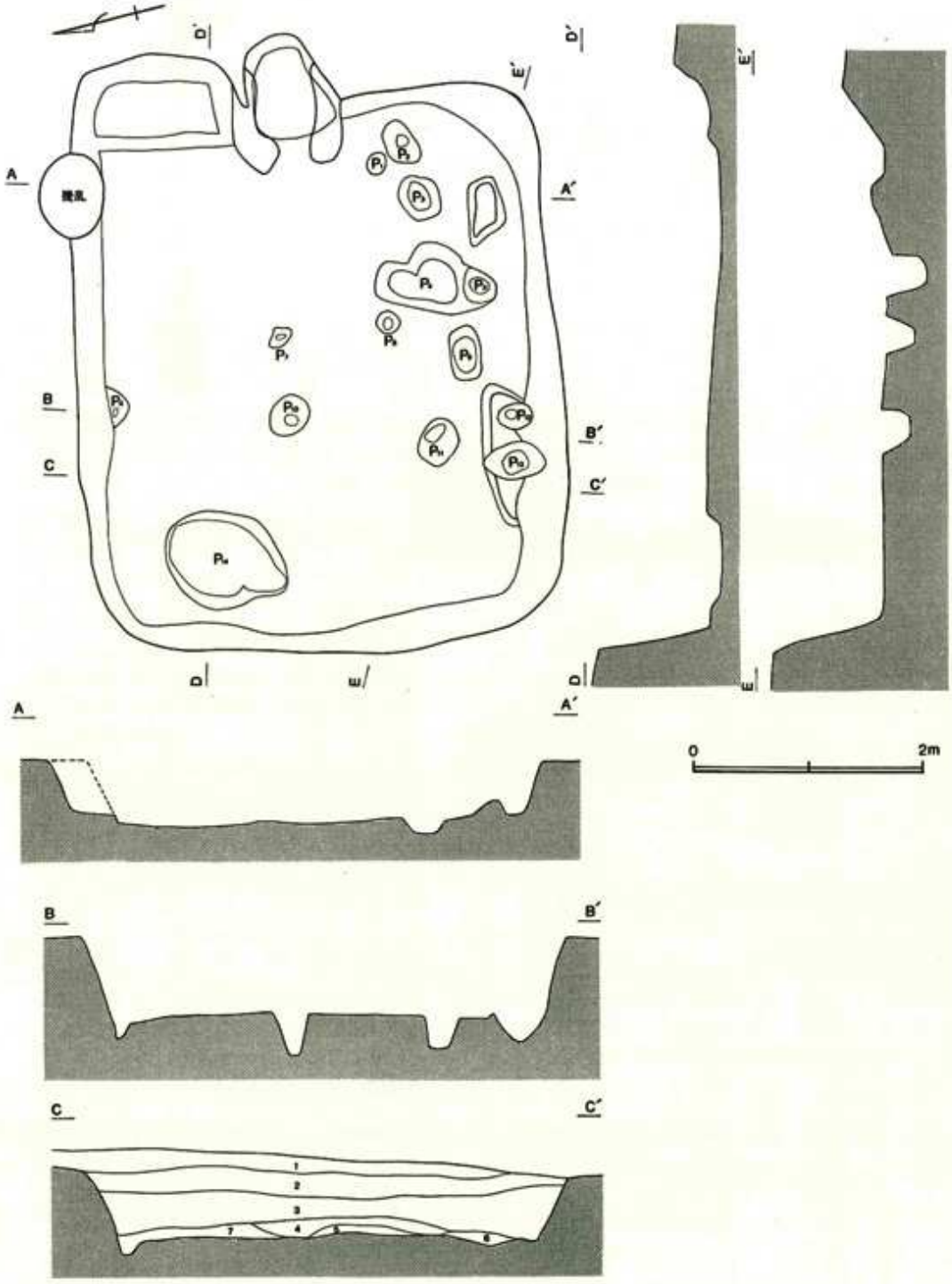


第18図　6号住居跡出土遺物実測図

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
			頸部は直立し、更に括れて外反し、端部をつまみ上げる。	内面木口状工具使用横方向ナデ、微・細砂粒・鉄分含有、淡赤褐色	焼成良好 No.2
須恵蓋	5	鈕径 3.6	宝珠鈕のくずれた形で、周辺部が大きく張り出し、先端はやや盛上がるのみ。	微・細砂粒多く含む。鉄分含有、半酸化炎焼成・淡灰褐色。	鈕部のみ 焼成良 覆土
蓋	6	鈕径 3.4	宝珠鈕のくずれた形で、断面四角形に近く、周縁部が大きく張り出す。	細砂粒多く含む、淡灰色。	鈕部のみ 焼成良 覆土
坏	7	底径 5.9	底部は平底、体部は内湾気味に緩やかに立上がる。	水挽き整形、細砂粒・径5ミリ程の石英片含有、灰色。	底部55%残 焼成良好 覆土
坏	8	底径 6.8	底部は薄い、体部は外傾気味に立上がる。高台は低く、直立気味、端部は丸味を帯び、外向気味。	水挽き整形。底部回転糸切り。体部内面に重ね焼き痕を有する。細砂粒、灰色。	底部20%残 焼成良好 覆土
皿	9	底径 6.0	器壁は薄い。体部はやや内湾気味に立上がる。高台は薄く高く、ハ字状に外反し、内面では緩やかに立上がる。端面は凹線が周る。	水挽き整形。底部回転糸切り、ろくろ目をやや残す。高台接合後、丁寧に横ナデを施す。微・細砂粒多い。胎土こげ茶、外面黒色、底部灰褐色、半還元炎焼成。	底部のみ 焼成良 No.1
坏	10	底径 10.0	底部は平底。厚く、高台欠失。体部はやや膨らみ、外傾する。	水挽き整形、底部回転糸切り、細砂粒・鉄分含有・石英片含む、灰色。	底部20% 焼成良 覆土
甕	11	口径 21.9	頸部は内傾気味に立ち、口縁部で内面に稜を持って大きく外反する。口唇部は外向し、断面三角形を呈し、尖る。	巻き上げ後、横ナデ、径5ミリ程の粗い砂粒を含む。胎土暗茶褐色、外層濃灰色。	口縁部18% 焼成良好 覆土
石製紡錘車	12	直径 (5.7)	孔径0.8厚さ(1.1)、片面から穿孔しているようである。	孔を中心に放射状に削痕が残り、側面は円周に平行につけられている。	滑石製 覆土
叩石状石	13	残存長10.6 径 5.8	先端部を使用して、磨滅している。河原石を利用。		覆土

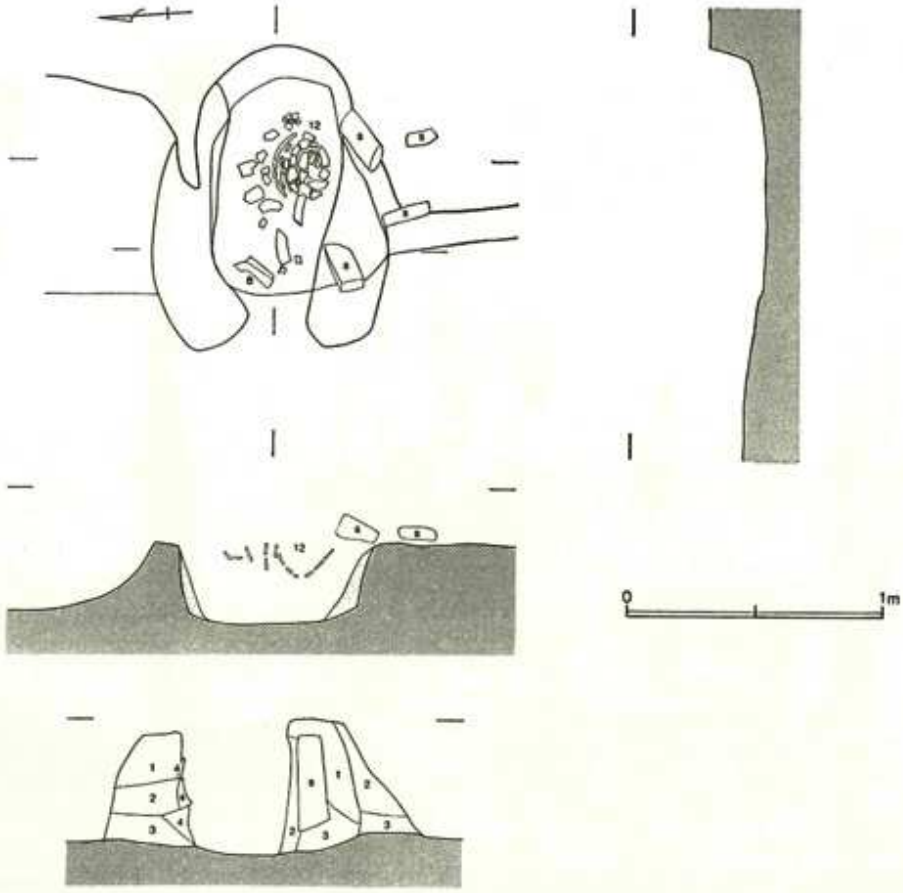
7号住居跡（第19・20図・図版5）

遺跡の西側の一群中にあり、南に6号、東に1号、南西にやや離れて4号の各住居跡が存在する。大きさは5.17×4.07*m*の東西にやや長い隅の丸い長方形を呈する。壁高は西側で深く95cmを測る。竈は東壁を80cm程掘り込んで作られており、底面は床面より9cm程低くなっている。袖は結晶片岩を芯にして粘土で作られている。壁は良く使用され、赤変している。又、竈の左脇は床面より10cm程高く、テラス状となっている。本跡の南壁に沿って、高さ5cm、幅35cm、長さ1*m*20cm程のテラス状の部分があり、2ケ所にピットが掘り込まれている。又、この延長上、南東隅にも12cm程の高さの小さなテラス状の部分がある。ピットは上記の2ケ所の他に12ケ所検出されているが、Pit 1が浅く大きい、又、Pit 2は貯蔵穴かと思われる他は、テラス状の部分と竈周辺の間に集中している。出土遺物は竈内から甕破片、床面から土師器坏、須恵器蓋、砥石、覆土中から土師器甕、須恵器坏、皿等が多く出土し、又、灰釉陶器平瓶の破片も出土している。



1　褐色土
2　黒褐色土
3　黒褐色土（ローム含む）
4　黒色土
5　黒色土（ロームブロックを含む）
6　灰黒色土（焼土含む）
7　褐色土（ローム粒子を含む）

第19図　沼下７号住居跡実測図

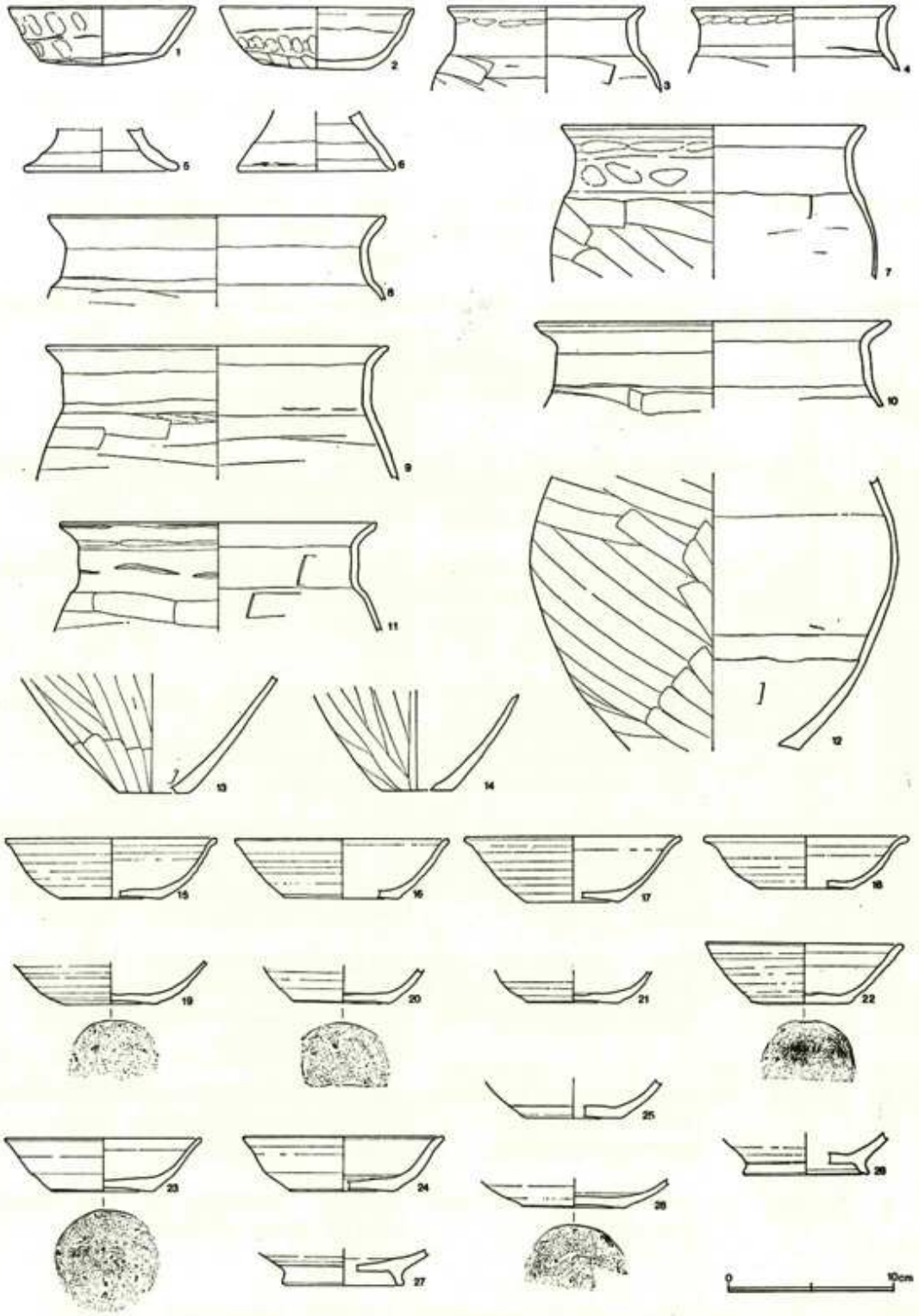


1　粘土
2　灰褐色土
3　黒褐色土（焼土を含む）
4　焼土ブロック

第20図　7号住居跡竈実測図

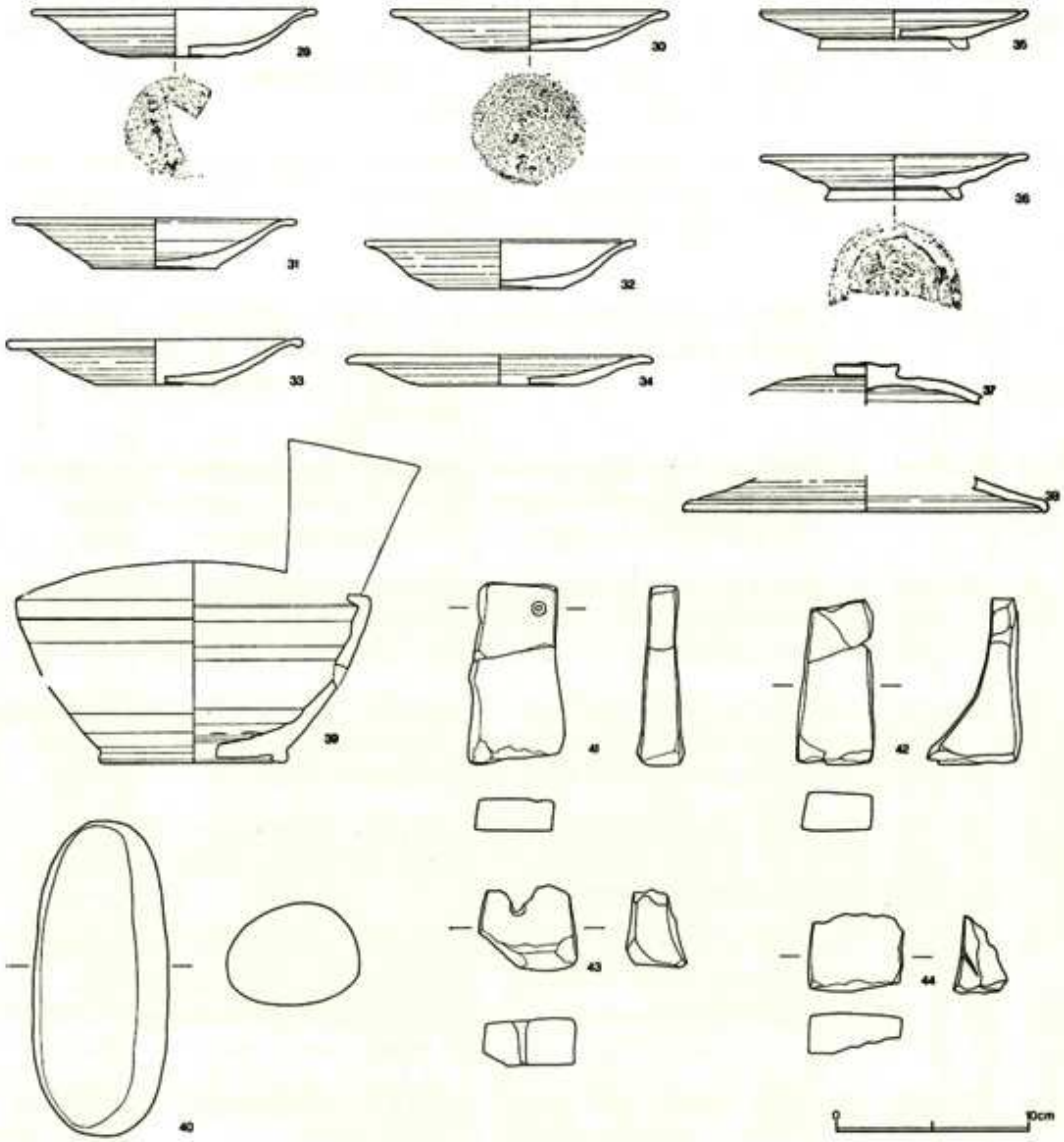
7号住居跡出土遺物（第21・22図・図版23）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師坏	1	口径 11.1 底径 7.4 器高 3.5	扁平な底部から稜を持って体部は外傾し、一たん稜を持ち、口縁部も外傾する。底部内面中央は凹む。	口縁部・底部内面周辺横ナデ、底部篦削り、体部指ナデ、口縁・体部外面に指頭痕残す。細砂粒、淡茶褐色、やや粗雑なつくり。	45%残 No.18
坏	2	口径 11.6 底径 6.5 器高 3.7	扁平な底部から体部は稜を持って外傾し、屈曲して口縁内湾気味になり端部をつまみ、内面に稜を持ち内湾気味に立つ。	口縁部横ナデ、内面横ナデ、体部指ナデ、下半斜め篦削り、底部荒い篦削り。体部に細かい指頭痕を残す。細砂粒、淡赤褐色・体部～底部外面黒色。	口縁部30%残 底部完存 焼成良 No.2
土師台付甕	3	口径 11.8	肩部は張って内湾し、稜を持ち括れて頸部直立し、更に内面に稜を持ち、口縁短く外反し端部つまむ。	口縁部横ナデ後、肩部外面横篦削り、内面木口状工具使用横方向ナデ、細砂粒、淡赤褐色、肩部に煤厚く付着。	口縁部20%残 覆土
台付甕	4	口径 12.1	肩部内傾し、稜を持ち括れ、やや	口縁部横ナデ後、肩部外面篦削り	口縁部30%残



第21図　7号住居跡出土遺物実測図(1)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
			肥厚して直立し、内面に稜を持って口縁短く外反する。	内面木口状工具使用横方向ナデ、細砂粒、淡赤褐色、内面磨滅。	覆土
台付甕	5	底径 9.0	短脚、底部から大きく外反し、一たん肥厚し更に端部水平に近く外反し、丸い。	脚部横ナデ、細砂粒、淡褐色。	脚部20%残 覆土
台付甕	6	底径 9.3	底部から外反気味に開き、中位で屈曲して内湾気味になり、端部をややつまみ出し丸い。	脚部横ナデ、端部外面に輪積み痕を残す。細砂粒、一部器面剥離、淡赤褐色。	脚部25%残 覆土
土師甕	7	口径 18.1 胴径 19.7	肩部に最大径を持ち、緩やかに内傾し、稜を持って大きく括れ、頸部直立し、更に括れて口縁部外反し、端部をややつまみ出し、外面に稜をもつ。	口縁部横ナデの後、胴上半部縦箆削り、肩部横箆削り(断面波形)、内面木口状工具使用横方向ナデ頸部中央に指頭痕残す。細砂粒、淡茶褐色、内面器面剥離見られる。	口縁部60%残 覆土
甕	8	口径 20.2	内傾する肩部から稜をもって括れ、頸部内傾気味に立ち、括れて外反し、端部はややつまみ上げる。	口縁部横ナデの後、肩部横箆削り、器面磨滅顕著、細砂粒、淡褐色。	口縁部25%残 竈No.1
甕	9	口径 20.5 (胴径)21.8	肩部はあまり張らず、肩部は緩やかに内傾し、括れて頸部は直立し、括れて口縁外反し、端部はつまみ出し、丸い。	口縁部横ナデ後、肩部外面横箆削り、内面横方向ナデ、細砂粒、淡暗褐色。	口縁部35%残 覆土
甕	10	口径 21.2	内傾する肩部からやや稜を持って括れ、頸部は直立し、更に稜を持って括れ、口縁部外は大きく外反し、端部をつまみ、外面に段を持つ。	頸部→口縁部横ナデ後、肩部外面横箆削り、内面横方向ナデ、細砂粒、淡赤褐色、外面口縁部の凹みを除き、暗褐色。	口縁部20%残 焼成良 No.24
甕	11	口径 19.0	内傾する肩部から、稜を持って大きく括れて頸部は直立し、括れて口縁部外反し、端部をつまみ、段を持つ。	口縁部横ナデ後、肩部外面横箆削り、内面横方向ナデ、細砂粒、淡赤褐色、頸部に箆先端痕残る。外面煤付着し、薄い黒斑がある。	口縁部25%残 焼成良 覆土・No.2
甕	12	胴部径22.3 残高 16.4	胴部は、外傾して立上がり、緩やかに立ち気味になり、上半部に最大径を持ち、内傾し、肩部へ続く。	肩部横箆削り、以下斜方向箆削り、内面木口状工具使用横方向ナデ、胴下半部に輪積痕を残す。細砂粒、淡褐色、内面淡茶褐色。	胴部35%残 下半部完存 底部欠失 竈No.3
甕	13	底径 4.2	小さい底部から稜を持って外傾し立上がる。 胎土淡褐色・器面濃褐色。	底部箆削り、胴部外面斜方向箆削り。内面木口状工具使用横方向ナデ。細砂粒、外面煤付着し黒斑有。	胴下半60%残 竈No.3・覆土
甕	14	底径 4.3	小さい底部から稜を持って外傾し立上がる。	底部箆削り、胴外面部縦箆削り、内面剥離、細砂粒、胎土淡褐色、外面淡赤褐色。	胴下半30%残 覆土
須恵坏	15	口径 12.5 底径 6.1	底部はやや上げ底。体部は内湾気味に緩やかに立上がり、口縁端部	水挽き整形。底部回転糸切り、口縁端部横ナデ、水挽き痕を残す。	30%残 覆土



第22図　7号住居跡出土遺物実測図(2)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
		器高 3.6	をつまみ出す。	細砂粒・鉄分含有、淡灰色。	
須恵坏	16	口径 12.8 底径 6.8 器高 3.6	底部は平底。体部は外傾気味に緩やかに立上がり、口縁部でやや内湾し端部を軽くつまみ出す。	水挽き整形、底部回転糸切り、口縁部外面に若干水挽き痕を残す。石英質の荒い砕片を含む、濃灰色。	15%残 覆土
坏	17	口径 12.8 底径 5.7 器高 4.0	底部はやや上げ底。体部は稜を持ち、やや屈曲して軽く内湾気味に立上がり、口縁端部をつまみ出す。	水挽き整形、底部回転糸切り、口縁部外面に薄く水挽き痕を残す。細砂粒・石英質粒子を少量含む。半酸化炎焼成、白褐色。	31%残 覆土
坏	18	口径 12.0 底径 5.8	底部やや上げ底。体部は稜をもって屈曲して内湾気味に立上がり、	水挽き整形。底部回転糸切り、体部にろくろ目を残す。細砂粒・径	27%残 焼成良

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
		器高 3.1	口縁部で大きく外反し、端部をつまみ出し、玉縁を呈する。	8ミリ程の片岩質の砕片を含む。淡灰色。	№17
須恵坏	19	底径 5.6	底部やや上げ底。体部は稜を持ち屈曲して内湾気味に緩やかに立上がり、口縁部で外反すると思われる。	水挽き整形。底部回転糸切り。口縁部・体部にろくろ目を残す、細砂粒・白色砂粒を含む。灰色。	底部・体部50%残、焼成良覆土
坏	20	底径 5.9	底部やや上げ底。体部は鈍く稜を持ち外反気味に立上がり、内湾気味に立つ。	ろくろナデ整形。底部回転糸切り。体部丁寧に横ナデ。微・細砂粒、胎土・底部黒色・口縁部薄褐色、半還元炎焼成。	底部35%残焼成良覆土
坏	21	底径 5.6	底部やや上げ底。体部は稜を持ち屈曲して内湾気味に張って立上がり、口縁で外反すると思われる。	水挽き整形。底部回転糸切り、体部にろくろ目を残す。細砂粒、片岩、石英片を含む、灰色。	底部40%残焼成良覆土
坏	22	口径 11.7 底径 6.1 器高 3.6	底部平底。体部は稜を持ち外反気味に立上がり、外傾し、口縁端部を弱くつまみ出す。	水挽き整形。底部回転糸切り。体部に鈍いろくろ目を残す。微・細砂粒、丁寧なつくり。濃青灰色。	60%残焼成良好№1・5
坏	23	口径 11.6 底径 6.0 器高 3.2	底部やや上げ底、体部稜を持って外反し、膨らみ内湾気味になり、口縁部外反し、端部をつまみ出す。	水挽き整形、底部回転糸切り、微・細砂粒・石英片を含む。淡灰色底部内面扁平・灰色。	口縁部12%残底部完存土壙覆土
坏	24	口径 12.0 底径 6.3 器高 3.3	底部やや上げ底、器壁厚い、体部は鈍く稜を持って外反気味に立上がり、内湾し、口縁端部外反する。	水挽き整形、底部回転糸切り。細砂粒多く含む、灰褐色・軟質。	20%残覆土
坏	25	底径 6.0	底部やや上げ底・厚い。体部は鈍く稜を持って屈曲して立上がり、内湾気味になる。	水挽き整形、底部回転糸切り、細砂粒・鉄分多い。底部外面茶褐色、内面濃灰色、焼損じ、他灰褐色、軟質。	底部45%残№9
皿	26	底径 6.2	底部やや上げ底、体部は稜を持って屈曲し、内湾気味に立上がる。	水挽き整形、底部回転糸切り、微・細砂粒、淡灰色。	底部35%残焼成良、覆土
坏	27	底径 7.3	底部平底、体部は外傾し立上がる。高台ハ字状に立つ、内面稜を持ち端面凹線を持ち、水平。	水挽き整形、底部回転糸切り、微・細砂粒、鉄分多い。底部内面暗褐色・他、濃灰色。	底部35%残焼成良覆土
坏	28	底径 7.1	底部平底、体部は稜を持ち、外傾気味に立上がる。	水挽き整形底部回転糸切り、砂粒分多い、淡灰褐色・軟質。	底部35%残覆土
皿	29	口径 14.6 底径 5.2 器高 2.5	底部やや上げ底、体部は稜を持ち緩やかに外反し、内湾し、口縁部で外反し、端部をつまみ出し、稜をもつ。	水挽き整形、底部回転糸切り、体部外面にろくろ目良く残す。白色砂粒含む、濃青灰色。	口縁10%底部60%残焼成良好、覆土
皿	30	口径 14.1 底径 6.5 器高 2.1	底部は平底、体部は鈍く稜を持ち緩やかに内湾し、口縁部で外反し端部を厚くつまみ出す。内面やや	水挽き整形・体部外面にろくろ目を良く残す。底部回転糸切り、口縁～内面横ナデ、石英片含む、濃	90%残焼成良好№2

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
			扁平。	灰色。	
須恵皿	31	口径 14.5 底径 6.5 器高 2.6	底部は平底状。体部は稜を持ち、外傾し、口縁部で外反し、端部をつまみ出す。	水挽き整形、体部上半にろくろ目を残す。底部回転糸切り、微・細砂粒。胎土暗褐色、外面暗灰褐色、底部薄褐色、32・33に色調酷似。	25%残 焼成良好 覆土
皿	32	口径(残)13.7 底径 6.5 器高 2.5	底部はやや上げ底、体部は鈍く稜を持ち、緩やかに内湾し、口縁部で緩く外反する。端部を欠く。	水挽き整形。体部外面にろくろ目を良く残す。底部回転糸切り。砂粒多く含む、淡灰色・口縁内面灰色。	35%残 焼成良 覆土
皿	33	口径 15.1 底径 6.2 器高 2.3	底部はやや上げ底、体部は稜を持って、外傾気味に立上がり、口縁端部で外反する。	水挽き整形。体部外面にろくろ目を良く残す。底部回転糸切り、砂粒多く含む。胎土暗褐色・口縁暗灰褐色、底部淡灰色。	25%残 焼成良 覆土
皿	34	口径 16.0 底径 7.5 器高 1.6	底部はやや上げ底。扁平。体部は内湾気味に緩やかに立上がり、口縁部で大きく外反する。	水挽き整形。体部内外面にろくろ目を残す。底部回転糸切り、細砂粒多く含む。胎土淡赤褐色・器面暗灰褐色・半還元炎焼成	27%残 土壙覆土
皿	35	口径 13.8 底径 7.8 残高 (1.5)	底部は平底。口縁部は緩やかに外傾し、短く端部をつまみ上げ、肥厚する。高台部を欠失する。	水挽き整形。底部回転糸切り、砂粒・鉄分多く含む、胎土淡灰色・口縁部・底部内面灰色・軟質。	20%残 覆土
皿	36	口径 13.6 底径 6.8 残高 1.7	底部は平底。体部は屈曲して外傾して立上がり、口縁部はやや外反し、端部をつまむ、高台部欠失。	水挽き整形。底部回転糸切り。体部外面にろくろ目顕著。砂粒・鉄分多い、胎土・底部淡灰色・口縁部外面灰色、軟質・粗雑。	口縁10%・底部50%残 覆土
蓋	37	鈕部径 3.3 頂部径 9.8	鈕は宝珠鈕の崩れた形。頂部中央はやや凹む。肩部はやや丸みを帯び、裾部へ続く。	水挽き整形。肩部回転箆削り。周辺部横ナデ整形。胎土淡褐色表面灰褐色、半酸化炎焼成。	頂部25%残 焼成良好 №23
蓋	38	口径 18.8	口縁のみ。口縁はやや外反し、端部で緩く折れ曲がり、先端は丸い。	水挽き整形。ろくろ目を残す。細砂粒、淡灰色、端部・内面灰色。	口縁部15% 焼成良好 覆土
灰釉長頸瓶	39	肩部径18.4 底径 9.7 残高 10.4	肩部・底部のみ。底部は凸面状を呈し、胴部は外傾して立上がり、立ちぎみになり、肩部で張り、大きく屈曲する。高台は幅広く、端部内側は鋭く稜を持ち、端面はやや内向する。	水挽き整形。底部・胴部内面にろくろ目を良く残す。底部回転箆削り。高台はつけ高台で外面にやや接合痕を残す。胴部外面横ナデ整形。肩部及び胴部の一部に釉がかかり、淡灰色・周辺黒褐色～淡茶褐色へと変化する。胎土淡白褐色中に黒色微砂粒を含む。	肩部16% 底部32%残 焼成良好 堅緻・覆土 12号住居跡覆土出土破片と接合
磨石	40	長さ 16.9	幅 6.9 高さ 5.2 自然石を利用し、側面は磨り減って、両端は叩いた様に、やや扁平になっている。		石質：花崗岩
砥石	41	長さ 9.4	幅 4.0 厚 1.6 四側面を使用し、一端に穿孔しようとしたものか、浅い円形の凹みを有する。		凝灰岩質 №6
砥石	42	残長 (8.6)	幅 3.6 厚 2.0 四側面を使用し特に上面は極度に弓形状となる。		凝灰岩質

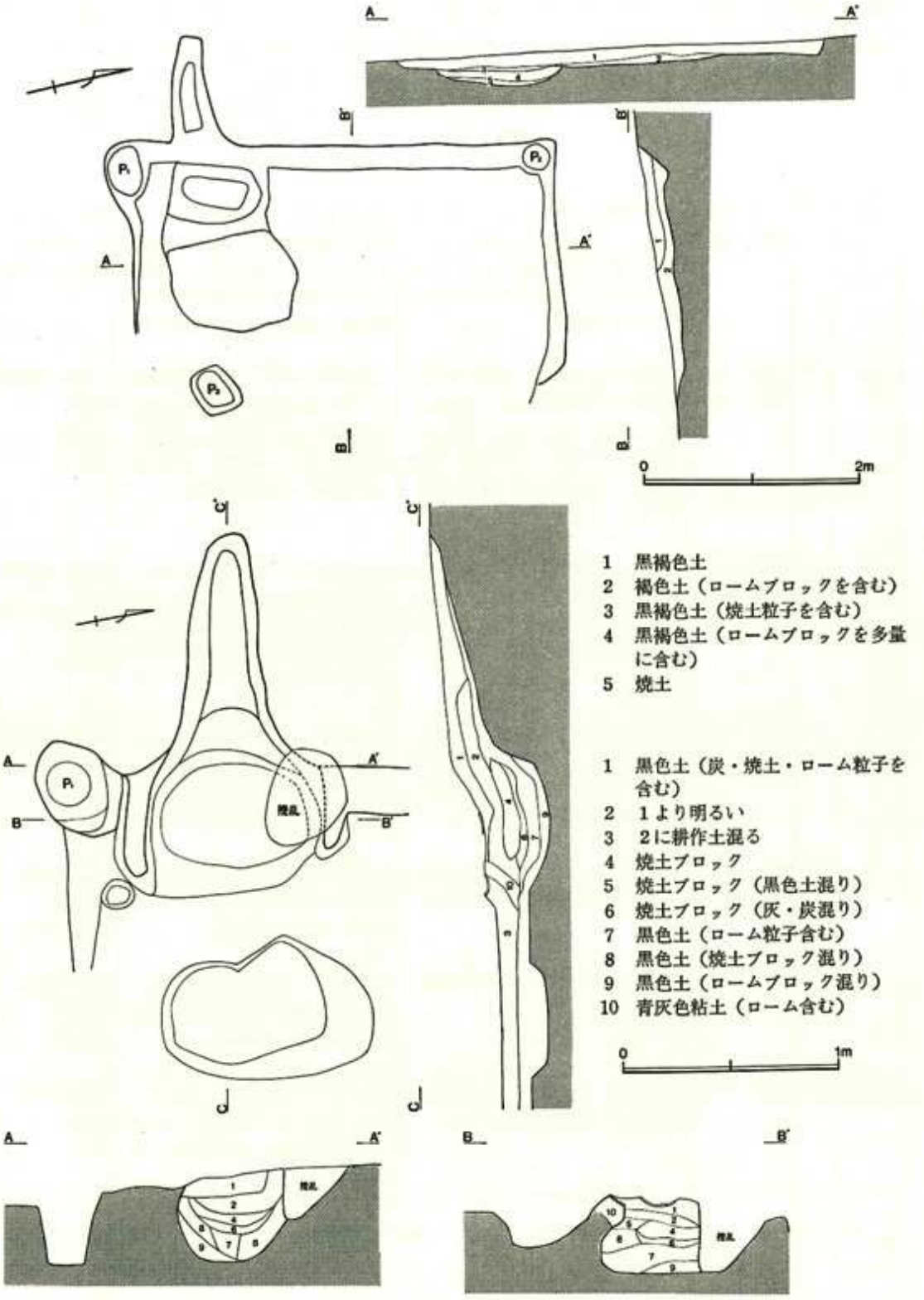
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
砥石	43	残長 (4.4)	幅 4.7　厚　2.4　四側面を使用し、片面から穿孔されている。		№19 凝灰岩質覆土
砥石	44	残長 (4.0)	幅 4.9　厚　(2.0) 二面のみ残、弓状に磨滅している。		凝灰岩質 覆土

8号住居跡（第23図・図版6）

遺跡の東側中央部に位置する。南に12号、東に23号の各住居跡がある他はやや離れている。大きさは2.65（残存長）×4.10*m*で、方形を呈するものと思われるが、東方が浅くなっており、不明な部分が多い。主軸の方向はN—116.5°—W。壁高は竈をもつ西壁で18cm程で最も深い。竈は西壁の南隅に床面から11cm程掘り込まれており、緩やかに1段上って、1*m*程の煙道へと続く。袖はロームと青灰色粘土を使用してつくられている。ピットは2ケ所検出されており、西壁の南北隅に壁に喰い込むようにあり、壁柱穴であろう。出土遺物は竈付近に集中しており、土師器甕、須恵器坏の破片がある。

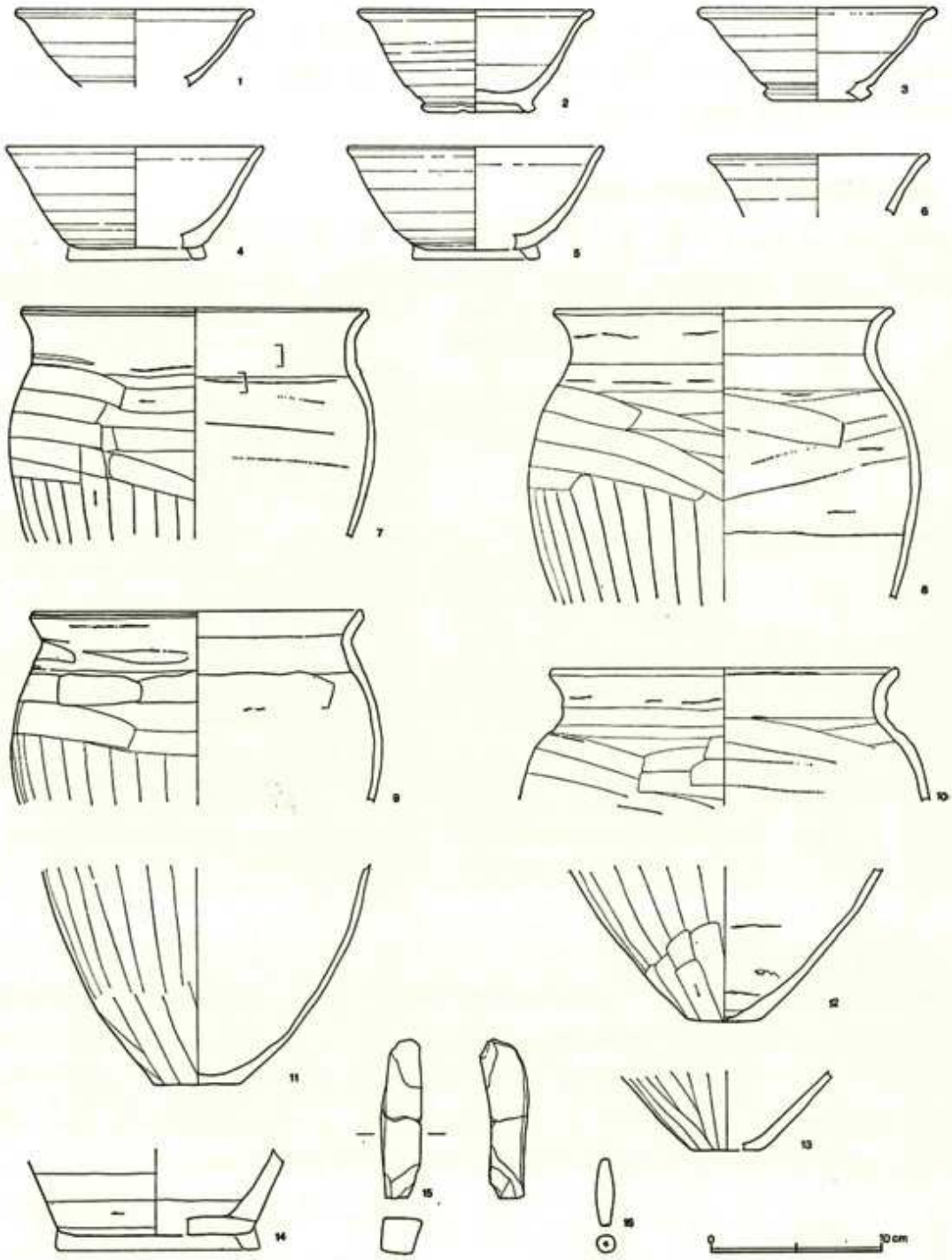
8号住居跡出土遺物（第24図・図版24）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	1	口径　13.5 (残高)　4.5	体部は内湾気味に立上がり、外傾し、端部をつまみ出し、玉縁となる。底部・高台部欠失。	水挽き整形。口縁部全面横ナデを施し、滑らか。半酸化炎焼成、胎土・内面淡褐色・外面灰褐色、微・細砂粒・鉄分含有。	口縁・体部10%残 焼成良 竈・覆土
坏	2	口径　13.3 底径　6.4 器高　6.0	底部は平底で厚い。体部は屈曲して外傾し、口縁端部をつまみ出し、玉縁状になる。高台は低く、端面は丸く外向する。	水挽き整形。口縁部横ナデ、外面にろくろ目を残す、底部回転糸切り後、ナデ整形、細砂粒・鉄分を含む。淡褐色、酸化炎焼成・軟質	60%残 焼成不良 竈№9・覆土
坏	3	口径　13.4 底径　5.8 器高　5.4	底部欠失、体部は稜を持って、内湾せずに外傾し、口縁部で一旦膨らみ括れて、端部をつまみ出し、玉縁となる。高台は厚く、低い、端面は丸く外向する。	口縁部全面横ナデ整形。高台は底部の括れて狭い部分に付けており、接合痕を残す。淡褐色・酸化炎焼成・軟質。	口縁部70%残 底部20% 竈・№14
埦	4	口径　14.7 底径　7.8 器高 (6.6)	厚い底部から、緩やかに外傾して体部は立上がり、口縁端部を軽くつまみ出す。高台欠失。	水挽き整形。口縁部横ナデ整形、細砂粒・小礫を含む。灰色・軟質須恵。	口縁部30%残 覆土
埦	5	口径　14.7 底径　7.3 器高 (6.6)	厚い底部から、やや内湾気味に立上がり、外傾し、口縁端部を軽くつまみ出す。高台欠失。	巻き上げ後、ろくろナデ整形。微・細砂粒・鉄分含有・淡灰色、器面剝離・淡褐色・軟質須恵	口縁部11%残 竈
坏	6	口径　12.5	器壁厚く、口縁部外反し、端部をつまみ出す。玉縁状となる。	水挽き整形。細砂粒・石英片含有器面荒れる。灰色。	口縁部24%残 焼成良 竈付近・№18



第23図　沼下８号住居跡実測図

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師甕	7	口径 20.0 胴径 21.4	胴部中位で外傾し、肩部丸味を帯びて緩やかに内傾し、やや括れて頸部直立し、口縁部外反し、端部をつまみ上げ、内外面に稜をもつ。	口縁部横ナデ後、胴上半部横篦削り、胴下半部縦篦削り。内面木口状工具による横方向ナデ。頸部に巻上げ痕を残す。細砂粒・薄褐色・暗褐色部が斑状につく。	口縁完存 焼成良 竈No.2
甕	8	口径 19.4 胴径 23.0	胴下半部から外傾し、上半部で最大径となり緩やかに内傾し、やや括れて頸部外反気味になり、口縁部で外反し、端部は厚く丸味をもち、つまみ出す。	口縁部横ナデ後、肩部横篦削り、胴下半部縦篦削り、頸部に指押さえ痕・巻き上げ痕を残す。内面木口状工具等による横方向ナデ整形細砂粒・暗赤褐色、煤等頸部付着	胴部以上35%残、焼成良、竈No.3・No.14
甕	9	口径 19.0 胴径 21.7	胴部丸みを帯びる。胴部は外傾し最大径を上半部にもち、内傾し、軽く段を持ってそのまま頸部となり、大きく括れて口縁外反し端部を厚く、つまみ上げ、外面に稜をもつ。	口縁部横ナデ後、肩部外面横篦削り、以下縦篦削り、内面木口状工具使用横方向ナデ整形・口縁部に輪積痕を残す、細砂粒・暗赤褐色・煤等胴部・口縁部付着。	口縁・肩部20%残 焼成良 竈No.5
甕	10	口径 20.0 肩部径24.0	肩部張る。胴上半部直立気味に内傾し、肩部で更に内傾し、大きく括れて広い沈線がまわり、更に膨らんで口縁外反し端部つまみ上げる。	口縁部横ナデ、頸部強い篦ナデ一周後、肩部横篦削り、頸部・端部に輪積痕を残す。内面木口状工具使用横方向ナデ、暗赤褐色・煤肩部・口縁部に付着。	口縁・肩部47%残 焼成良 竈No.6、7
甕	11	底径 5.1 胴径(19.0)	底部小さく平底。胴部は、外傾して立上がり、やや屈折して立ちぎみになる。器壁は薄い、No.7甕と同一個体の可能性がある。	底部篦削り、胴部外面縦篦削り、内面木口状工具使用横方向ナデ、底部に工具痕残る、熱の為、各所剝離、淡褐色・淡赤褐色。	胴下半部完存 竈No.8
甕	12	底径 4.3 胴径(18.3)	底部小さく平底、胴部外傾気味に立上がる、No.8甕と同一個体か。	底部篦削り、胴部外面縦篦削り、内面指等による不整方向ナデ。暗赤褐色・輪積痕内面残る。	底部40%残 焼成良 竈No.15覆土
甕	13	底径 4.1	底部小さい。胴部角度浅く外傾して立上がる。	底部篦削り、胴部外面縦篦削り、内面不整方向ナデ、外面付着物多い、内面剝離。暗赤褐色。	底部25%残 焼成良 竈No.15
須恵壺	14	底径 11.5	底部平底、器壁厚い。高台欠失、体部やや外傾気味に立上がる。	巻上げ後、水挽き整形、胴下端・底部回転篦ナデ、胴部横ナデ、荒い白色砂粒含む、胎土茶褐色・外面濃青灰色。	底部25%残 焼成良 覆土
砥石	15	残長 9.2	幅 2.2　高さ 2.0　小さい、側四面を使用、一端を欠失する		石質・凝灰岩
土錘	16	長さ 3.9	径 1.1　紡錘形、灰黒色、土師質。		覆土



第24図　8号住居跡出土遺物実測図

9号住居跡（第25図・図版7）

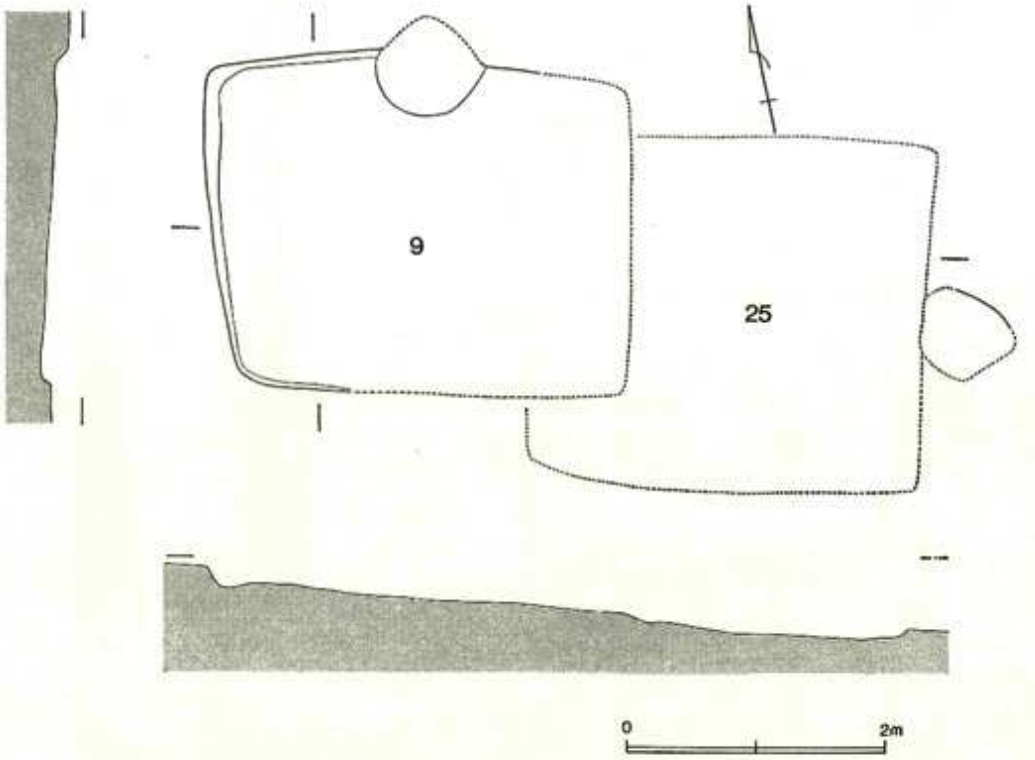
遺跡の北側に点在する住居跡の一軒である。東側にかすかに竈状の焼土の集中する部分があり、この25号住居跡と切り合っていたものと考えられる。大きさは2.56×3.3（推定）m の方形を呈すると思われる。主軸の方向はN—5°—E。竈は北壁中央部と思われる部分にあり、かすかに粘土、焼土の痕跡が残っている。壁高は深い部分でも10cm程である。ピット等は検出されなかった。出土遺物は北西隅の床面から土師器甕破片、須恵器坏1点がある。

9号住居跡出土遺物（第26図・図版24）

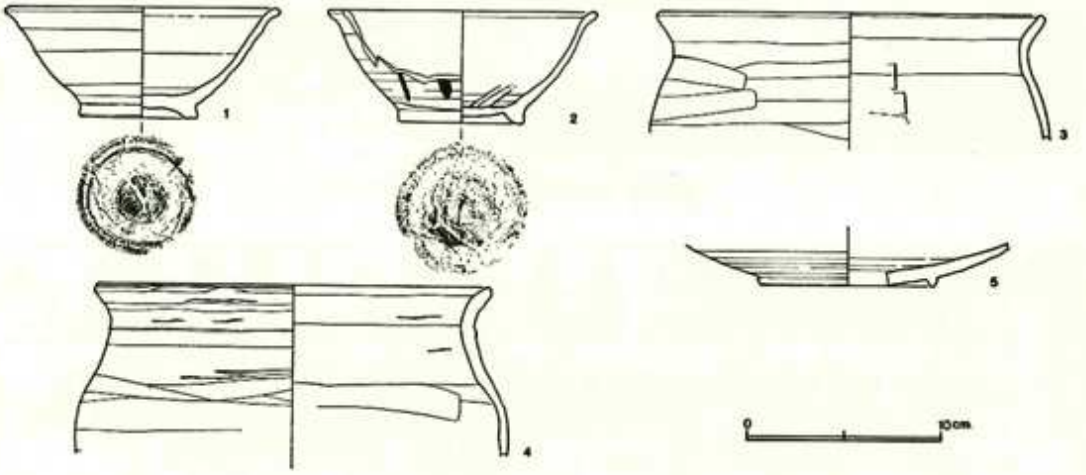
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	1	口径 13.6 底径 6.0 器高 5.6	底部平底、体部外傾し、内湾気味になり、口縁端部をつまみ出す。高台は分厚く低い。端面に凹面をもつ。	水挽き整形。体部～口縁部外面にろくろ目を残す。底部回転糸切り。片岩質砕片含む、胎土・底部茶褐色、他器面濃灰色。	85%残・底部完存 No.1
坏	2	口径 13.7 底径 6.5 器高 5.7	底部平底、体部外傾し、内湾気味になり、口縁端部をつまみ出す、高台は分厚く低く不整形。	水挽き整形。底部回転糸切り後、指ナデ、内面にナデ痕を残す。半面須恵質半面酸化炎、灰褐色、褐色部に墨書の一部が残る。	口縁部10%・底部90% No.4
土師甕	3	口径 19.5	肩部は丸みを帯びて内傾し、やや括れて頸部は直立し、口縁外反し、端部をつまみあげ、内外面に稜をもつ。	口縁部横ナデ後、肩部外面横箆削り。内面木口状工具使用横方向ナデ。細砂粒・淡褐色。	口縁部18%残 No.4
甕	4	口径 20.5	張り気味の肩部から内傾し、緩やかに括れ、頸部内傾し、口縁部外反し、端面は外向し、厚い。	口縁部横ナデ後、肩部横～斜方向箆削り。内面木口状工具使用横方向ナデ、頸部に輪積み痕を残す。細砂粒・暗茶褐色。	口縁部20%残 No.2
灰釉皿	5	残径(16.7) 底径 9.2 器高 2.2	底部厚く、膨らむ、口縁部緩やかに内湾気味に底部から続き、端部で薄くなり外反。高台小・内湾。	水挽き整形。底部回転箆削り、全面横ナデ。淡緑色の釉を内面は厚く、外面は薄く塗る。胎土淡白灰色、黒色微砂粒含む。	底部18%残 焼成良好 堅緻・覆土

10号住居跡（第27図・図版8・9）

発掘区の東端に位置する。大きさは3.47×3.00mの隅の丸い、整った方形を呈する。主軸の方向はN—61°—E。壁高は深い部分で25cmを測る。床面はほぼ平坦である。竈は東壁に80cm程掘り込まれている。ピットは4ケ所検出されており、1ケ所は竈の右脇で、浅くほぼ方形を呈し、貯蔵穴と考えられ、他の西壁寄りの2口は柱穴である、又、北西の壁外にピットが2ケ所検出されているが、本跡に伴なうものか不明である。出土遺物は床面から土師器甕、坏等の破片がある。



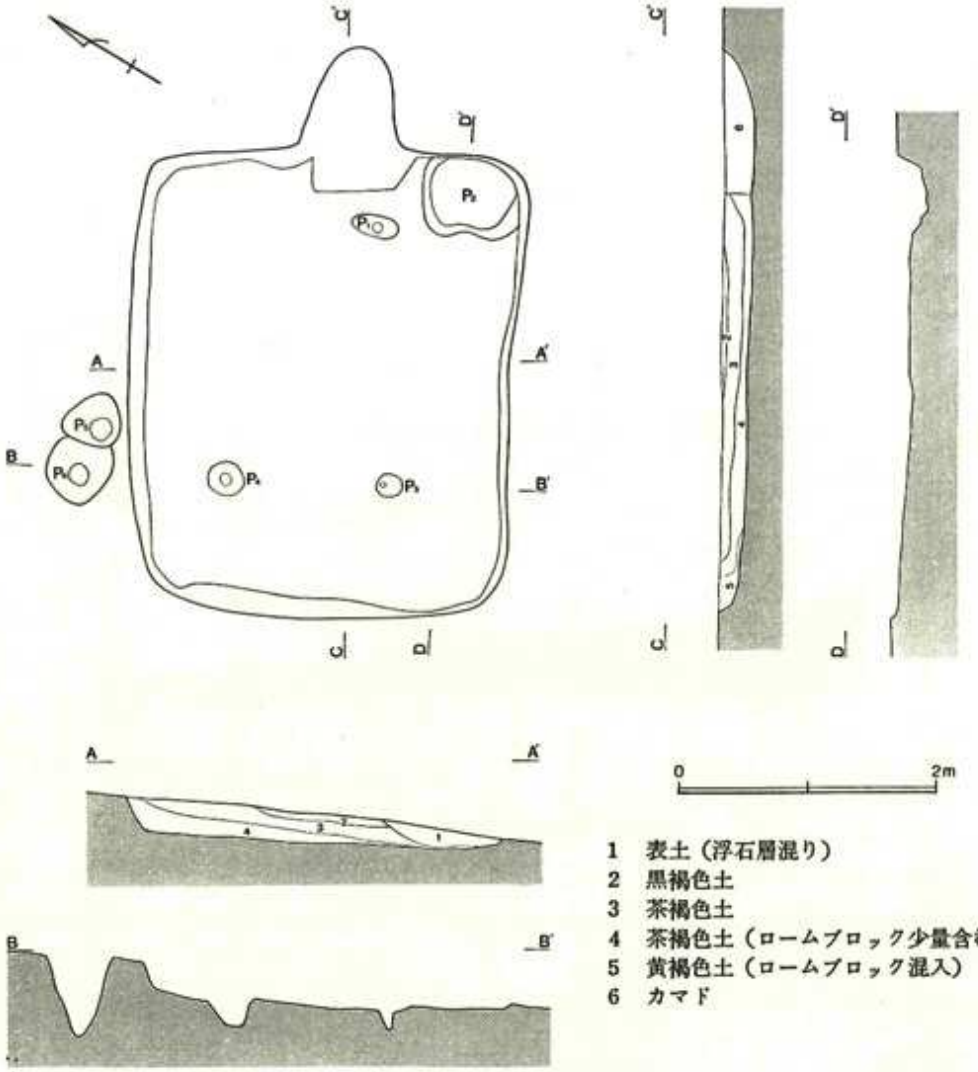
第25図　沼下９号住居跡実測図



第26図　９号住居跡出土遺物実測図

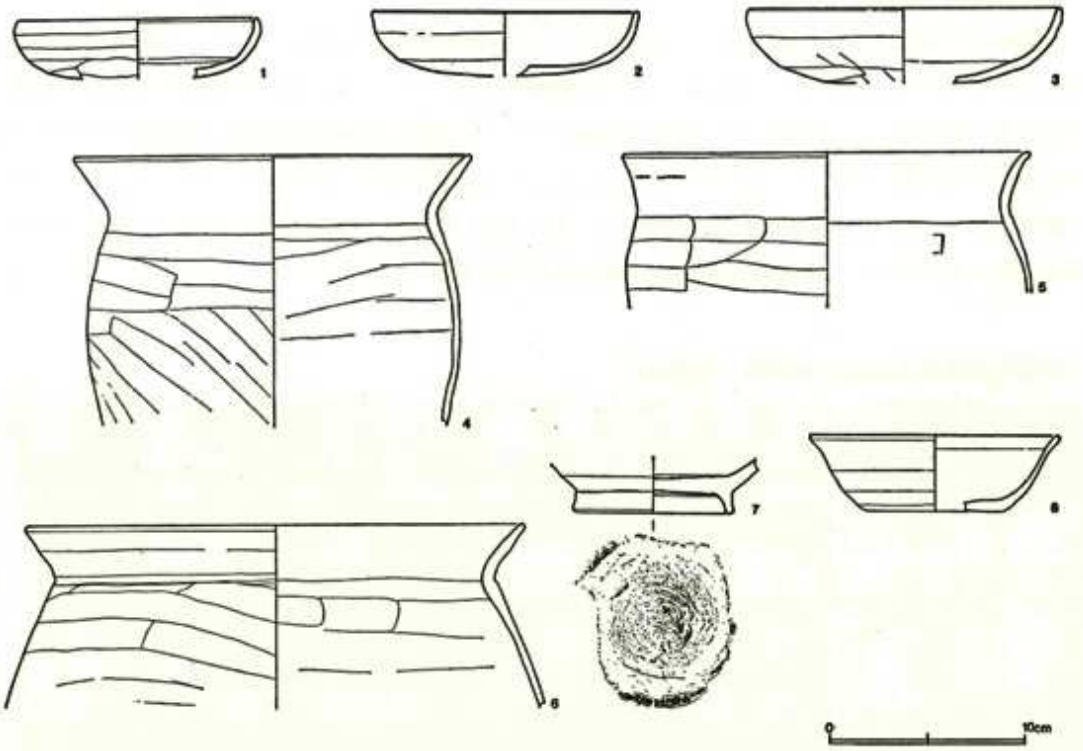
10号住居跡出土遺物（第28図・図版24）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師坏	1	口径　12.3 底径　11.2	扁平な底部から、体部は緩やかに立上がり、やや稜を持ち、口縁部	口縁部横ナデ、体部篦ナデ、底部篦削り。内面横ナデ、微・細砂粒	35%残 床面



第27図　沼下10号住居跡実測図

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
		器高　3.0	は内湾気味になり、端部は丸い。	淡赤褐色。	No.4、5
坏	2	口径　13.7 底径　11.0 器高　3.3	扁平な底部から体部は稜を持って立上がり、口縁部は外傾気味に直立し、端部は丸い。	口縁部及び内面横ナデ、体部篦ナデ、底部篦削り。微・細砂粒、淡赤褐色、内外面あばた状に剝離。	45%残 No.1・覆土
坏	3	口径　16.0 底径　12.4 器高　3.8	扁平な底部から体部は稜をもって外傾気味に立上がり、口縁は内湾気味になり、端部は丸い。	口縁部及び内面横ナデ、体部篦ナデツケ、底部篦削り。微・細砂粒淡赤褐色・内外面器面剝離。	30%残 No.9
土師甕	4	口径　20.4 胴径　19.2	胴部はやや外傾し、上半部で最大径となり内傾し、稜を持って緩やかに括れ口縁くの字状に近く外反	口縁部横ナデ、胴上半部横篦削り、下半部斜め篦削り、内面木口状工具使用横方向ナデ。微・細砂	65%残 No.3



第28図　10号住居跡出土遺物実測図

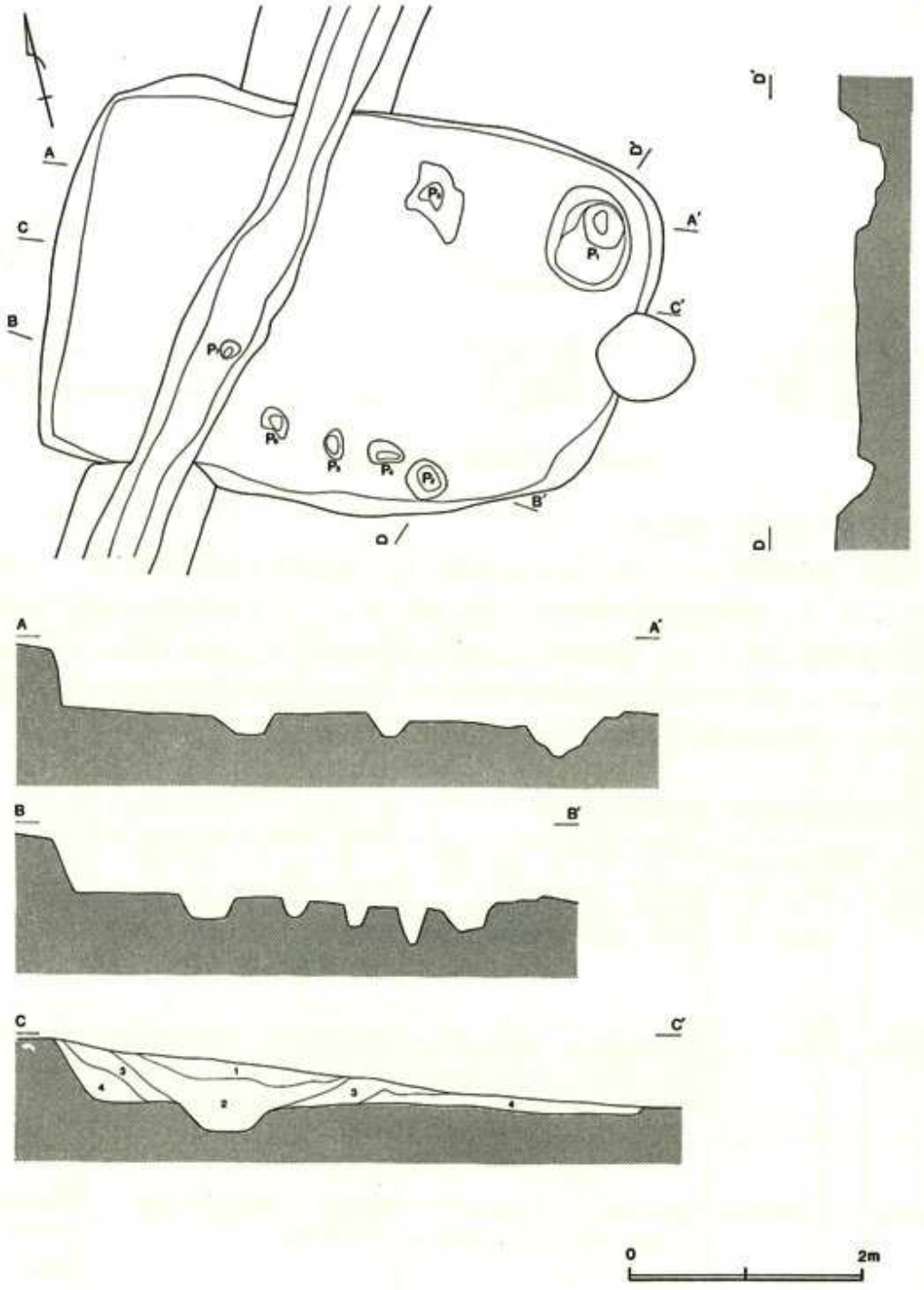
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
			し、端部をつまみ上げる。	粒、淡赤褐色、口縁部内面煤付着	
土師甕	5	口径 20.6 胴径 20.7	ややゆがむ。上半部に最大径をもち、緩やかに内傾し、やや稜を持ち、口縁部直立気味に外反し、端部をつまむ。	口縁部横ナデ。胴上半部横箆削り内面ヘラナデ、口縁部に輪積痕を残す、淡暗褐色、内面胎土炭素吸着、胴部外面煤多量に付着、粗雑	25%残 No.8
甕	6	口径 25.5 胴径 27.8	球胴。胴上半部内傾し、稜を持ち、括れて口縁外反し、端部をつまむ。	口縁部横ナデ、胴上半部横箆削り、内面箆ナデ、微・細砂粒、淡茶褐色丁寧なつくり。	口縁部70%・肩部25%残 No.7・床直
須恵埦	7	底径 8.0	底部厚く平底。体部外傾気味に立上がる。高台高く直立気味、端面やや丸い。	水挽き整形、底部回転糸切り、白色砂粒含む。胎土茶褐色、器面濃灰色。	底部のみ 焼成良好 No.10
坏	8	口径 12.7 底径 7.0 器高 3.9	やや上げ底の底部から稜を持って屈曲して立上がり、口縁は外傾気味になり、端部をつまみ出す。	ろくろナデ整形、底部回転糸切り、細砂粒石英片含む、胎土、底部・体部黒色・口縁部白褐色、半還元炎焼成。	30%残 No.10

11号住居跡（第29図・図版9）

発掘区の中央部東側に位置する。住居の中央を1号溝が南北方向に走っており、これに切られている。大きさは5.08×3.43*m*の主軸方向に長い、籠寄りのコーナーがやや丸い長方形を呈する。主軸の方向はN—114.5°—E。壁高は西側で高く48cmであるが、東側で10cm程である。床面はほぼ平坦。籠は東壁中央部を掘り込んでつくられているが、ほとんど底面が残っていたのみであった。ピットは7ケ所確認されており、P_1は貯蔵穴、P_2、P_3、P_4、P_5、P_6は一応本跡に伴なうものと考えられる。出土遺物は覆土中から土師器甕・坏・椀、須恵器坏等がある。

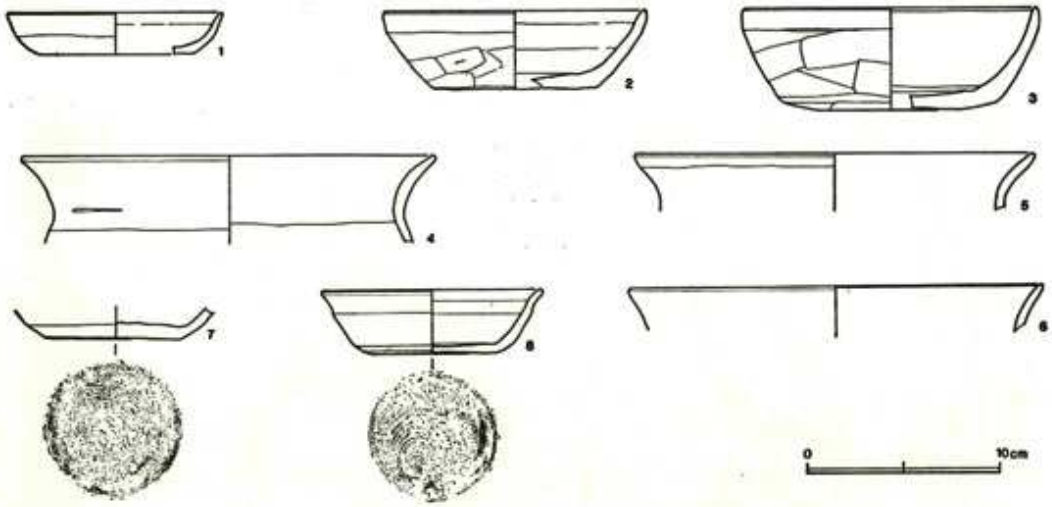
11号住居跡出土遺物（第30図・図版24）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師坏	1	口径 11.1 底径 7.9 器高 2.1	扁平な底部から稜を持って体部は内湾気味に立上がり、口縁部で外傾気味に立ち、端部へ薄くなる。	口縁部・内面横ナデ、体部箆ナデ、底部箆削り、細砂粒、橙褐色・黒斑が薄くある。	口縁部10%、底部20%残 No.6
坏	2	口径 13.5 底径 8.5 器高 4.0	大形・厚手。扁平な底部から稜を持って外傾気味に立上がり、口縁部は稜を持って直立気味になる。	口縁部・内面横ナデ、体部外面箆削り、底部外面箆削り、微・細砂粒、器面磨滅、橙褐色、軟質。	20%残 No.3
坏	3	口径 15.2 底径 11.0 器高 5.3	大形・厚手。扁平な底部から稜を持って外傾気味に立上がり、口縁部は内湾気味に直立する。坏2と同型。	内面・口縁部横ナデ、体部外面横箆削り、底部外面箆削り、微・細砂粒、器面磨滅、橙褐色、軟質。	43%残 No.1
土師甕	4	口径 21.4	肩部はあまり張らず、内傾し、稜を持って括れ、口縁部は外反し、端部は薄く丸味を持つ。	口縁部横ナデ、肩部外面横箆削り、内面箆ナデ整形。細砂粒、器面剝離、外面煤付着、暗茶褐色。	口縁部18%残 覆土
甕	5	口径 20.7	肩部不明。頸部やや直立し、口縁部外反し、端部をややつまみ上げる。	口縁部横ナデ、細砂粒・橙赤褐色、外面淡橙色・褐痕跡あり。	口縁部のみ32%残 No.11
甕	6	口径 21.4	頸部不明、口縁部外反する。端部は直線状になり、丸味をもつ。	口縁部横ナデ、細砂粒、橙赤褐色外面煤付着	口縁部のみ12%残 No.6
須恵坏	7	底径 6.9	底部は平底。体部はやや外傾気味に立上がり、角度を深くして外傾するものと思われる。	底部回転糸切り、周辺部回転箆削り。体部ろくろナデ整形、微・細砂粒、胎土淡褐色・器面茶褐色、内面剝離顕著。酸化炎・焼損じか。	底部のみ完存 焼成良好 No.6
坏	8	口径 11.4 底径 6.5 器高 3.3	底部は平底、体部は稜を持って立上がり、丸味を持って、外傾気味になり、口縁部で括れて外反し、端部は厚い。	ろくろナデ整形、口縁部はつまみ手法による。底部回転糸切り後、周辺部回転箆削り、体部下端回転箆削り。体部以下灰色、口縁部器面淡褐色砂粒分多い、軟質。	完形 半還元炎焼成 No.5



1　黒褐色土（ロームブロック混り）
2　黒褐色土
3　暗褐色土
4　褐色土（ロームが多い）

第29図　沼下11号住居跡実測図



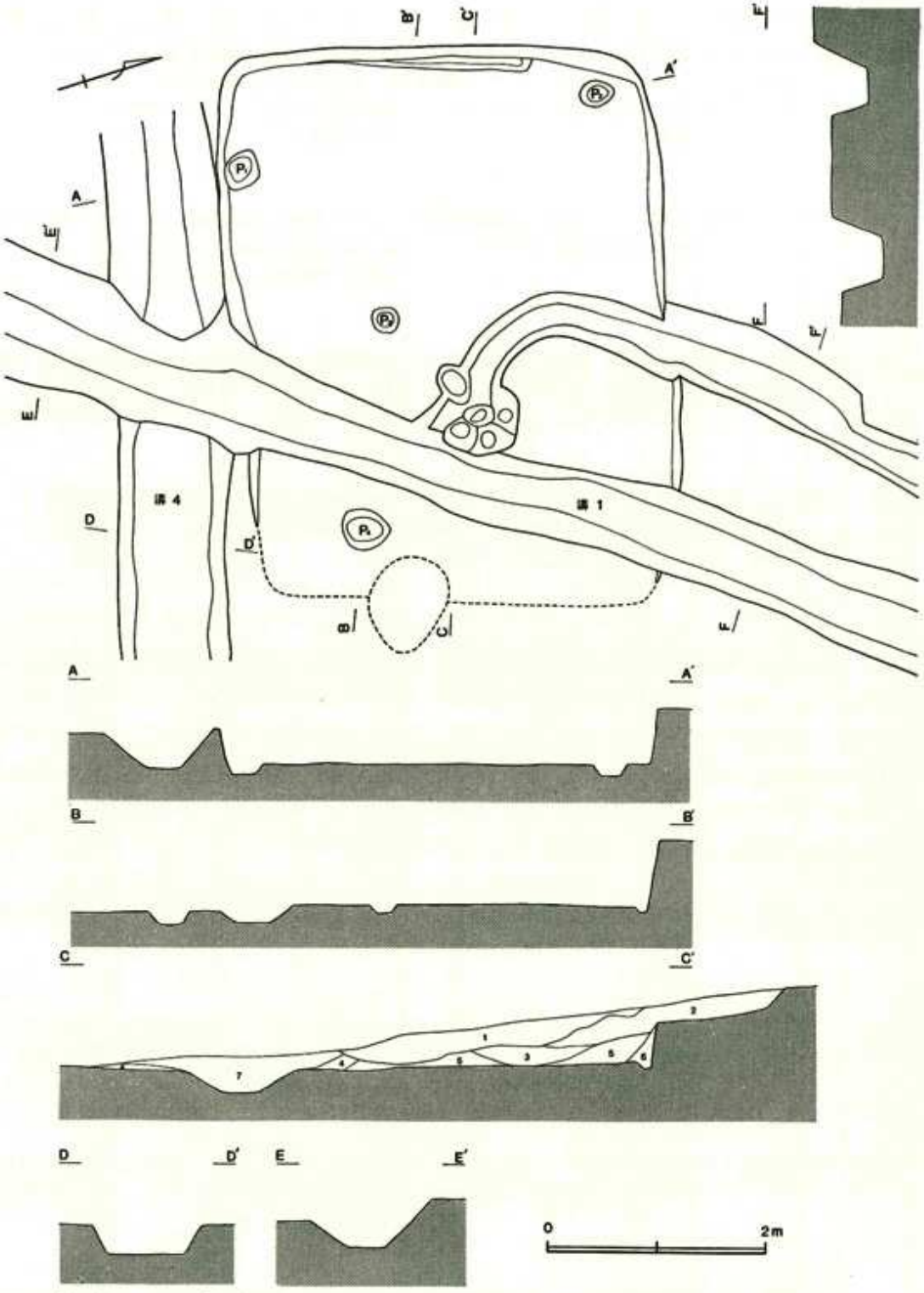
第30図　11号住居跡出土遺物実測図

12号住居跡（第31図・図版10）

発掘区の中央部東側にある。南7*m*に11号住居跡がある。中央部を1号溝が南北に走り、これに切られている。又、東側は確認面が床面の高さの為、推定によった。大きさは5.05×4.08*m*の長方形、主軸の方向はN—109.5°—E。竈は東壁にあったものと思われる。ピットは4ケ所にあるが、5～10cm程と、浅い。壁溝が西壁に沿って一部掘られており、斜面部の為の水対策とも考えられる。遺物は覆土中から土師器坏・甕、須恵器坏・長頸瓶・蓋等の破片、土錘等が出土している。

12号住居跡出土遺物（第32図・図版25）

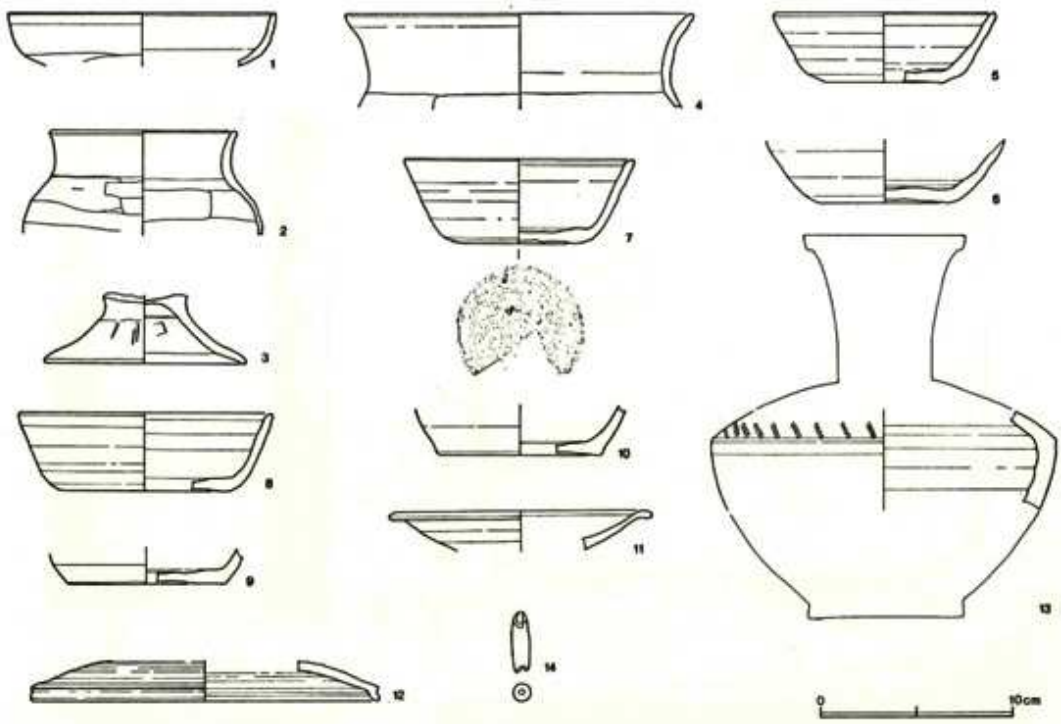
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師坏	1	口径　13.7 器高　2.2	丸味をもつ底部から稜を持って立上がり、口縁部は外傾気味に直立する。	内面・口縁部横ナデ、体部篦ナデ、底部篦削り、外面整形時の亀裂が多い。橙褐色、微・細砂粒。	80%残 覆土
台付甕	2	口径　9.4	肩部は丸味を持って張り、強く内傾し、稜を持って口縁部は直立気味に外反し、端部は丸味をもつ。	口縁部横ナデ後、肩部外面横篦削り、内面篦ナデ、胎土・内面橙褐色、外面煤付着、暗褐色、微・細砂粒。	口縁部10%残 覆土
台付甕	3	脚部径10.3	底部から括れて、段を持って外反し、裾部で更に外反し、端部をややつまみ上げる。	脚部横ナデ、接合痕をやや残す。微・細砂粒。	裾部10%残 接合部のみ完存、覆土
甕	4	口径　7.9	内傾する肩部から緩やかに括れて頸部は外傾気味に立上がり、口縁部外反し、端部をややつまむ。	口縁部横ナデ、肩部外面横篦削り。微・細砂粒、器面剥離顕著、淡褐色、外面煤付着。	口縁部10%残 覆土



1　暗褐色土　2　暗褐色土（ロームブロックを多量に含む）　3　黒褐色土　4　暗褐色土（ロームブロック含む）　5　暗褐色土　6　褐色土（ロームを含む）　7　暗褐色土（溝1）

第31図　沼下12号住居跡実測図

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	5	口径 11.3 底径 6.1 器高 3.6	底部はやや上げ底。体部は稜を持って外傾気味に立上がり、口縁部は立ち気味になり、端部は丸い。器壁厚い。	ろくろナデ整形。底部回転糸切り後、周辺部・体部下端回転篦削り端部磨滅、砂粒多い。灰色・軟質ろくろ目残す。	32%残 覆土
坏	6	底径 6.8	底部はやや上げ底。体部は丸味を持って外傾気味に立上がる。	ろくろナデ整形。底部回転糸切り後、周辺部回転篦削り、ろくろ目を残す。砂粒多い。灰色・軟質。	体・底部27%残 覆土
坏	7	口径 11.7 底径 6.8 器高 4.4	底部はやや上げ底、器壁厚い、体部は丸味をもって屈曲し、外傾気味に立上がる。	水挽き整形。底部回転糸切り、底部にろくろ目を残す。砂粒・石英砕片含む。灰色。	口縁20%・底部75%残 焼成良・覆土
坏	8	口径 12.9 底径 8.6 器高 4.0	底部やや上げ底。器壁厚い、体部は丸味を持って屈曲して、口縁部は外傾気味に立上がり、端部をかるくつまむ。	水挽き整形。底部回転糸切り、砂粒・石英砕片含む、灰色。 焼成　7・6・5坏に似る。	20%残 焼成良 覆土
坏	9	底径 8.1	底部やや上げ底、体部は稜を持って外傾気味に立上がる。器壁厚い	水挽き整形。底部回転糸切り、砂粒分多い、灰色・軟質。	底部30%残 覆土
坏	10	底径 8.3	底部やや上げ底、体部は稜を持って外傾気味に立上がる。器壁厚い	水挽き整形。底部回転糸切り、砂粒分多い、胎土淡褐色・器表灰色軟質。	底部30%残 覆土
皿	11	口径 13.7	体部はやや内湾気味に外傾し、口縁端部で大きく外反し、端部をつまむ。	水挽き整形。灰色、焼成良好。	口縁部20%残 覆土
蓋	12	口径 17.9	裾部は緩やかに外傾し、端部で折れ、先端をつまみ出す。	水挽き整形。微・細砂粒、淡茶褐色、半還元炎焼成。	裾部8%残 覆土
長頸瓶	13	肩部径 7.9	胴部は丸味を持って立上がり、肩部は張り、稜を持って内傾する。	巻上げ後、水挽き整形、肩部上面端部に櫛描き列点文をめぐらす。白色砂粒を含む、濃灰色。	肩部のみ18%残、焼成良好 覆土
土錘	14	残長 3.0 径 0.9	長楕円形を呈し、断面は円形。	微・細砂粒・橙褐色・焼成良。	70%残 覆土



第32図　12号住居跡出土遺物実測図

13号住居跡（第33図・図版10）

発掘区南側の一群中にある。本跡は15号住居跡と境を接しており、これより新しい。大きさは3.36×3.99mで主軸の方向はN—23.5°—E。壁高は西側で30cmを測る。床面はほぼ平坦で、東側がやや低くなっている。竈は北壁の東に偏った部分を掘り込んで、中央部は楕円形に掘り窪めている。層序からは天井部が崩れた様子がわかる。又、竈中からは伏せた状態の坏が出土しており、或いは竈の支脚として使用されたものかもしれない。ピットは1カ所確認されており、貯蔵穴であろう。遺物は上述の坏の他、須恵器坏の破片、灰釉椀破片が覆土中から出土している。

13号住居跡出土遺物（第34図・図版25）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	口径 13.6 底径 6.8 器高 5.0	底部やや上げ底。体部は厚く、外傾し、内湾気味になり、口縁部外反し、端部は丸い。高台はハ字状で低く、不整形。	水挽き整形、底部回転糸切り、体部外面にろくろ目を残す。粗雑な作り、細砂粒・石英片含む、淡褐色・底部淡赤褐色・一部黒褐色、二次的加熱を受けている。土師質。	口縁部80%残他完形 竈
須恵坏	2	底径 5.4	底部厚く、体部外反して立上がる。高台高くハ字状に立つが、内面で底部肥厚の為、浅い、端面に凹線を持つ。	水挽き整形。底部ろくろナデ整形。高台部外面に接合痕を残す。細砂粒・灰色。	底部のみ 覆土